31

明治四十三年一月以降

春城雜读

一

文魚亭

特別
14
1919
229

東京帝大史料編纂所

時
門 14
號 1919
卷 31

門 15
號 1980
卷 31

昭和十六年十月三十一日
市島謙吉

山にあるに違ひない。で僕は、法律家が稱して居る國家の主要元素の三つの外に、も一つ矛盾と云ふ元素を加へなければ、今の國家は眞の解釋が出來ないと、恁う思ふね。世界各國何處にも此矛盾がある樣に思はれる。』

『ハ、、、、主要元素は面白いが、眞逆さうではない。止むを得ないのさ。』

『でも餘り知れ切つた矛盾があるからね。或は矛盾は文明の一部かも知れない。』

彼の轉宅の理由も豫期よりは、馬鹿げて居たが、解つた。

漸く話が途切れたので、時計を出して見ると、十二時十分前である。で歸らうとすると、

『急に引越して君には其當時通知しなかつたから今日は、祝に一杯やつていつてくれ給へ。』と止られたので其意に從た。

＊　＊　＊　＊　＊

彼の家を出たのは夕暮近くであつた。醉醒の顏に、伊吹嵐が冷たい。

來るとはなしに大須觀音へ來て見ると、矢張賑かで、露店が出て居る、三文芝居がかかつて居る。

二王門を這入ると左側の小屋では、大蛇の畫看板を掲げて、

「印度はヒマラヤ山で生捕つた大蛇、胴の廻りが、五尺と八寸。代價は見てのお歸り、はあ入つしやい、いらしやい。』

と四十格好の男が、出鱈目を、鹽枯聲に怒鳴つて居る。

と自分は恁麼のを見に這入つて、何んだ馬鹿々々しい、嘘八百と思つた小供時代と、平松から聞かされた矛盾論とを同時に、思ひ浮べて、嗚呼之も矛盾ぢや。法律は詐僞を禁じて居た事を心付いた。（終）

樹立樹立

禾生

ふと君を墓にをくりし日を思ふ樹立樹立を風亘る夜に、
夜の風の砂卷き上げて走せて行く陸を明りのだんだら町に、
口に當て吹かむとせしも鳴らざりき朝戸の前の落葉樂笛、
裸火の煤吐く磯の魚の市、圓居の漁夫は赤き面して、
病む君の枕の花の萎たれぬ强き藥の香に籠る居間、
手をとれは取らせしまゝに搖き抱げは抱かれしまゝにやがて永眠りぬ、
はなるれば君をば戀へり相見てはさがなき詞をかはすものから、
冬枯の大木にかくれひそやかに春待つ音を耳當てゝ聞く、
狐狩る犬馴れ馴れて犬の子を狐が生みし話を思ふ。

早稻田大學圖書館展覽會

白影生

（一）馬琴忌辰展覽會

名家の忌辰に祭壇を設けて其人を祭る傍其人の遺著遺墨の類を陳列して故人を偲ぶの具となし又故人を研究する媒妁となす事は極めて趣味あり且適當なる尙又其上に研究に都合よき方便であると思ふ、早稻田大學圖書館は兼て斯かる所に考ふる所があつて名人忌辰展覽會と云ふものを興し昨四十年に其第一回として小山田與清翁の忌辰に其遺著遺墨を陳列して同好の士に示した事がある。而るに今年の十一月六日は會〻

早稻田大學圖書館

曲亭馬琴翁の忌辰に當り翁の去つて後丁度六十年に當ると云ふ所から第二回名人忌辰展覽會を開き翁の遺著遺墨を陳列して同月の六日七日の兩日に亘つて學生は勿論廣く一般公衆の縱覽を許した、所が非常の盛況を呈して第二日の如きは餘りの大入で屢々滿員の札を揭げ一時入場を止めた程であつたから遂に日延べをする事になり翌八日が恰も日曜に當るのを利用して引續き開會したが、此三日間の入場者は學生公衆合して三千に上つたと云ふ事である。

今展覽會の模樣を概略述べて見んが先づ來賓の控所に當てゝある一室に行て見ると馬琴翁の肖像並に翁の墓碑銘を撫した搨本が揭げてあると其の前には嚴かに香華が捧げられてある、周圍には種々翁の遺愛の品が陳列してあつた、其內殊に珍品と思はれたのは饗庭篁村氏の珍藏にかゝる翁の陶枕であつた、これは翁の友人で高松藩の家老木村默老と云ふ人が特に翁の爲めに製して贈つたものである、俗說に陶製の枕をして寐ると氣根が續き眼がよくなるとある所から當時既に眼に不自由であつた翁に之れを贈つたものである、今一つ珍らしい物は翁の遺印である、これは翁の菩提寺なる茗荷谷の深光寺に今現に藏して居るものであるが、丸形の印であつて『人生宇宙間、志願當何如、不行萬里路、即讀萬卷書』と刻してある、紀念として發行された繪葉書に押してあるのは即それである、此室に於て特に注意を引いたのは右二點であつた。

翁の遺著遺墨は階上の閱覽室に陳列してあつた、其全體の數は數百點に上り人目を驚す位であつたが市島館長の談によると、大體出品は早稲田大學圖書館に藏してある者を中心として帝國大學圖書館、帝國圖書館。岩崎家の靜嘉堂文庫其他諸家珍藏を借り集めたもので先づ翁の著述の內で有名なものゝ原本は幾んど漏れなく一室に集まつたと云うてよろしいと云ふ事である。

更らに詳しく出品の模樣を記する前に、一應早稲田大學圖書館の所有に係る翁の自筆著作物の由來を明らかにしておきたいと思ふ、これに就て市島館長の語られる所を聞くに、早稲田には翁の自筆物は殊に多くある此點に於ては確かに他の圖書館を凌駕して居る如何してそんなに集まつて居るかと云ふに、往年翁の遺族が窮した時分家に藏してあるあらゆる書物……凡二行李程のものを饗庭篁村氏に讓つた事がある、翁の遺墨は世間に散在して居るけれども其重なるものは遺族の家に在つたのであるから、重なるものは此時一括して饗庭氏の手に歸した譯であつた、然るに近年饗庭氏より讓受け其の全部が早稲田の書庫に歸したのであるから、早稲田のは數量に於ても品質に就ても其粹を集めたものと云ふを得るのである扨て由來は爰に止めて見聞した事を記するのであるがそれには陳列目錄を先づ揭げるが順序でもあり便利でもあるから全體の目錄を左に收むる事にした、此目錄は圖書館に於て作られたものであるから正確なものである、大體陳列の方法は分類的になつて居て、流石專門家の手になつただけ如何にも整つて居る樣に見受けた。

曲亭翁忌辰會遺著遺墨展覽會陳列順序

第一　碑銘、扁額、印章、手簡、詠草、傳記部

第二　日記名簿部

第三　著述部

（イ）刊本、寫本

（ロ）自筆原稿

（ハ）雜

第四　自筆寫本部

第五　自筆書入本部

第六　手澤本部

第七　瀧澤家遺墨部

第八　羅文、鷄忠、琴嶺部

（イ）自筆本

（ロ）手澤本

第九　雜之部

第一　碑銘、扁額、印章、手簡、詠草、傳記部

備考目錄中特に藏者を記せざるは凡て早稲田大學の館藏なり

墓碑銘		一幅	本館藏
曲亭翁手簡	鶴屋喜右衞門宛	一通	林若吉氏
曲亭翁手簡	丁字屋宛	一通	中川德基氏
曲亭翁手簡	椒助宛、京傳宛、丁字屋宛、（名人手簡本）の內	三通	市島謙吉氏
渡邊華山手簡	曲亭馬琴宛	一通	市島謙吉氏
曲亭翁詠草		一枚	坂本慶治氏
曲亭翁詠草	（花月帖）の內	四枚	吉田久兵衞氏
扇面手蹟		一葉	中川德基氏
扇面扁額		一面	島村瀧太郎氏
曲亭翁賛歌		一幅	朝倉龜藏氏
同上		一幅	大橋義三君
陶枕	屋島燒	一箇	饗庭篁村氏
大空武左衞門畫像識	曲亭翁題識	一葉	饗庭篁村氏
瀧澤馬琴	塚越停春著	一册	饗庭篁村著
曲亭馬琴		一册	

第二　日記、名簿部

入門名簿	自寬政九巳年九月至文化三丙寅年八月	一册	
瀧澤家訪問往來人名簿	馬琴自筆本	一册	
兀益の記	馬琴自筆本	一册	
雅俗日歷　卷三	馬琴自筆本 文政九年日記	一册	帝國大學圖書館
贈答歷　馬琴自筆本	自天保二年至同六年十月日記	一册	同
戊子日記	馬琴自筆本 文政十一年日記	一册	
辛卯日歷	馬琴自筆本 天保二年日記	一册	帝國大學圖書館
壬辰日記	馬琴自筆本 天保三年日記	一册	
癸巳日記	馬琴自筆本 天保四年日記	一册	
甲午日記	馬琴自筆本 天保五年日記	一册	帝國大學圖書館
丙申日記	馬琴自筆本 天保七年日記	一册	同
丁酉日記	馬琴自筆本 天保八年一月より日記同九年二月まで	一册	同
戊戌日記	馬琴自筆本 天保九年三月より	一册	同
己亥日記	馬琴自筆本 天保十年	一册	同
庚子日記	馬琴自筆本 天保十一年	一册	同
辛丑日記	天保十二年	一册	同
壬寅日記	天保十三年	一册	同
癸卯日記	天保十四年	一册	同
甲辰日記	天保十五年五月より日記同十六年三月まで	一册	同
乙巳日記	弘化二年四月より同三年二月まで	一册	同
丙午日記	弘化三年三月より同四年一月まで	一册	同

早稲田大學圖書館

第三 著述部

本部は（イ）刊本、寫本（ロ）自筆原稿類（ハ）雜部の三に分つ

（イ）刊本 寫本

本欄は曲亭翁の著書の刊寫本を著述年代又は刊行年序に順ひ配列し年代の推知し難きものは末尾に置く

俳諧古文庫 曲亭馬琴作 一冊 帝國圖書館
廿日餘四十兩盡用而二分狂言 歌川豐國畫 寛政三年 同
御茶積十二因緣 寛政五年 一冊
鼠婚禮塵劫記 曲亭馬琴作 歌川豐國畫 寛政五年 一冊 帝國圖書館
荒山水天狗鼻祖 寛政五年 一冊
花團子食家物語 曲亭馬琴著 山東京傳校 寛政五年 一冊 帝國圖書館
笑エリタテゴメ府粉建米 曲亭馬琴著 北尾政美畫 嘉永六年序文（寛政五年前板） 一冊 同
福壽海兎量品玉 曲亭馬琴著 勝川春朗畫 寛政六年 一冊 同
高尾船字文 曲亭馬琴著 寛政八年 一冊
心學梅日莊子 曲亭馬琴著 北尾重政畫 寛政八年 一冊 帝國圖書館
小雲雨ショウ〜アメ見越松球一 曲亭馬琴著 寛政八年 一冊 同
堪忍五兩金言語 同 一冊 同
無筆節用似字盡 北尾重政畫 寛政九年 一冊 同
加古川本藏綱目 曲亭馬琴自筆原稿 寛政九年作
北國順禮唄方便 曲亭馬琴著 寛政九年 一冊
楠正成軍慮智輪 同 一冊
鼻下長生藥 同 寛政十年 一冊
似字盡後編產想案文當字揃 同 同 一冊 帝國圖書館
戲聞盧梅餘史 同 寛政十一年板 一冊
同（人情本傑作集の內） 同 一冊
料理茶話即席說 同 寛政十一年板 一冊
同 同 一冊 帝國圖書館
戲ヤクシャ子名所圖會 同 歌川豐國畫 寛政十二年板 一冊
備前播盆一代記 曲亭馬琴著 寛政十二年板 一冊
胴人形肢體機關 曲亭馬琴著 寛政十二年 一冊
人間萬事塞翁馬 同 同 一冊 帝國圖書館
視モルオクスリ藥霞報條 曲亭馬琴著 北尾重政畫 寛政十二年 一冊 同
曲亭一風京傳張 曲亭馬琴著 享和元年板 一冊 同
同 同 一冊
繪本復讐錄 同 同 一冊 帝國圖書館
不落キリオトシ親ウチザル場 同 一冊
敵討蛋取眼 曲亭馬琴著 北尾重政畫 享和元年 一冊 帝國圖書館
初丁簡年題記 曲亭馬琴著 榮松齋長喜畫 享和二年 一冊 同
老了六冊掛德用草紙 曲亭馬琴著 享和二年 一冊

衣食住三ケ國世帶評判記 曲亭馬琴著 享和二年 一冊
羈旅漫錄 同 明治十八年板 三冊
太平記忠臣講釋 曲亭馬琴著 歌川豐國畫 享和二年 二冊 帝國圖書館
月氷奇緣 同 二冊
陰陽珍紋圖彙カゲトヒナタ 同 享和三年板 一冊 帝國圖書館
蓑笠雨談 同 享和四年正月板 三冊
臍沸西遊記 曲亭馬琴著 享和三年板 一冊
御伽怪談五人拍節言 曲亭馬琴著 北尾重政畫 享和四年板 一冊 帝國圖書館
松株木三階奇談マツノカブキ シンバンガハリマシタ 同 文化元年板 一冊
新研十六武藏坊 同 一冊
敵討二人長兵衛 同 一冊
復讐奇談稚枝鳩 同 明治十九年三月板 二冊
四天王剿盜異錄 同 文化元年 一〇冊
奉ウチタテマツル打札所誓 同 文化二年 一冊 帝國圖書館
武者修行木齋傳 同 自筆原稿 備考 本欄には書目のみを置き本書は自筆原稿類の中に置けり
銘正夢楊柳一腰 同 一冊 帝國圖書館
椿說弓張月 同 明治十六年十一月板 一〇冊
同（帝國文庫四六奇書本） 一冊
同（帝國文庫本） 二冊
敵討鼎壯夫 同 文化三年 一冊 帝國圖書館
敵討雜居寢物語 曲亭馬琴著 文化三年板 一冊 同
墨田川梅柳新書 同 文化四年一月板 六冊
同 同 明治十六年九月板 一冊
三七全傳南柯夢 同 葛飾北齋畫 文化四年板 一九冊
同 曲亭馬琴著 明治十六年三月板 二冊
新累解脫物語 同 文化四年春板 五冊
同 同 明治十七年九月板 一冊
賴豪阿闍梨怪鼠傳 同 一〇冊
雲妙問雨夜月 同 七冊
同 同 明治十九年五月板 二冊
松浦佐用姬石魂錄 同 文政十一年正月板 三冊
同 同 明治十六年六月 九冊
三人六部甦生嬰兒敵討鼓瀑布 同 文化四年板 備考 原稿本と對照の爲め本欄には書目のみを置く
碗久柳卷話說 同 文化十四年板 五冊
松山柳卷話說 同 一〇冊
俊寛僧都島物語 同 二冊
同 同 明治十六年板 二冊
松染情史秋七草 同 明治十六年十二月板 一冊
旬殿實々記 同 一冊
復讐驛路春錦柴物語 明治十九年 五月板 節亭琴驢述 曲亭馬琴補綴
快事節亭琴驢の署名あるも實は馬琴の著なり 文化五年正月板 備考 原稿本と對照の爲め本欄には書目のみを置く
夢想兵衛胡蝶物語 曲亭馬琴著 明治十五年九月板 二冊

夢想兵衛胡蝶物語　曲亭馬琴著（帝國文庫四大奇書本）　一冊
燕石雜志　同　文化八年正月板　六冊
昔語質屋庫　同　文化七年肇秋板　五冊
同　同　明治十六年八月板　二冊
常夏艸紙　同　明治十九年四月板　一冊
青砥藤綱摸稜案　同　明治十七年二月板　二冊
烹雜の記　同　同　二冊
絲櫻春蝶奇緣　同　（百家說林本）　一冊
同　同　明治十九年四月板　一〇冊
皿々郷談　同　同　二冊
同　同　明治十六年六月板　八冊
美濃舊衣八丈奇談　同　天保十二年再板　一冊
南總里見八犬傳　同　明治十九年六月　六冊
同　同　明治名山閣板　五〇冊
同　同　（帝國文庫本）　一〇六冊
朝夷巡島記　自初編至八編　同　安政五年正月板　三冊
同　同　（續帝國文庫本）　四〇冊
玄同放言　同　文政三年板　一冊
伊波傳毛之記　同　寫本　五冊
照子池浮名寫繪　曲亭馬琴著　文政五年板　備考　原稿本と對照の爲め本欄には書目のみを置く　一冊　木村正辭氏
金毘羅船利生纜　同　文政七年板　一冊

以下不明の分

殺生石後日怪談　同　明治十九年四月板　二冊
耽奇漫錄　備考　本欄には書目のみを置き自筆原稿本欄に置けり
兎園小說　石川雅望自筆本　同　寫本　一四冊　大槻如電氏
同　同　（百家說林本）　一冊
近世說美少年錄　同　文政十一年　四五冊
同　同　（續帝國文庫本）　一冊
雅俗用文　同　同　一冊
風俗金魚傳　同　明治十九年十二月板　一冊
水滸後傳批評半閑窓談　同　曲亭馬琴著　寫本　一冊　帝國圖書館
同　同　寫本　天保二年四月跋　四冊
同　同　同　二冊　靜嘉堂文庫
開卷驚奇俠客傳　同　天保六年板　二五冊
本朝水滸傳批評　同　寫本　一冊
三遂平妖傳　同　同　本欄には書目のみを置き自筆原一冊稿本の中に置く
續西遊記國字評　同　同　天保四年五月跋　一冊
近世物之本江戸作者部類　同　（溫知叢書本）　一冊
新編金瓶梅　同　天保元年より　一〇冊　吉田半迂氏
同　同　明治十七年八月板　一冊
新局玉石童子訓　同　曲亭馬琴著　弘化四年板　三〇冊
女郎花五色石臺　同　弘化五年正月板　八冊

自撰自集　同　寫本　一冊　帝國圖書館
曲亭水滸傳　同　九冊
洛外の古迹　同　（增補紀行文集の內）　一冊
旅人のため　同　一冊
後はむかし物語　手柄岡持著　石川雅望補記　曲亭馬琴補（燕石十種本）　一冊
ばせう頭陀物語　建部涼帽述　曲亭馬琴旁註　寫本　一冊
藻屑物語　曲亭馬琴批評（燕石十種本）　一冊

（ロ）自筆原稿類

本欄は原稿類を著述の年序に順て配列し其不明に屬するものは末尾に置くことゝす

俳諧古文庫　百川合會叙　一冊
風月菴主に答ふる文　附東岡舍藏書目錄　寛政九年七月付　一冊
加古川本藏綱目　寛政十一年十月十三日跋　一冊　林若吉氏
笠の露　羅文居士初回忌追善　寛政十二年八月十四日　一冊
夢の秋　羅文居士三回忌追薦　一冊
羅文追善句集　羅文居士三回忌　寛政十二年捌月　一冊
羅文居士俳諧表六句　文化元年八月　一冊　林若吉氏
七回忌追善
武者修行木齋傳　前編後編の末尾　一冊　同
同　雲妙雨夜月　二之卷　一廿二葉　同
三人六部敵討鼓瀑布　一冊
鼇生嬰兒　二冊

復讐譯路春鈴菜物語　同　文化四年板　（原稿本と參觀の爲め本欄に置く）　合本一冊　同
快事譯路春鈴菜物語　同　前編下卷　文化五年正月板　（原稿本と參觀の爲め本欄に置く）　一冊　林若吉氏
同　同　文化十四年八月九日稿了　一冊
豐後國六郷山雨子寺大緣起　文化十五年　一冊
豐後州國埼郡雨子寺略緣起　一冊　安田善之助氏
伊波傳毛之傳　二冊　朝倉龜藏氏
照子池浪名寫繪　曲亭馬琴著　溪齋英泉畫　文化五年板　（原稿本と參看の爲め本欄に置く）　一冊　帝國圖書館
同　同　（阿修羅愚考と合冊）　一冊
淵鑑類函馬抄錄　八冊　饗庭篁村氏
金毘羅船利生纜　同　曲亭馬琴著　溪齋英泉畫　文政七年板　（原稿本と參看の爲め本欄に置く）　七冊　同
耽奇漫錄　卷十　馬琴、琴嶺自筆本　二冊　帝國大學圖書館
同　南總里見八犬傳　自八輯卷一　自九輯卷五十三　三七冊　安田善之助氏
八犬傳俠客傳評答　一冊
阿修羅愚考　一冊
栖鉢雨談序　一
新編金瓶梅　第七集七、八卷　第九集一、二卷　四　林若吉氏
同　第七、八、九、十集　第十集　天保十三年板　（原稿本と參看の爲め本欄に置く）　合本二冊
同　一冊
女郎花五色石臺　一、四集　（代筆）？　二冊
惜字雜錄　六
故事部類抄　五冊
無名句集　（本書の書名を失せしに付き假りに無名句集とす）　三冊
老鳥菴評批言の辨　一冊

曲亭閒記　卷三、四、　二冊
異聞雜稿　（天保八、九、年頃のもの）　一冊
三遂平妖傳國字評　一冊
醴新書　一冊　千秋季隆氏

（八）雜部

本欄は翁が著作を後人の雜纂類編せしものを集む

曲亭題跋　江川亭佳友編　二
天保癸卯仲冬（寫本）
曲亭遺稿　松村操編　一冊
明治十六年二年
曲亭雜記　渥美正幹編　一冊
明治二十二年十二月
馬琴傑作集　（帝國文庫本）　明治三十五年三月　一冊
續馬琴傑作集　（帝國文庫本）　明治三十四年十二月　一冊

第四　自筆寫本部

本部に翁が手寫せるものを集む

皇統授受圖　山宮惟深著　一冊
續紀小識　村田春海著　一冊
殘櫻記　伴信友著　一冊
佐渡事畧、八丈筆記　一冊
千姪に俳諧を禁ずるの文　鳴鳳鄕述　一冊
蕉門頭陀物語　建部涼岱著　一冊
はなさく松、三議一統之辨　一冊
れざめのすさび　石川雅望著　一冊
俠客傳京師淀新評　淀屋新太郎評　一冊
八犬傳疊翠君評並答評　石川疊翠評　二冊
自百四回至百十五回
享和のはやり神　一冊

第五　自筆書入本部

本部には翁の自筆書入せるものを集む

平妖傳　嘉慶壬申春（七卷以下三冊寫本）　六冊　帝國圖書館
日本外史　寫本　二二冊　黑木安雄氏
本朝水滸傳　前編　安永二年板　三冊　靜嘉堂文庫
同　後編　寫本　五冊　同
讀史餘論　寫本　七冊　帝國大學圖書館
拾補日本後紀　寫本　一〇冊
本朝紹運續錄　安永癸巳冬改補　一冊
將門記　大須眞福寺本影寫本
源平系圖　一冊
櫻雲記　寫本　一冊
奧州後三年記　寫本　一冊
北條分限帳　寫本　一冊
足利學校書目　吉安資坦著　一冊
後は昔物語　寫本　一冊
濱の眞砂、兩菩薩巡拜記、春湊記並附錄　大鄕信齊著　一冊
通支算法記　寫本　一冊
三七全傳南柯夢　一四冊
院本釋文　寫本　一冊
新猿樂記　寫本　一冊
遲羅紀事　寫本　一冊
明水滸後傳序評　寫本　一冊
板水滸後傳序評　王世貞　四冊
宛委餘編　寫本　一冊
藻屑物語　寫本　一冊
歸鄕日記　著者が天保六年三月江戸より讃州高松に歸省せる紀文　寫本　一冊
戊子八月初旬京師奇談　寫本　一冊
八犬傳老默評　附金瓶梅第六集稗史外題鑑　木村默老評　寫本　三冊
自第八輯上帙至第九輯下帙

金瓶梅五集　殿村篠齋　木村默老　小津桂窓評　一冊
八犬傳九輯下帙　桂默兩評　寫本　一冊
八犬傳桂窓評並答評　小津桂窓　木村默老評　寫本　一冊
自八輯下帙至九輯下帙　小津桂窓評　寫本　五冊
八犬傳疊翠君評並答評　石川疊翠評　寫本　一冊
自百十六回至百二十五回
八犬傳篠齋評並答評　殿村篠齋評　著者自筆本　一冊
自八輯下帙至結局下編
俠客傳二集桂松評並答評　寫本　一冊

第六　手澤本部

本部には翁の所藏せし諸書を集む

犬追物御覽記　正保四年　寫本　一冊
露川貴　蓮二房　山本兎岡自筆寫本　一冊
松窓雜錄　石川疊翠著　寫本　一冊
魯西亞志　桂川甫周譯　寫本　一冊
梅櫻日記　小津桂窓著　寫本　一冊
瓊浦偶筆物類和漢稱呼部　澤元愷著　寫本　一冊
答問鈔　葵亭道人著　一冊
元亨釋書王臣傳論　谷重遠著　一冊
水鳥記　一冊
瞽女口說地震の身の上　一冊
義貞軍記　寬永六年春　一冊
日本書紀撰者辨　河村秀興　同秀根　文化壬申冬　一冊

奧羽軍記　一名陸奧話記　寫本　一冊
讃岐國香川郡直島全圖　寫本　一冊
讃岐直島長三宅氏由緒　寫本　一冊
日次紀事　妄須恒德著　一冊
本朝醫談二編　一冊
烏龍痒中丸、救長藥方錄、方道案內書、　合本　一冊
圓治欄干圖說抄　寫本　一冊
地震考　寫本　一冊
土佐日記　付いほぬし（群書類從本）　一冊
秘記諸留書　寫本　一冊
黃帝宅經　苗村元長著　文化十年再板　一冊
綠起部類　六冊
後西遊記國字評　木村默老評　一冊
告志編　寫本　一冊
正德四年金銀後代御條目　中に馬琴手寫の簡處より　合本
寬政三年町法被仰渡書　一冊
鼈頭繪入三國志演義　七冊

第七　瀧澤家遺墨部

本部には瀧澤家家祖より琴嶺に至る一族の手簡手蹟並遺愛の書畫類を翁が數幅に裱裝せしめしものを集む

家廟遺墨　五軸
整惜字紙小成　二軸
陳洪綬水滸百八人畫像臨本　一軸
清陸謙畫水滸百八人像贊臨本　馬琴奥書　一軸
海鰌圖說　一軸
玉照堂遺愛字紙　二軸
受通流渡鶯鶯別集　一軸

第八　羅文鷄忠、琴嶺部

本部には羅文、鷄忠、琴嶺、の著書、自筆寫本、並に手澤本を集む

（イ）自筆本

東岡舍附合集　自寛政二年至同十年　羅文自筆本　三冊
八百韵書拔附夢見草　羅文居士七回忌追薦の記　同　一冊
寛政九年二月八日點
師竹庵閒書　同　一冊
繪圖兩談草稿　同　一冊
誹諧有也無也之關　同　一冊
甲川天目山棲雲寺十境詩歌　同　一冊
麥林發勤集　鷄忠自筆本　一冊
俳諧論　雲徑著　鷄忠自筆本　一冊
琴嶺雜記　卷之一　琴嶺自筆本　一冊
楊州十日記　同　一冊
類證本事方抄錄　同　一冊
普濟本事方抄錄

（ロ）手澤本

一人三臣和歌　寫本　一冊
俳風月の兩話　寫本　一冊
三芝居吉原由緒書　寫本　一冊

第九　雜之部嶺

犬夷評判記第二編稿料　三枚園篠齋批評著作堂評釋　一冊
犬夷評判記　櫟亭琴魚自筆校書　寫本　一冊
增俳諧歳時記　藍亭青藍增補　嘉永四年十一月板　五冊
補俳諧歳時記類草　本寫　一冊
伏請考訂玄同先生

此總目錄を見ると此展覽會は翁の自筆原稿を主なるものとして居る事が分るが而して其參考となるべきもの譬へは刻本の如きも悉皆陳列されて居るのである、陳列品數は中々數多い事であるから今其一々に就いて云ふ事は到底出來ないのであるが、幸に市島館長より說明を聞いた重なるもの丈けに就て大略を紹介しようと思ふ。

南總里見八犬傳自筆原稿　本品は早稲田の藏本であつて八輯卷一より九輯卷五十三まで冊數三十七ある本展覽會に出品されて居るものゝ中では先づ第一に價値あるものとして擧げなければならぬ、八犬傳の原稿は所々に散亂して纏まつて在るのは少ないのであるが、早稲田のは冊數も多く且標本として最も適當とすべきものである、即ち此三十七冊の自筆原稿には翁か健全の時に書いた部分と、失明に至る頃及失明後娘に口授して書かせた部分とを含むて居つて翁が八犬傳を書いたに就いての有名な逸話の部分は爰に其證據を止めて居るのである、健全の時の原稿失明に至らむとする頃の原稿、及娘に代筆させた時の原稿と順を追ふて見て行くと翁が苦心を察せられる、始めの程は字畫も正しく立派に出來て居るものが漸く筆蹟覺束なくなり來つて字も太く分らなくなり罫紙の行にも嵌まらずなり原稿面は亂脈になつて居る、挿畫なども終りの方になると只單に粗末な型のみが出て居るばかりである娘に代筆させた部分の挿繪は最早專門家の手になつて居る、此等前後相照して見ると翁の苦心もさる事ながら又翁の我の強いきかん氣の人であつた事が明白に覗はれると同時に翁が此一代の大傑作に向つて注いた熱心の程か分るのである、失明の後までも其作をつゝけたと云ふ話を聞くのみでも吾人は襟を正さゝるべからざるの感にうたれるのであるが、現に其苦心の跡を原稿の表に見せられては涙ある者の誰か翁の爲に巾を濕ほさずしてやむべき……實に翁か斯く迄にして其作

を大成せしめた事は文藝界に於ける一佳話であると共に斯道に携はる人の敎訓ともなるべき事であらう、斯く考へ來れば此等は天下に尤も貴き遺墨の一として擧げらるべきものであらうと思はれる、前に本品を目して當展覽會第一の價値ある品とした理由は全く此處にあるのだ、本品の外に帝國圖書館の所藏にかゝる八犬傳原稿も出て居つたがこれは翁の健全時代に成つたのである。

（イ）家乘部　（ロ）日記　翁の自筆の日記であつて總べて十六冊陳列されて居た中に早稲田藏三冊を除けは皆帝國大學圖書館の藏本である、これは一年分を一冊として綴ぢ上げたもので、無罫の半紙に殆んど餘白のない程細字で書き詰めてあるから至て讀み惡いものであるが、これも前記の八犬傳と同じく失明の頃と失明後のとあつて趣のあるものである、失明頃のは矢張字體不明であつて翁が苦しながらも自分で書ける內は自ら筆をとつた熱心の程が察せらるゝ、娘に書かしたのは全く明を失つて仕方がなくなつてからの事であるらしいが矢張ヒドク綿密にいつて居る所を見ると每日口やかましく言ひつけて書かせたものらしく思はるゝ、日記に書いてある事柄は私事が主となつて居る樣である中には細君が劇烈なヒステリーに罹つて所々方々に出歩いては良人の惡口を云ひ觸らすに就ての苦情などが記されて居る、一代の文豪と云はるゝ翁も此病妻には餘程閉口したらしく見える。

（ロ）入門名簿　これは翁が寺小屋を開いた時分に其入門者の名を連署したものと見え其中には女子供の名を錄してある外格別の人が見えない。

（ハ）瀧澤家訪問往來人名簿　これは名の示す如きものであつて其中には當時の名家の名が散見せらゝ。

（ニ）贈答歷　中央に橫線を引いた半紙で綴つてあつて其中には人より物を貰つたり自分より人に贈つたりした物を一々書き付けてある、讀むて見ると人からは種々の品物が貰つてあるに對して翁より御返禮は重に自家製造の黑子丸である、これ等も翁の性格を見るに一助となる記錄であらう。

（ホ）无益の記　本書には翁が小禽金魚盆栽などを樂しむだ勘定書が載つて居つて其金高を見ると今日の千圓以上にも當る程であるが、これ等のものは翁が保養の爲めに飼つたのであると云ふ事になつて居るが、其序文にかゝる道樂等は時間を徒に費するのみでなく金錢を浪費する事は賭博同樣であるから後世子孫は決して手出しをしてはならぬと戒めてある、恐らく翁は斯樣の事を營業にやつたのであるまいか、そして失敗したから子孫の戒にもと記錄にしたのでなからうかと思はれる、此逸話は從來の翁の傳記には載つて居らぬ事實で而も興味のあるものである。

著述部　（イ）盡用而二分狂言　翁が小說を書き初める前に例の黃表紙を多く書いた事は傳記に依て明らかなる事實であるが、それ等のものは大部分無くなつて今日殘つて居るものは少ない、只常に帝國圖書館に數冊藏されてある、本書は其內の一冊で翁の處女作である。

（ロ）耽奇漫錄　本書は世人の知る如く當時の好事家が各自見聞した珍らしい事柄を文章に綴り又は畫に現はして互に持ち寄り其奇を誇り合つたものを集めたものであるが其內翁の手

になつたもの三冊だけが爰に陳列されて居た、自筆原稿物として珍らしいものである。

(ハ)俳諧古文庫　翁の俳諧に耽つた時分の草稿は多く早稻田に藏されて居るが、其内でも本書の如きは珍らしいものである、それは翁が例の風俗文選に倣つて兄の羅文其の他の俳友と俳文を作つて出版を企てた時の原稿であるが後に翁は大家となり斯樣なものを出版する事を恥ぢたものらしく自分の名丈けは墨を以てクロ〳〵と塗抹してある、特に此點は觀者の興を引くと同時に本書の珍本として價値のある所であらうと思ふ。

(ニ)伊波傳毛之記　これは自筆物としては極めて珍らしいもので世人の知る如く翁が物した京傳の言行錄であるが餘り直筆してあるので當時京傳側からは苦情が起つたと云ふ傳說のあるものである。

(ホ)異聞雜稿　翁の隨筆物は數多くあるが其内本書は珍らしいものである、これを讀むて見ると種々面白い事が書いてある、其中にも改過筆記と云ふ一篇は翁が或時自分の家の模樣換をして庭に大きな池を掘つた所が息子宗伯が急に病氣に罹つたので翁も大に驚き家相家に相談して見ると方位を誤つた結果であると云ふ事が分つたので流石に翁も狼狽して前の如くに改め、以後は深く方位の學に志をよせたと云ふ事が書いてある、此等の事實も翁の普通の傳記には載つて居らぬのである。

(ヘ)醴新書　これは翁の筆をとつた引札及狂文の類を自筆で書き集めたものである。

(ト)三遂平妖傳國字評　これは今早稻田の藏本であるが、舊藏者饗庭氏の話によると餘程の珍本であるさうな、平妖傳は水滸傳の著者の作つたもので讀むで見て餘り面白くない者であるに拘らず、翁はいたく之れに感服したものらしく例の勸善懲惡の點より非常の名作と認め愛讀した餘りに其評を書いた、それが即此平妖傳國字評であつて外に副本が無いと云はれて居る。

書入本(イ)日本外史　書入本の中珍らしいものは本書である日本外史は翁の時分には未だ出版にならなかつたので、翁は友人より其寫本を借受けて之れを淨寫させた、用紙なども日本外史と云ふ字を刻した野紙を用ゐて居る、其跋を見ると流石の翁も山陽の文才と史才には服したと見えて大分褒めて居る。

(ロ)讀史餘論　これは翁が愛讀した本の一つであると云ひ傳へられて居る、陳列されて居る本を見ると如何にも嚴密に校正がしてあつて繰返し々々讀むた形跡がよく見えて居る當時既に白石の史論を重く見た點は流石翁の眼識の高かつた事がわかる。

(ハ)八犬傳諸家評　翁の著作に付する友人の批評を綴つたもので十數冊ある、諸家批評に對して翁は一々朱筆で答へを附加して居るが、これを見ると翁の著作の眞意も分つて極めて貴重なる參考書である。

遺墨部(イ)家廟遺墨　これは翁が自分の先代の草稿や手紙其他の反故を丁寧に集めて數本の卷物として珍藏したものであるが、見ると翁の父母祖父母等の文章等[illegible]

に出來て居つて翁の如き人が家に生れるのは決して偶然でないと云ふ事を思はせる、翁の傳を書くには誠に屈竟の材料である。

(ロ)水滸傳百八人畫像臨本　これは水滸傳中の人物を畫かせたものであつて二本の卷物となつて居る、其内の一卷は殊に立派なものであつて卷尾に一丈五尺許りに亘る長い跋文を添へて居るのであるがこの跋文は水滸傳の隱微を發揮した翁の得意の文章で翁の自筆であるが字も大きく至極見事のものである。

雜部(イ)木刻扁額　翁の短冊扇面印章等の如きも澤山陳列されて居つたが中にも面白く思はれたのは本品である、これは翁が嘗て深光寺に假寓した折自分の居室に掲げたもので文字は「芳流」としてある押してある印を見ると小野道風の書を臨寫したものである事が分る、芳流と云ふ字は恐らく流芳を逆にしたの者であらうか何となく八犬傳の信乃現八が爭つた芳流閣か思ひ起される。

(ロ)大空武左衞門畫像識　大空武左衞門とは熊本の武士で身長一丈何尺と云はれた巨人であるがこれは其巨人の像を寫させたものである、像の上にある翁自筆の題識によると渡邊華山が當時漸やく開けた寫眞術を以て撮影したものに依つて寫させたと書いてあるが、又珍品たるを失はぬと思ふ。

(二)消息展覽會

馬琴の忌展展覽會に添へて、此消息展覽會の開かれたのは近頃趣味ある企たてと思はれる、一體圖書の展覽會は世間に時々ある事で珍らしくもないが、消息ばかりを集めて展覽會を催すと云ふ事は餘り聞かない事である、從て此會は大分世人の注意を引いた、此會の開かれた動機に就き市島館長の話されたことを聞くに、近來學生社會殊に商科大學生の如き卒業後社會に立つに當つて手紙を書く事を毎日の仕事にせなければならぬ人々が、殘念ながら手紙を認める事に拙であるのみならず追々拙になり行く傾向がある、そこで早稻田大學では夙に此點に心して學生に手紙を習ふ事を奬勵し他日世の中に出でゝ立身の助となさしむる方針を取つて居る、此頃も特に館長は學長の意を含むで手紙に就ての一場の講話をされた(本誌百六十五號所載)、それと聯關して學生に古人の消息を見せて參考に供するの必要があると云ふ事になり、丁度馬琴忌辰展覽會を開く序に此會が開かれたのである。

一體早稻田の圖書館には雙魚堂文庫と云ふ名の許に古今の書翰が多く集められて居る、之れは市島館長の私藏で多年苦心の結果になつたものを圖書館に寄托してあるのであるが數に於ても夥しい者で又質に於ても貴重なものが少なくない、此の書簡文庫の寄托は早稻田大學圖書館をして異彩を放たしむる所以の一つであつて殆んど他には例の無い事と思はれる、所藏總數は現今二百五十卷計りあつて一卷約十通と見積つても二千五百通の書翰が藏せられて居る勘定になる、勿論八九分通りは古人の書翰であるが現代知名の人のも多く集められて居る、館長の話によるに今日の人のと雖も今より手に入れて置かなければ後に至ると丁度古人の書簡を今集めるのが困難である如く矢張困難を感ずるに相違ないと云ふ所から

之れに及むだと云ふ事である、要するに雙魚堂文庫の抱負は行く〳〵手紙圖書館を作つて學術の研究に資すと云ふのであるから採集の方面は極めて廣く、あらゆる社會に渉つて居る中には書畫屋が珍としてヒネル樣なものもあるが採集の目的は決して骨董的でない、世間には手紙をあつめて樂む人はないでもないが、例へば國學者が國學者の手紙を集め、俳諧師が誹諧師の消息を集めると云ふ樣な具合で、嗜む所好む所に偏する傾きがある、然るに雙魚堂文庫は嗜好に偏せず滿遍なく集むることを趣意として居る、何れかと云へば世間にいくらもある樣な高名の人のを避けて墨蹟餘り多く傳はらないもので筆者の名は高く無くとも其實學藝界に參考となるべき者を主として集めて居る、館長の說に虛名の高い人の墨蹟は自分が骨を折て保存するまでもなく自つから傳はるものであるから强て高價を拂つて集むるに及ばぬ、唯だ書畫屋などに喜ばれない人物の墨蹟は追々泯滅に歸するから、どうしても今いくばくか殘つて居る內に集めて置く必要がある、此等は其人の作物を見る以上の價値を有するもので其人の眞面目はこれでなくては見られないと語られたが如何にも其通りで圖書館に裨補せんとする此種の書類の採集は斯く無くては叶はぬと自分も感じた、

今回此展覽會に出陳されたのは七十五卷六百六十餘通であると云ふから雙魚堂文庫の藏簡の半分も出て居らないのであるが、それにしても階下の閱覽室全部に並べ切れないで餘りは馬琴展覽會場の一隅に並べ尙休憩室にまで陳列された位である、かばかり多數の手紙が廣ろい閱覽室に陳列された光景はなか〳〵見事のもので恰かも江海の限りなき白波を望見するの感があつた、館長自分も云はれた事であるが一體かゝるものを斯樣に澤山に一度に出す事は餘り好ましくない、書簡の如きものは一紙每に趣味のあるものであるから一々に就て翫味してこそ面白味の生じ來るものである、可成は十卷二十卷を展覽に供し充分翫味の餘地を存するが適當である、斯く一時に澤山ならべて觀者をして食傷せしむるは本意でないが度々こんな事を企つる譯にもゆかぬ所から已むなくコンナ事になつたと言はれたが、實に目の忙しいのは殆んど閉口した位である。

扨て大體に就て自分の見た所を云ふと、いろ〳〵の表題の附してある卷物並に折帖の內に、尤物と思はれたのは名家書簡と銘の打たれた二卷揃である、卷頭には廣島侯の執政澤三石の題辭があつて木下順庵を初めとし白石、闇齋、徂徠、益軒、仁齋などは勿論趙陶齋、蒹葭堂なども收めてあるがこれは三石自身集めた者であると云ふことで如何にも精選してある樣に見受けた、就中順庵徂徠仁齋の手紙は如何にも逸品で仁齋の手紙の中には己れの文章が天覽に入つた事實をあげて一門の光榮不過之と喜こんだこと抔の見える、此の二卷にも劣らない程のものは休憩室に陳列してあつた二冊の折帖であらう、これには林道春が卷頭に貼つてあつたが白石や祇南海や熊澤蕃山などが矢鱈に貼りつけてあつて白石と南海は何れも長簡で文面も餘程面白く感ぜられた、此中には近世畸人傳中に有名な僧桃水を初め二三の人物もあり池大雅、高芙蓉韓天壽のごとき面々もあり大鹽平八郎呈弋翰也などの昔金の

詫び狀や證文めかしい手紙も見受けられた、以上に次ぐものは恐らく先哲書簡と標題を附された數十卷の書簡であらう、これは藏者が先哲叢談中の人物を盡く取り入れ樣と多年苦辛して集めたものと聞いたが如何にも氣根よく集めたもので著名の學者は幾んど網羅されて居るやに見受けた、中には山內香雪の上木した例の名家書簡中の原本も二三交つて居るのを認めたが最も感服したのは高名の本草家がよく揃つて居つた一事である。

以上の外に名人手簡、書伯手簡、水府名家手簡、華胄遺墨などそれ〳〵類に依つて名を命じたものが各數卷出てゝ居つたが、名人手簡の中には戲作者俳優詩人などのごとき其他藝術家が多く集められてある、書伯俵屋伊年を冒頭とし各流派の書家が集まつてあるが就中面白く感じたのは渡邊華山が曲亭馬琴に與へた書簡、岡本秋暉が聯落（レンラク）の細長い唐紙に堅てに書いたものなどである、水府名士手簡の內には烈公を卷頭にして東湖杏所の學者連は勿論櫻田騷動に關係ある面々迄も網羅されてある、此外一家一卷となつて居る書簡も十數卷陳列されてあつたが此內垂涎を禁じ得なかつたは賴襄、白石、眞淵、南郭、春臺、蘭嶋、象山、掖齋などで何れも逸品と見受けたが休憩室に陳列してあつた加藤千蔭の手簡草稿其他友人門生などより寄せた消息類を集めた大卷物は殊に面白く感じた、此の卷物は千蔭の孫に當る人が遺墨の散佚を虞れて斷簡零紙に至る迄鄭寧に表裝し其家に久しく珍藏したものださうだが、中には千蔭が孫娘に書き與へた戲畫やいろはの手本や千蔭の門人なる俳優や遊女などより贈つた手紙など迄張込むであつて如何にも趣味の深いものである。

掛幅七八本、前賢遺墨と題せる二卷、これは重もに奉書消息の類をあつめたもので天正慶長あたりの古い時代の人も集まつて居り中には稀覯のものも見受けたが此の類は茶人が茶室に揭げてヒネル類があつて、多くの書簡を集めるに付ては是非這入らざるを得ないものであるが越味の上から云ふと天正慶長若くは德川の初代に近き頃の手紙は餘りに簡單に過ぎてどうも面白味が薄い樣に感ぜらるる、寧ろ矮箋に書く樣になつた頃の者が面白い樣に思はるゝ。

以上は雙魚堂の藏簡に就て所見の大略を記したのであるが當日諸家より陳列されたものも十數卷見受けた、其中では大槻文彥氏の蘭學者書簡二卷は面白く思はれた、木村正辭翁の出品の內に鳳潭の一幅は殊に面白く感ぜられた、鳳潭は華嚴宗では近世の大家であるが此人未だ修業中に師なる心庵と云ふ人から手紙を寄せてお前の樣に自馱落では業はならぬと痛く責めた其手紙が幅の中に張り込むであつて鳳潭が師の忌辰に當時を思ひ起し師恩を感謝して恭しく偈を薦めた其の偈が書き添てある、鳳潭の人となりも知れ亦敎訓にもなつて面白いものである、終に臨み圖書館で編成した當日の出陳消息目錄を借り受け左に附することにした

消息展覽會出陳尺牘

一　江月宗玩消息　壹幅
一　與謝蕪村消息　壹幅
一　心越禪師尺牘　壹幅
一　澤庵和尙尺牘　壹幅

一 小堀遠州尺牘 壹幅
一 細川三齋消息 壹幅
一 近衛豫樂院消息
一 加藤千蔭消息草稿（大巻物） 一軸
一 前賢遺墨 乾坤二巻（大巻物） 二巻

乾巻 伊達 政宗 黑田 長政 近衛三藐院 千利休
古田 織部 小堀 遠州 公辨法親王 僧 江月
龜田 寡樂 冷泉 爲村 金森 宗和 荻生 徂徠
細井 廣澤 華頂宮
坤巻 本阿彌光悅 松花堂 近衛三藐院 飛鳥井雅章
木下長嘯子 古田 織部 大橋長左衛門 初代 全 二代
有栖川熾仁親王 風早 實積 今出川公規
滋野井公麗 大隈 言道 花山院定誠

一 名家書翰 乾坤二巻

乾巻 木下 順庵 新井 白石 室 鳩巢 貝原 益軒
山崎 闇齋 梁田 蛻巖 伊藤 仁齋 荻生 徂徠
太宰 春臺 服部 南郭 大内 熊耳 宇佐美灌水
五井 蘭洲
坤巻 三宅 石庵 宮 筠圃 趙 陶齋 木村 巽齋
長久保赤水 山縣 周南 林 述齋 柴野 栗山
中井 竹山 古賀 精里 皆川 淇園 古屋 昔陽

一 名家遺墨 甲乙二帖

甲帖 祇 南海三通山縣 周南 伊藤 介亭 室 鳩巢
荻生 徂徠 宮 筠圃 熊澤 了介二通伊藤 東涯
大石 良雄 原惣右衛門 伊藤 仁齋 具原 益軒二通
斯井 白石 林 道春 木津 宗全 僧 南谷
皆川 淇園 中井 竹山 瀧 長愷 太田 南畝
稻生 若水 香月 牛山
乙帖 松尾 芭蕉 細谷 半齋 柴野 栗山 荻生 徂徠
篠崎 小竹 清田 君錦 大盧 後素 田中 桐江
澁井 太室 龍草廬
柳川 三省 頼 山陽 佐藤 長齋

加茂 季鷹 加藤 千蔭 僧 桃水 玄々庵
貫名 海屋 西依 成齋 中島 棕隱 尾藤 二洲
梁川 星巖 管 茶山 高 芙蓉 韓 天壽
池 無名 古賀 精里 立原 杏所 秋山 玉山
龍 草庵 賴三樹三郎 輪 池 六樹園
抱 一 京 傳

一 先哲書翰

第一巻 水戸 義公 芳 烈 公 近衛家熙公 松平 樂翁
大岡 越前 水戸 烈公 林 述齋
第二巻 松下 見林 壺井 義知 狩谷 掖齋 大久保忠寄
伊勢 貞丈 多賀 常政 松岡 辰方
第三巻 本阿彌光悅 藤井 貞幹 伊藤 華岡
佐々木晦山 北島 雪山 細井 廣澤 田能村竹田
貫名 海屋 谷 文晁 春木 南溟
第四巻 賀茂 眞淵 僧 道本 東江 源鱗
楫取 魚彦 內山 眞龍 前田 夏蔭 荷田蒼生子
第五巻 北村 正立 荒木田久老 加藤 千蔭
伴 蒿蹊 三浦 梅園 松井 幸隆 小澤 蘆庵
第六巻 近藤 正齋 僧 澄月 僧 慈延 加茂 季鷹
村田 了阿 屋代 輪池 石川 雅望 北 靜廬
高田 與清 市野 迷庵 塙 忠寶 北川 眞顏
松平 冠山 黑川 春村 山崎 美成 五弓 久文
第七巻 清原 雄風 本居 太平 藤井・高尙 橘 守部
足代 弘訓 木下 幸文 海・遊 翁 烏丸 光廣
冷泉 爲村 冷泉 爲泰
第八巻 島井 胖庵 藤森 弘庵 安積 艮齋
田口 江村 東條 琴臺 北小路竹窓 大槻 磐溪
第九巻 會澤 正志 立原 翠軒 立原 杏所 古賀 茶溪
西野 宣明 林 鶴梁 梁川 星巖 豐田 天功
淺田 宗伯 佐久間象山

第十巻 北村 篤所 柴野 栗山 佐藤 一齋 賴 山陽 佐藤 長齋
篠崎 小竹 菅 茶山 穗井田忠友 高田 與清
第十一巻 加藤 枝直 香川 景樹 深見 天漪 高 頤齋
中島 廣足 本居 內遠 石島 筑波 伊藤 蘭嶋
第十二巻 井上 文雄 横山 由清 平田 銕胤
矢野 玄道 渡 忠秋 貴名 海屋 谷 文晁
第十三巻 本居 太平 有賀 長伯 尾崎 雅嘉 椿 椿山
日野 資枝 松木 淡々 有賀 長基 福田 半香
僧 日脫 夏目 成美 惟草庵惟草 山口 素絢
第十四巻 三宅 道乙 板垣 宗憺 稻生 若水 後藤 艮山
松岡 玄達 吉益 東洞 小野 蘭山 多紀 安長
緒方 洪庵 岡 白駒 五井 蘭洲
第十五巻 柴野 栗山 西依 成齋 羽倉 用九 高 頤齋
江村 北海 林 述齋 田中 桐江 伊藤 蘭嶋
安井 息軒 青地 禮幹 高田 與清
第十六巻 熊澤 了介 貝原 益軒 石島 筑波
祇 南海 梁田 蛻巖 土肥 霞洲
伊藤 竹里 藤田 友閑 菱 湖
第十七巻 藤田 東湖 貫名 海屋 谷 文晁
野呂 介石 渡邊 華山 椿 椿山
浦上 春琴 僧 月仙 山口 素絢
第十八巻 僧 蕉中 僧 六如 僧 大潮 手島 堵庵
壺井 義知 前川 虛舟 小堀 宗中 古筆 了仲
第十九巻 梁川 星巖 中島 棕隱 篠崎 小竹 藤森 大雅
大槻 磐溪 芳野 金陵 齋藤 拙堂
第廿巻 高島 秋帆 川田 甕 土井 蓼洲 津坂 東陽
清宮 秀堅 岡本 花亭 門田 朴齋 吉川 久勁
太原 老谷 戸川 播磨 石川 之聚
第廿一巻 秦 滄浪 佐藤 一齋 古賀 精里 古賀 侗庵
第廿二巻 村田 了阿 加藤 千蔭 清田 龍川
足代 弘訓 小林 歐城 田中 大秀 屋代 輪池
巨勢 利加
第廿三巻 賀茂 眞淵 本居 宣長 本居 太平 村田 春海
加藤 千蔭 伴 蒿蹊
第廿四巻 橘 守部 石川 依平 千 春 加藤 萩園
小山田與清 源 長秋 平田 篤胤 全 夫人
全 鈴木 重胤 鈴木 重胤 矢野 玄道 高須 元尙
御巫 尙書
第廿六巻 近藤 正齋 狩谷 掖齋
第廿一巻 伊藤 蘭嶋 古賀 精里 古賀 侗庵 川路 聖謨
第廿二巻 安積 艮齋 朝川 善庵
松崎 慊堂 四巻
一 水府名家手簡 四巻
第一巻 源 烈公 青山 延光 豐田 天功 藤田 一正
藤田 東湖 武田耕雲齋 會澤 正志 立原 杏所
第二巻 立原 杏所 櫻井 任藏 金子 敎孝 茅根 泰
武田 正生 會澤 安 藤田 幽谷 瑛 相院
源 烈公
第三巻 久米 博高 藤田 晴軒 立原 翠軒 立原 杏所
會澤 安 武田耕雲齋 青山 延于
第四巻 立原 翠軒 十通
一 畵伯手簡 四巻
第一巻 俵屋 伊年 中山 高陽 中村 佛庵 貫名 海屋
田崎 草雲 渡邊 小華 松岡 環翠 皆川 淇園
上田 華堂 中林 竹洞
第二巻 與謝 蕪村 抱一上人 立原 杏所 谷 文晁
谷 文鳳 岡本 秋暉 五十嵐竹沙 喜多 武清
第三巻 住吉 內紀 狩野伊川院 狩野晴川院 椿 椿山

高蕎溪　細田榮之　歐川豐國　長谷川雪旦
鳥居清長
第四卷　渡邊華山　野呂介石　藤本織石　日根對山
安田老山　田崎草雲　五岳上人　福島柳圃
仝　雲峰　大西圭齋　渡邊小華　瀧和亭
菅原白龍　長谷川嵐溪　木下逸雲

一　俳家書編　二卷
上卷　芭蕉　季吟　通圓　廬元坊
重厚　梅室　花屋庵　士朗
金令舍　蒼虬
下卷　葛三　胡準　重厚　太筇
萬里　鳥醉　其堂　曰人
金令舍　鶯笠　卓池　雨塘
鹿太　百明　梅室　一蕙
みき雄　椿老

一　名人書柬　三卷
一　蜀山人　抱一　唐衣橘洲　京山
元成　白猿　雪中庵　海成
二　馬琴　三通　京傳　京山　六樹園
眞顏　戀川春町　壽阿　可樂
種彥

三　蜀山　蘿月　了阿　美成
掖齋　信友　梅塢

一　閨秀書簡　二卷
一　紅蘭　蓮月　細香
二　近衛家老女村岡

一　華胄遺墨　二卷八卷之內
第三卷　松平樂翁　五通　中山大納言
第四卷　酒井忠道　松平甲斐守　井伊直弼　太田備後守

一　賴氏一家書翰　春水　二通　梅颸　春風　杏坪
山陽　聿庵　支峰　鴨厓

一　賴襄書翰　一卷
一　賴襄支峰書翰　一卷
一　佐久間象山書簡　一卷
一　新井白石　室鳩巢書簡　一卷
一　南廓春臺書簡　一卷
一　伊藤東涯兄弟書翰　一卷
一　山東京山與東條琴臺書　一卷
一　米庵書簡　一卷
一　中井敬義書簡　一卷
一　清河八郎正明書簡　一卷
一　賀茂眞淵書簡（假名文）　一卷
一　六樹園石川雅望書簡　一卷
一　蜀山人太田南畝書簡　一卷
以上雙魚堂文庫藏

總計　七十五卷　六百六十八通

一　蘭學家書簡　二卷　大槻文彥氏收藏
一　名儒手簡　一卷　仝
一　儒人手範　一卷　仝
一　翰墨蒙簡　上下二冊　佐藤靜夫氏收藏
一　名家書簡帖　十一帖　吉田久兵衞氏收藏
一　縣居翁尺牘　一幅　木村正辭氏收藏
一　華嚴鳳潭書　心庵書翰添　一幅　仝

◉教授議員囑任　今回左記兩名の講師を教授會議員に囑任せ

早稻田記事

べき退化と云はねばならぬ。

現今斯くの如く假名遣改正の問題は非運の狀態にあるのであるけれども、國語教育上此假名遣改正の必要は確乎として動かすべからざるものであることは苟も具眼の士の殆ど疑はざるところである、故に自分は此度の復舊に就ては決して悲觀して居らぬ、寧ろ樂觀してをるのである、現在は斯の如く復舊の狀態にあるけれども、國語教育上此改正の必要は斷々乎として信じて疑はない、いつかは改正せられずには止まぬのである、向上性の植物は一時の障害の爲めにたとひ屈折せられても途には向上する樣に、遂に改正せられなければならない、假名遣は今回の打擊位で挫折凋落してしまふ事は決してないのである。

文部省が此度復舊を計られたに就て決して悲觀しない、又沮喪もしない却て一つの感謝すべき點を發見したのである、それは此れ迄此問題について社會が一向に平氣であつたのである、然るに此度此問題が物議を釀したので社會も自然此問題を研究するに至るであろうと思ふ、即ち是まで此問題を對岸の火事視して居た人々も注意を引起して研究心を生ずる樣な事になるであらうと思ふ、若し社會の人々がよく眞面目に研究考察して見れば假名遣の改正か必要か不必要かといふ事は自然明になつて來るのである、さすればつまり吾人の抱いて居る理想を實現する時期を却て早める事になる、雨降つて地固まると云つた調子である。

此假名遣問題は譬へて見れば、德川幕府の末期に於ける開港論者と鎖港論者との爭の樣なものである、開港論が今日になつて見ると國家の爲め利益であることが證據立てられたけれども、當時に於ては鎖港論の方が遙に有力で、正當らしく見えたのである、然し鎖港論者も今日になつては前非を悔いて居るであらう、是と同樣に否改正論者も他日或る時期において自己の意見の誤まれる事を悟る時があるに相違ないのである、私は近き將來に於て改正假名遣が我國一般に用ゐらるゝに至るべき事爰に斷言して憚ないのである。

私は現今我國の小學校生徒六百万人の爲め、又小學校教員十二万人のために假名遣改正の實行に盡力しようと思ふのである、畢究、文部省今日の擧は一時的のものに過ぎむ、根本的價値が一時的のものである限りは永久的價値を有する改正案の勝利は明らかなる事實である、私は飽まで假名遣改正に盡瘁し其必要を主張せんとするものである。（終）

手紙を習ふ事を奬勵す

圖書館長　市嶋謙吉

此一篇は同氏が商科々外講義として講演せられたる大要を筆記したるものなり（記者）

今日、諸君を一堂に會して御話をする問題は手紙に就てである、手紙を習ふ事を奬勵すると云ふ方針を學校か執つたにつき特に諸君に一場の御話をする事になつたのである、手紙を習ふと云ふ事は今始めて學校が必要を感した譯でない、此迄と雖も既に學科の中に加へてあり、相當の奬勵をして居る

のである、しかし此迄の成蹟を見るにまだ不完全である樣に思ふ所から、どうしても今一歩進めて大いに奬勵をせなければ諸君の前途に非常な差支を生すると云ふ事を感した、そこて學校に於ては今後一層力を此點に注き、諸君に充分の研究をさせる方針を取つたのであるが、今日はそれに關して聊か所見を陳述する積である。

手紙と云ふものは自分の情意を人に通する機關で多くの場合に於ては唯た當坐の用を辨する道具に過きない、そこで一寸考へると雜作もないとの樣に思ふ人もあらうが、實際はなか〳〵六かしいもので、昔しから名高い學者でも文章はよく書くが手紙となると充分書けない人かいくらもある、日常の手紙ですら此如である、然るに手紙には色々の體かあつて公文と私書の體か異なるは論を俟たず、公文に於ても私書に於ても場合に依り色々體を異にしなければならん、例へは拜賀の手紙、吊禮の手紙、時候と云ふ樣に私書でも樣々の書き方がある、公文となると愈々複雜で官等や位地に依ても昔しはそれ〳〵體を異にし、儀式の場合などになると式の異なるに隨ひ手紙の樣式もそれ〳〵異なつた位のもので、實に複雜を極めた。そこでなか〳〵銘々之れを心得て居ることか出來ないからおのづから、其專門家も出來、追々に何流など云ふて流派を生するに至つた位なものである、圖書館に藏してあるから御覽になるがよいが、足利時代にはその時代に定めた書札例かあり、德川時代には德川時代の書札例かあつて何れも大部のものである、足利時代は德川時代と違つて所謂る戰國時代で兵馬倥偬の際でありたに拘らず今から見ると實に案外に思ふ程立派な書札例か出來て居つて、あらゆる式と體とか整ふて居る、必竟これも必要から生じたものであらう、德川時代に於ても祐筆と云ふがあつて專門に手紙を書いた、區々の式や體で書いてならぬと云ふ所から、八ケましい規定もあつたのであるが書も一樣でなければならぬと云ふのですべて公儀(官府)へ出す書面は御家流でなければ納まらんと云ふ事であつた、新井白石のことときは云ふまでもなく能筆の人であつたが、唐樣に書いては公儀で受付けないから、兩刀を使つて私書は唐樣に書き公文は御家流に書いたこれは名高い話しである、勿論今日は繁文を省くことを主として居る世の中であるから昔しの樣に複雜な式や體は要らぬに相違ないが、それにしても時と場合に依り形式を異にせさるを得ないことかいくらもある、一通りそれを心得る丈ても容易でない、であるから手紙を目して一概に無雜作に書けるものの樣に思ふのは大いなる心得違である。

昔しは手紙を書く事が社會教育の大切な課目であつた、隨つて若年のものも一ト通り體を備え式に適つた手紙を書いたものであるが、今日はドウカと云ふと人文の大いに開けた割合に手紙を書く業(ワザ)は少しも進まない、否な非常の退歩を見るに至つた、其原因に就きある人の云ふには昔しは交通か不便であつたから通信は一に文筆に依らさるを得ない、隨て手紙書く業も勢ひ發達せさるを得なんだが今日の如く交通自在で電話あり電信あり電車あり鐵道ある世の中となりては、手紙の働く區域は非常に狹まり、大抵は端書で用か辨じ得らるゝから手紙書く業の拙なくなれるも道理なりと、しかしこれは誤

りたる觀察なり、交通の開けると共にいろ〳〵機關の便利も開けたに相違ないが、その結果として交はる人の數と其の度數もいたく殖え、且つ繁くなりたることを思はなければならん、昔し交通不便の世の中に十人の交友を有し一年二三度往復した人が、今日は三十人五十人の交友を有し、交通便利の結果月に日に頻繁なる往復をせらければならぬ事になつたのであるから、今日は却て昔しよりも手紙を書く度數の著しく增したるは言ふまでもなく、何れかと云へは今日こそ昔しよりも、手紙書く業も進まなければならん筈であるのに、事實之れに反するは主として今日の教育の結果に歸せざるを得ないと思ふ、言を換へて云へば、今日の學生の學ぶ所の課業はなか〳〵の大負擔で到底手紙を習ふ餘力がない、言を換へて言へば手紙を構成する要件である所の書を習ひ文を學ぶ事に充分の餘暇か無いと云ふのが大原因であるに相違ない、勿論手紙は習熟を要するものであるから只書を善くし文を能くする丈にてもいかないが、それにしても其基礎となるべき書を一通り學び文を一通り修めると云ふ事かなくては手紙はよく書ける筈のものでない、而るに今日の教育の狀態は前云ふ通りであるから概して拙であるのは決して無理は無い、これは學生の罪でなく、寧ろ罪を教育に歸するが當然であらふと思ふ。

責任論は且らく措き、現今の教育を受けて世の中に出た人の手紙はどんなものかと調べて見るに、實に亂雜極まるもので殆んと手紙の體をなして居らぬが十中の七八を占めて居る、先つ用語に就て云へば「罷在」と書くべきを「在罷」と顚倒して書くはまだしもの事、「親展」と書くは封書に限ること言ふまでもなきに、やゝともすれば端書の表面にも之を書き「貴酬」は返事の事であるのに、取り違へて返書でない手紙に用ゆるなど滑稽を極むる例は殆んど枚擧に暇無い位である、文體に至つは愈々ます〳〵で、今日程手紙の體の混亂した事は幾んと前例が無いと云ふてもよい位である、爰に又近頃自然主義と云ふとのが行はれて來て、何んでも自然に適ひさへすればよいと云ふ樣な說か世の中に行はれ來り、手紙の體の如きも之れか爲め幾許影響を受け追々放縱に流るゝ傾がある、此主義は手紙を書くことを知らぬもの若くは不得手な人に取つて非常に都合のよい主義である、と云ふ其譯は自分の考其儘を平常の言葉で書きあらはすことは誰れしも出來ることであつて、體も式も構はないのが寧ろ自然であると云ふので、こゝに公然「ジャステヒケーション」を得たのであるから、これほど拙を蔽ふの好武器は無い、これほど歡迎を多數に受ける主義は無いが、其實これなど手紙に害を與ふるものは無い、吾輩は手紙の大敵は自然主義であると云ふことを斷言して憚らない。

全體言文一致體の文章は雜作もなく書ける樣に思ふ人もある樣であるが、其實なか〳〵六しいものである、成るなど俗語を用ひて書くには相違ないが、之れを文章とするには相當の工風を要する、明快に簡潔に書かんとするには、能文の士と雖も難しとする所である、殊に手紙のごとき長文を忌むものに於ては一層困難である、たゞし私は必ずしも言文一致體の手紙を不可とするもので無い、簡潔にうまく書ければ此體で

も不可とは言はぬが、自然主義を土臺として書くことになると到底カタの附かぬことになる、と云ふのは此主義を極端に解するときは文章それ自身が自然で無い隨て文章らしき言葉や言ひ廻はしは絶對に避け、ダラ〳〵しても普通用ゆる言葉の儘書きつらぬるが自然に適ふと云ふ理窟になるから、此主義か手紙の上に行はれる日には丁度自分の話の速記錄を相手に送ると同じ事になり、今の繁劇なる世の中に適しないとは論する迄もない、一體手紙のごとき者は相手を見なければならぬものである、自分の流儀だからと云ふて相手構はずに自分勝手を遣る譯にはゆかぬ、差當り諸君は學校を出てから自から商店を構へ獨立の業を營む人もあらう、又他人の店舗に傭はるゝ人もあらう、其の何れにしても取引先が依然舊來の手紙の式を守つて居るのに、自分流義で自然主義の手紙を書く譯にはゆくまい、人に傭るゝ場合に於ても恐らく個樣の手紙を書く人なとは先方で眞平御免と斷はるは知れ切つた事である、要するに自然主義の手紙の上に行はることは今日既に大に墜落して居る手紙を一層放縱蕪雜に導き、世間と益々遠さからしむるものと謂はなければならぬ、私が此主義を目して手紙の大敵と云ふは此の故である。

前言は今日の趨向を云ふたので諸君が其弊に陷つて居ると云ふた譯ではない、併し忌憚なく云へば諸君は手紙書く業は他の智識に比して劣つて居ると謂はなければならん、世間でも此點に於て信用を措て居らぬ、現に毎年の卒業生を吾れ〳〵か世話をする場合に銀行會社等より先づ第一に來るは其人物は手紙か書けますかと云ふ質問である、全體何處の商店でも會社でも諸君の學問上の經歷は問はずと知つて居るのであつて、相當の學力を有して居る事は先方に於て問ふ必要がない、所で手紙の事を先以て問ふと云ふ譯は如何にと云ふに少くとも先方に於て其點が不安であるからである、此點に於て今日の學生は世間から信用を置かれて居らぬので、それも其筈商店や會社に人を使ふに毎日させる事務と云ふものは第一手紙を書く事である、事務の九分九厘は手紙を書く事にあることと云ふてもよいのであるから、傭主が人を用ゐるに當つて先つ手紙の巧拙を問ふのは決して無理ならぬ事と思はれる、所で吾れ〳〵は斯る質問に對し每々困却をする、勿論中には相當に書く人もあるには相違ないが之れは極めて小數であつて多數は遺憾なから充分でないから、斯る質問に對してまさかに達者に立派に書けるとも答へられず、斯る事からして折角學業に缺點の無い立派な人々を世話を仕損ふことが屢々ある、諸君か折角苦辛を積むて學業を修め、いざ彼岸に達せむとする場合に臨み只手紙の下手なる一事で（諸君から考へて見ればさまで重大な事とは思はれないのであるが）功を一簣に欠くと云ふ事になるのはいかにも殘念の事である、今日態々諸君を會して斯かる事を云ふのも畢究諸君が他の諸學科に於て立派に成蹟を擧けて居りながら、此の一事で功を缺くのは如何にも殘念であるから、諸君の力を充分發揮させるには決して手紙を輕く考へてはならぬと云ふ事を、深く頭腦に印したいと云ふ考に外ならぬのである。

諸君が世の中に出るに當つて必要とする所の手紙は決して面倒なものでない、大體事務的の手紙が書ければよいのである、

事を明快に書いて意か達すれば先づ是れでよいのである、と云へば何でもない樣であるが事務的の手紙と云ふた所で種々の式形がある即通知狀とか依賴狀とか禮狀とか照會狀とか、おのづからそれ〳〵の場合に對する書式が定まつて居るが、此形式に通するには多少の習練を要する、又式に拘らず事務的に意の達するまでに書くにも相當の習熟を要する、併し以上は事務に立さりわと直ちに必要を感する極めて低度の手紙であるが、今少し高い程度を云へば手紙は決して辭達すれは止むと云ふばかりでない、只用が便すればよい、如何に乾燥無味でも意か明らかであればよいと云ふものでない、少しく複雜の事になつて多少相手と難事件を交渉する時には無論幾何の掛引がなくてはならす、又隨分多くの場合に於て情に訴へねばならぬ事がある、斯樣の場合には略もなければならず理もなければならず情もなければならぬのであつて大分複雜になつて來る、すると自然手紙が文學的になつて來なければならす、問題の性質がデリケートであると理詰にも行かず略でも行かないことになる、個樣の時にはどうしても情に訴へる外は無い、理窟で解けない難澁の事件か情で解ける場合が少なくない、斯る場合に用ゆる手紙は少なくとも人を動かす力がなくてはならぬが、人を動かすの文章は幾許か文學的ならざるを得ない、そうなると話か少しく高尚になるけれども俗務に於ても此處までは是非行かねばならぬ、故に手紙は唯た用を辨すれば足る、意達すれば止むと思ふは誤りで、高等の手紙になると決して單純のものでなく、多くの習熟と永き研究を積まなければなか〳〵そこへ達せぬものである、併し前にも云ふ通り差當りは決して六ケしい程の者でない、唯た竝外れに立身せんとするにはとうしても六ケしき局面に當らざるを得ず、六ケしき局面に當るには高等の複雜なる手紙を書くことの必要が起る、爰に適當なる實例がある、名はしばらく預るが、諸君の先輩である校友が手紙で身を起したと云ふ實例がある（今日或る方面の商業界に大立物となつて居るのである）、が其人が私に曾て經歷を語つた事がある、其人の云ふには自分の出世は全く手紙が基となりて居る樣に思ふ、最初自分が使はれた人は非常の繁劇な人であつて手紙を書く暇がないから自分は其れに代つて始終書かされた、忙はしい人であるから、いつも委しい事は云はない只誰々に何々の事を云ふて呉れと一と口二た口云ふ位なものである、此片語隻言を匆々に聞いてかくのであるが、それが中々重大な事柄であつたり複雜な事であつたりする、それを相手に向ひ本人の意のある所を充分徹する樣に書くには隨分骨が折れた、而し段々と馴れるに從て主人の意をよく飲み込む樣になり、其片言隻語を聞いて其意味する事の何であるかの理解か明らかにつく樣になり、十中八九は主人の意中を寸分の違ひなく先方に通ずるに至つた、場合に依つては主人の考へ至らざる所まで布衍して書く程までになり、遂に非常な難事件の起つた時に自分か刻苦して書いた一本の手紙で甘く解決を告げたことも一兩度あるに至つたので、主人も深く自分を德とし、用ゆるに足るの人間であると感したと見へ終に大事を任かさるゝ事になり、之れが今の立身の基となつたと云ふて居る、これは餘程諸君の參考となるべき事實である、總じて人に使はれて

其の才幹を認めらゝは手紙から來るのが確かに多い、人の秘書となり記室となつた人か往々一躍して顯要の位置に進む例は珍らしくないが、段々調べて見ると手紙か起身の基をなして居る場合か多い樣である、諸君の如きも當校を出る曉には前に擧けた先輩校友と同じ道行を踏まなければならぬ、學校に在りて筆に親むだに因み世の中に出ても筆に關係ある事務に取りつかねばならぬが、それは即ち手紙であつて諸君の才幹を試めさるゝはこれにあるのだ、諸君の早く身を起すも長く埋もるゝもこれか巧拙にあるから、どうしても手紙に對して粗略の考を持つてはならぬ、經濟學の原理や國際法の規則などを實地に適用するは一年に一遍もあるかなしだが手紙は毎日書かねばならず、諸君の才の利鈍もこれに依つて時々刻々に判せらるゝとすれば、諸君の斯道に勤勉を要するは云ふまでもなからう。

扨て一歩を進めて手紙の內容の事に移るが內容即書き樣に就ては爰に多く語る時間かないから、尤も書きにくい手紙を八つほど擧げて見よう私は名づけて書簡の八難と云ふて居る。

第一難、すべて目下にやる手紙は難いものである、目下に對するのであるから普通用ふる敬語を省かなければならぬ、而るに敬語を省く結果は高慢らしく聞へる、之れを高慢らしく聞へす威ありて猛からず、溫情の何となく存して居る樣に書くのは困難な事で初心の者は甚だ難しとする處のものである、私のこれ迄知る所ではかゝる手紙を能く書く人は太政大臣までにもなられた故三條公である、公は位人臣を極めたから何人も云はゞ目下である、而るに謙德の人であつたから敎語を用ゐずして而かも傲らない樣にうまく手紙を書かれた、細川潤二郎君なども其方に妙を得て居らるゝ、第一難とする處はこれである。

第二難、慶弔の儀式張つた手紙は誰れでも一通り書くものである、而し只式一片のものとすれば誰れでも書けるものであるが、其間に自然愛情の寓してある書方をする事は困難の事で大家と雖も尙之れには辟易する場合が多い、斯かる手紙は餘り淡白に書けば形式一片に流れて電信で吊ひ慶すると同し事になる、さればと云ふて表情の辨を種々陳列すると不自然になつて何となく故ららしくなつて嫌味が出て來る、よく其中庸を得て其人の眞情を表すは餘程難事である、曾て下田歌子女史がある人の訃報に接し悔狀を送つた、之れは情意並ひ至つた懇切なもので愁傷の情よく現れ、形式に陷らず頗名文であつたが最後に至て「只遺憾な事に御生前一度も御目に掛からなかゝた」と云ふ樣な事か附加してある、一寸聞けば滑稽の話にも聞こえるが、自分の知らない人に對して悔を云ふ手紙にかく人を感動せしめる語を用ゐたのは確かに名手たるを失はぬと云ふてよろしい、第二難はこれである。

第三難、營へは寒暑の見舞狀の如き特別の用あるものでなく、只左右を伺ふと云ふ樣な手紙は雜作もなき樣で困難である、斯かる手紙は御無沙汰であるが相變らす御壯健ですかと、かう云ふ丈では情味索然として相手に何等の感動をも引起さしめない、其手紙には自分の近來の狀態とか隔絕したる土地ならば双方の氣候の比較をするとか或は最近に見聞した珍事を巧に點綴するとかの手段を以つて情味を加へなければならぬ、そうなると受取つた人も多少の感興を起すのである、斯かる事に情味を點ずるは中々難い、之れを巧に故らでなく素直に自然に書くと云ふ事はなか〳〵困難である、第三難はこれである。

第四難、婦人にやる手紙は相手は相手がけに無論假名で書かねばならぬ不便かある、其上難かしい事柄を分る樣に書かねばならぬ困難もある、普通用ゐる漢語を交えた手紙は容易であるが此柔らげに手紙は難かしい、一歩進て婦人の情を動かす程にかくには勿論文學的の趣詞を要するので一增難かしい、これは誰れも感ずる困難である、自分の細君や姉妹などの內方人に遣はすのは論外として他人の婦人に手紙をやるには誰しも困難を感せぬものはあるまい、此種の手紙を書くに巧なるものは所謂國學者を推さゝるを得ずだ、私か藏して居る加茂眞淵か自分の門人なる倭文子と云ふ妙齡の女子に初旅に出る時にやつた手紙の如き實に其標本ともなるへき者で徹頭徹尾假名で書いてあるが、如何にも情愛紙幅に溢れ嚙むてふくめる樣に物敎しえして居る所は慈母か愛孃に對することき趣があつて讀者を動かすの力がある、此の手紙は何時か諸君にお目にかけるつもり、これか第四難である。

第五難、借金の云ひ譯をする手紙を書く困難並ひに金の無心を云ふ手紙の困難なる事は多言を要さぬ、此類の手紙は尤も人の情に訴へねはならぬもので、如何なる筆無精の人でも之れには大に刻苦する、私か常に云ふ事であるが平常手紙を書く場合に此時の心持を以てすればいかなる手紙も必す立派に出來るに相違ないと、此種の手紙には情は勿論理も場合に依つては略も兼備せねばならぬ時か多い、恐らく諸君も此種の手紙には多少の經驗をもつて居らるるだろう。

第六難、人に代りて書簡を書くの困難なる事、全體自分の情を其儘寫して遺憾無くするにすら相當に困難である、況や自分ならさる人の情を寫さむとするのであるから困難は知れ切つて居る、如何に名文て書いても代筆と云ふものは情のうつらないもので、曲りなりにも自分の書いたのは情のうつり易いものである、故に交際社會の禮式に於ても代筆は禁物となつて居つて無禮と云はれて居る、自分か病氣なぞて萬止むを得ざる時の外は代筆を使はないか通規となつて居る、畢究本人の情がうつらないと云ふあたりよりかゝる式も生れたのであらう、先刻お話した先輩校友か主人の代筆をして地位を得たと云ふが如きは此困難に打勝つた例の一である。

第七難、長上を諫めるとか若しくは目上の人に金の催促をする書簡は書き惡い者である、此類の手紙には義理を明かにすると同時に敬意を失はない樣にせねばならぬ、此場合には尤辭令を巧にせねばならぬ、いかに云ふ事がよくとも辭令行屆かすして荒立つ事ありては直に感情を害つて其の云ふ趣意をとつて吳れぬ事になる、目上の人に金の督促をする等の事も全し事である、借したる金を取のであるから返せと云へばよいのてあるけれどもさうは行かぬ、いくらか敬意を拂はねば禮式として濟ます、去りとて餘り敬意を拂ひ過ぎると先方で返しても返さなくともよいと云ふ、心持を起さぬにも限らないから其邊の調子をよく考へなければならぬ、怒らさず返さなければならぬ樣に仕組むのは全く文章の働きである、實

て加藤技直が其師眞淵の子息に與へて借金の督促をした手紙を見た事かある、それは先づ先大人眞淵に對しては子弟の關係があるから斯く〳〵の特別の事をしたのであると云ふ事を書き、所で代か交つたから事情か全しからぬと云ふ事を條理を分明にあらはし然る上にて督促に及ぶと云ふ順序で條理と溫情を並び備へて書いてある故に相手か如何にするくとも領かねばならぬのである、斯樣の手紙は相手方と場合とを考へ工夫せねばならぬ故に書き惡いものである。

第八難、他見を憚る手紙には大抵御覽後火中と終りに認めてあるが例である、所か事實に於て火中に附されない事が多い、故に早晩世に出て來る恐れかあるから用心を要する、かゝる手紙にはなる丈相手にのみ分る樣な書方を選はねばならぬが、相手にのみ分る樣に書くと兎もすると相手にも分らない事になり易いから困難である、さて又他見を憚る手紙には密書の性質として他人の褒貶毀譽に亘る事もあり或は籌略などに關する事もある、斯かる事柄は筆の使ひ具合によりては人をも毀け自分の人格をも下げる樣な事のあるもので非常に酌酌を要する、匿名にしても筆蹟で本人の知れるものである、而して筆蹟をかくす事に就いて私の感したる事か一つある、全體どうしても自分の筆は隱し切れぬものあるけれども只一つの手段は片假名にて書く事である、手紙の全文を電信の如く片假名でかくのである、之れは一寸知れないものである、要なき事であるけれども序であるから爰に述べておく、これか第八難である。

手紙の困難は此八難だけには限らない、只自分は諸君の頭に手紙は輕々にすべきない無雜作に書けるものでないと觀念を與へればよいのであるから、此れより以上並べ立つる必要はないと思ふ。

終りに臨むで一二附け加へておくべき事がある、それは別事でない、手紙の巧拙に大關係を有する書である、書が拙であれば文章の味を少くとも半分位は沒却する、手紙の味もこれかために大部分失せて仕舞ふ、去れば手紙を習はんとすれば是非同時に書を習はさるを得ない、或は文字は記號であるから書などはどうでもよいと云ふ論もあるが、これは實地に適はない論であつて書か拙なれば手紙を受取る人に不愉快の念を與へる、第一明確(パッキリ)と讀めない不便もあり神速に讀めない不便もある、又或場合に於て人より人品を低く——見らるゝ不利益もある、手紙に附隨して書を學ぶの必要なるは云ふまでもないか、兎もすれば西洋などの事を楯に取り、日本に於てこそ一種の文字あり書法などを八ケましく云ふけれども西洋にはそんな事は構はぬと云ふ負け惜しみを云ふ人もあるが、西洋でも日本と決して違は無い、彼の「クラーク」なるものを見よ、其の筆蹟は實に見とれるほど見事のもので「クラーク」の資格で尤も重きを置くのが書であるから隨つて書を學ぶに力を盡すことも非常のものである、此の「クラーク」は事務上の大機關であつて、之れに對する報酬のごとき書の巧拙に依つて著しい相違のあることは誰れも知つて居る事實である、西洋既に然り況や日本の如き古來法書を研究し來り書の巧拙によつて人物までも見ると云ふ習慣のある所に於ては書はどうでもよいと云ふは極めて粗鹵な考で明達つて居る、

家となるには東西いづれにても全樣に書をよくせなければならぬ事は今の一例でも分るであらう。

最後に尙一事の漏らす可らさることかあり、それは手紙を習ふことを勉めるでなく樂んで貰らひたいと云ふ事である、即ち手紙の趣味を感して欲しいと云ふのが私の切なる翼望である、すべて物は勉むるばかりで上達するものでない、昔しから好(すき)きこそ物の上手と云ふ諺もあつて趣味を感する所から自づから其道に進步發達も來るものある、然らは手紙の趣味とはどつ云ふことを云ふかと云ふに、筆者の面目が赤裸かにあらはるゝと云ふか如きは手紙に趣味の存する一例である、人の樂屋は全く手紙に依つて窺はるゝものであつて、歷史家などはこれにより其人の表面を考へ色々の秘密を發見し意外の事實を堀り出すこともあるが、これは全く手紙の德と云ふべきである、眞面目(マジメ)に書いた額面や掛幅などは、立派は立派に相違ないが、所謂る社杆(カシヤク)つきで裝飾がしてあるから、其人の眞面が知れかぬる、刻苦して書いた文章なども矢張り其通であつて、其人のあぐらをかひて居る有樣やせき拂をして居る樣子まで躍如としてあらはして居るものは、全く手紙のことく眞率に裝飾なく書いたもので無くては窺ふことが出來ないのである、どんな人にでも趣味を感せしむる手紙は繪を交えて旅行の有樣などを書き、即吟の詩だの歌だの俳諧だのを巧みに點綴したもの、若しくは滑稽を極めて人の頤(あごかひ)を解くなその手紙であらうが、名手の書いた手紙になると繪かなくとも詩歌俳偕などか交じて居らなくとも成る程と興味を感せしむるものがいくらもある、私は此の趣味を貧乏趣味と名つけて居る、つまり反故のごとき廢物同樣のものに對して持つ趣味であるから貧乏趣味と云ふのであるが、此の貧乏趣味はなか〳〵金屋玉堂に居る王侯貴人が知らない佳味を有して居る、丁度鰯やサンマの如き廉價の魚に却て溜らない味があると同一である、又鹽などの精選したのになると淡泊に過ぎて却つてニガリの殘つて居る半製の鹽に味を讓ると同じく、又園藝家の誇りて居る上等の果物は案外味よろしからず却つて野生の果物がうまいと同じ樣の理窟で、手紙のことき反故同樣のものに、却つて一幅幾百圓の價する書畫よりも遙かに味の富むで居るものがいくらもある、實は趣味の內にこれほど廉なるものは無い、又道樂としても之れほど弊の伴はない道樂はないのである、私か諸君にすゝむるに此の趣味を以てするのは此故である、但し古人の手紙なぞを集めたり翫むだりするのは較々骨董道樂に陷いることになるが、私の諸君にすゝめるのは日常諸君相互に往復する場合に自からも趣味を以つて書き又人のも趣味を以つて迎へ味はへと云ふのであつて必らずしも古人の手紙を翫べと云ふのでは無い、諸君は今日既に繪はかきの遣り取りに於て幾分の趣味を感して居らるゝであらうが、つまりそれと同じ事である、手紙の場合に於ては文章が長い丈それ丈趣味も深い道理である、或は手紙には繪の如き目を怡ばしむるものが無いから、趣味は感じ難いと云ふ人もあるか知らんが、用紙や封筒にもいろ〳〵意匠の籠つて居るのがあるから、それを用ゆれば同じ事になる、又た繪はなくとも文章丈にて充分趣味の感せらるゝものである、一體趣味は極めて廣汎のもので、某種の手紙に限つてあるなぞ云

ふ類のものでない、分量にこそ深淺の差あれ、事務的の手紙のごとき無趣味に考へらるゝものに於ても無論趣味は存して居る、故古河市兵衛翁の手紙のごとき書も文も先づ拙と謂はねばならん先づ俗の手紙と云つたら此人の手紙なぞか標本であらうが、其の商賣用を認めて居る手紙を見るとなか〳〵面白ろい趣かある、要は心掛を見かたに依るのである、ウツカリ見ればどんな面白ろいものも面白く見へない、味はい方によりては一片の端書の文章でも興味を感する場合か少なく無い、私は此等の理由からして熱心に諸君に手紙の趣味を有たんことを慫慂する、今日の如き手紙の往復の頻繁なる世の中に立つて此の趣味を有するは人間の幸福を幾許增すと云ふてもよろしいと思ふ位である、いくら學校に手紙を書く業を敎へ且つ奬勵しても時間に限りがある、諸君自身手紙に趣味を有つにあらざれば到底大なる進歩を期し得られないと思ふ、自から手紙を樂むことになると初めて人の手紙の長所も短所もわかり、自分の書く場合にも人の長所に倣ふて短所を捨てると云ふ事にもなる、斯の如く手紙の趣味を有に至れば自然之れを重んずるとにもなる、故に趣味を感ずると否とは其の進歩發達に大關係があるから、私は切に之れを諸君に勸めざるを得ない、これか手紙を習ふ奬勵と云ふにつき鄙見の大略であります、學長を代表して云ふたのでありますから、等閑に附し去らない樣に希望します。

（完）

（附言）

私は手紙には年來趣味を有して居るもので二十年來古今名人の書翰の蒐集に勸めた結果、現今藏して居る手紙は非常の數に上つて居る、之れを双魚文庫と名づけ現に早稻田の圖書館に置いてあるが諸君の研究を助け且諸君に此趣味を分つ事を欲するため本月の六七兩日を卜し一室に陳列し諸君の覽に供せんと思ふ。

（附記）

新聞の今昔

市島謙吉

私が新聞事業に從事したのは十二三年ばかりの間と思ふのですが、此十二三年の中の七八年ばかりが地方の新聞に專ら當り、あとの四五年ばかりが中央の都會の新聞に從事したと云ふ大體の經歷である、創立にも關係して二つの新聞は全く第一號から自分が經營したと云ふ經歷もあるのであるけれども、併し全體を云うと、自分は新聞に付ては全く失敗を繰り返したと云ふやうな譯であつて、自分の新聞經歷は殆ど失敗の歷史である、故に新聞經營に付てお話することは甚だ恐縮する譯で、殆ど語るべき資格を持つて居らぬと云うて宜いのである、併しながら今日「日本人」が五百號に達すると云ふ場合に當つて、既往の失敗談が寧ろ興味があると云ふことであるから、聊か自分の懺悔話をして見やうと思ふのである。

私の最初新聞に從事した頃は、所謂新聞社會の危險時代とも云ふべき頃であつたので、即ち議會が未だ開らけない時で、世間が政論を以て充されて居つた頃であつた、それで盛んに民權を主張して當路の大臣を攻ると云ふ時勢であつたから、新聞の第一の役目は政府に向つて喰つて掛ると云ふことであつた、毎日の新聞は當事者を彈劾すると云ふ態度であつた、それであるから新聞記者と云ふものは一番要路の大臣に近く、同時に裁判所と牢屋にも最も緣が近かつたのである、直に政府並に大臣にぶつかる、其結果が二三日經つと直に警察署に呼出され、裁判所に引かれ、遂には牢獄に打込まれると斯う云ふ順序であつた、隨分危險な世の中であつて　從て新聞の衝に當る者は、誰れでも一通りの決心を有すべき必要があつた、決死的でなくとも相當の覺悟を持たなければ新聞の筆を執ると云ふことは出來なかつたのである。

此頃の新聞條例は實にやかましいものであつて、啻に要路の大臣を彈劾してそれが罪を作るばかりでなく、小役人の事に多少攻擊が及び、惡口を書けば之が官吏侮辱と云ふことになる、又一私人の隱事をあばけばそれが直に誹毀事件となると云ふやうな譯で、上の方からもいぢめられ、下の方からも訴へられると云ふ譯で、殆ど一ヶ月に一遍位は警察署若くは裁判所の令狀を受けない月はないと云ふ有樣で、謂はゞ戰々競々として居ると云ふやうな狀態であつたが、併し慣れて見ると格別恐ろしいものでもないので、それは覺悟の上で筆を執つたものであつた。

當初の新聞條例にはやかましい制裁があつたには相違ないが、重なる記者は社に隱れて居つて、危險な場合に裁判所若くは牢獄へ往く人物は社に定めてあつて、即ち紙面に署名して居る者が其下司人となつたので、多くの場合は其換玉を出せば濟むと云ふ譯であつた、其時分から新聞は勿論營業であつたのですが、其營業費の中から月に一遍や二遍は監獄へ人を出しても差支ない樣に大體豫算を立てゝ、それで兎に角思ふ存分の事を書いたものであつて、幾ら營利的の新聞社の

社長と雖もそれは已を得ないものとして、諦めて居つたやうなことである、其譯は先刻も申す如く、政論沸騰の世の中であつて、どうしても民權を以て社の主義とし、政府に喰つて掛ると云ふ態度でなければ新聞が賣れないと云ふ廉もあるので、旁々條例が嚴重であればある程政府に突掛ると云ふことが愈〻激烈になる、其激烈になる結果は新聞社の損害を招くことになるのでそれが爲に新聞社が倒れたものも少くなかつた。

そこで自分は他の新聞記者が殆ど感じなかつた一の困難を感じた、それはどう云ふことかと云うと、能く覺えませぬが明治十七年頃と思ふ、條例が改正になつたことがある、其改正の趣意は寛かになつたのではなくして却て一層嚴密になつたのである、從前は新聞の記事に付ての責任は總て編輯長が背負つて居つたのであるのに、其改正の要領は、總て新聞に署名して居る者は、例へば社長編輯長は勿論の事印刷人の如き者迄も、何か罪があると其次第に依ては共犯を以て論せられると云ふことになつた、之が新聞條例が一層嚴重周密になつた一紀元であつて、此「ワナ」に自分が第一に嵌つたので、即ち此嚴密なる條例の犧牲になつた者の率先者とも云ふべきものが即ち自分である、勿論自らの不明不敏之れを然らしめたるに相違ないが、併當時の事情に於て全く已を得なかつたのである。

自分は其時分に越後の高田に新聞が創立さるゝと云ふので、迎へられて其社長となつて新聞の經營を始めた、其時自分は社長と云ふ名前を新聞に署し、其印刷人としては今の帝國通信の社長の竹村良貞氏が、其土地の出身で殊に新聞を愛し警察の取調べの時に、警察署長が無學の餘り、汝等は干戈を弄する者である(干戈を干才と讀み誤つた)と云ふた、即干戈を問違へて干才と云つたと云ふことを、笑話として新聞に書立ると云ふと、それが直ちに官吏侮辱となつて一の罪を構成すると云ふやうな譯合で、愚にもつかん事が一々刑法や新聞條例を以て問はれる、まだ〳〵甚しいことは、探偵が始終附纏つて居つて、ウッカリ外出も出來ない、勿論警察が探偵を放つのは今日も同樣で珍らしくないが、當時檢察官たる檢事自身が探偵を勤めて自分等の身邊に附纏ひ吾々の行動の瑕瑾を摘發すると云ふ譯であつたから、實に言語同斷と謂はなければならん、斯樣な譯であるから吾々も檢事を敵とする彼等も吾々を敵とすると云ふやうな、双方の意氣張から色々な面倒な事件が起つて見ると、こちらも其の時分は血氣ではあり、維新頃の志士が國に殉した其の經歷がまだ眼前にある時分であるから、自分に危難の及ぶことは分り切つて居るが男子として一歩も退くことが出來ず、益〻激して態々あぶない罠の中へ飛込み、自ら災を招いたことも無いではなかつたが、兎も角も夫等の事から自分の一身に取つて三つの罪が成立つて、刑期から云へば凡そ八ヶ月、刑種から云へば重輕の禁錮を蒙むり或は新潟の獄に繫がれ、或は長野の獄に移さるゝと云ふやうなことで、隨分其間迷惑をした、恐らく新聞社の社長で斯樣な刑に觸れた者は、新聞歷史の上に於て幾んど空前であらうと思ふ。

左樣な狀態であるから、當時の新聞の經營は、今日の人の考へるよりは餘程困難なものであつた今日の新聞の經營は多く賣る方に身をやつして苦心をするのであるが、それも勿論容易ならぬ困難に違ひないが、其時分の困難は營業難の外に以上の如き危險を凌いで立派に體面を保ちながら、一方に營業を健全にやつて往かなければならぬと云ふ譯であるから、一層困難であつたことは論を待たないのである。

全體新聞は今日でもさうであるが、最も青年血氣の者が愉快として就く派手な陽氣な事業である、今より凡そ二十年ばかり前、即ち吾々が新聞事業に從事した頃は、今よりも青年血氣の輩が爭うて趨り赴いた事業であつた、自分なんども矢張其一人であつたことを白狀する、今日こそ懺悔をするが其時分新聞記者として福地源一郎氏が非常に名聲の高かつたものであつて、若者共はひとく福地氏を羨んだ、當時吾々は帝國大學に居つた頃であるが、一日福地氏と日報社の樓上で當時八ヶましかつた或る問題で議論を鬪はしたことがある、ナカ〳〵其時分福地の權幕と云ふものは豪いものであつて、書生なんぞと議論を鬪はすなど云ふことは夢にもないこと、なか〳〵書生輩が寄付くことの出來ない位な權幕なものであつた、それを大學生であると云ふ廉を以て、先方も之を相手にして、社說を書いて居る半途一時間ばかりを割愛し議論の相手になつて呉れたと云ふことは寧ろ異數と云うてもよい位で福地の議論には服さなかつたが會談丈は大いに喜んだ位のことで如何に其時分の書生が福地氏を高く買つて居つたかと云ふことが分るのであるが、自分なんぞの新聞記者になつて見やうと云ふ考は、實は全く福地の感化を受けたと云つても宜いのである、實に新聞記者と云ふものは、今も昔も變らない

起した一人である所から、印刷人として名を署して居つたのである、新聞が生れたばかりであつて、どうしても相當の名前を掲げて當分世間に廣告する必要があつたから、他の新聞社の如く無責任な名前を連ねて置くと云ふことが出來なかつたのである、其時分は東京でも各新聞は矢張責任ある名前を署して居つたやうに記臆して居るが、此時恰も先刻云うたやかましい條例が發布になつて、一層新聞を嚴密に取締ることになつたので、都下の新聞は此條例が出ると、何れも狼狽して名前をすり換へ、有力なる責任者の名前は一時に消えて仕舞つて、他の無責任なる換玉の名前に改められたが、自分の新聞は創立後まだ日が淺いので、どうしても自分等の名前を出して置かなければならぬと云ふ必要があつた、是が抑〻災を招く所以であつて、其當時越後の高田と云ふ處は非常な危險な土地で、所謂高田事件と知られて居る准國事犯的の大事件が起つて居つた際であつたのである、是は自分等の反對黨の事件であつたが民權を唱へ政府に反抗する運動に外ならないのであるから、自分なんぞは黨派の如何に拘らず寧ろ其事件の關係者に同情を寄せた、其同情を寄せた結果として、筆端に現はるゝ日々の記事が酷く當局者を刺戟して、それが日々の罪の種を拵へて、僅かに三ヶ月ばかりの間に、凡そ六七の裁判事件を釀す譯になつて、自分並に竹村氏の如き者も名前が署してあると云ふ所から共犯を以て論せらるゝことになつた。

其時分の有樣を一寸お話すると、實に今日から見れば兒戲に類するもの多かつたのである、例へば此事件に關

が無官の布衣にして、一國の大臣を罵り、其議論が一世の師範となるのであるから此位愉快なことは人世に無い筈である、青年血氣の輩が之に趨り赴くのも決して無理はないのである、それのみならず全體著書言其志は誰れしもの快とする所であるが、一冊の書物を書くは數月數年の事業であつて之を經めるは容易でない、又之を版にして世の中に公けにすることは愈〻容易の業でないが、新聞は一口に言へば一日々々の著述である、毎朝編纂に從事して遲くも夜の十二時には總てが經つて、それが直に版になつて何萬と云ふ數が翌朝配達され直ちに幾萬人の人に讀まるゝと云ふ譯であるから、是程手ッ取り早い著述は無い、左迄骨の折れることでないのを、毎日〳〵繰返すのであるから、著述業として是程愉快なものはない筈である、さうして筆端より迸り出る墨汁一滴が直に世の中を風動すると云ふ譯のものであるから、人生れて朝に立たずんば退いて新聞記者になれと云ふ諺のごとく若い者が此業に喜んで就くのも強ち無理はない、況や先刻申すやうな時勢であるから、今日とは大變に新聞記者の立場が違つて居つて、何れかと云へば青年血氣の輩が鬱勃を漏らすには最も適當した事業であつた、即ち今日こそ突飛な論をすれば人が相手にしないやうな傾きがあるが、其當時は隨分突飛な矯激な論が喜ばれたのである、今日こそ穩健な議論が尊ばるゝが其時分は世の中を刺擊し、政府を刺戟すると云ふことが主であつたから、議論は寧ろ穩健でない方が宜いと云ふ位なものであつた、そこが即ち若い者共の得意な所である、又今日では餘り大袈裟に物を言ふと實際に遠ざかるとして人受けがよろしくない、例へば非常にとか、大にとか、盛んにとか云ふやうな最大級を用ゐることは、今日の新聞紙に於ては識者に容れられない、記者自身から云うても、餘り最大級を多く用ゐて書くときは、却て自分の考の淺薄を現はすことになるから心ある記者は自らそれを愼む事になつたが、其時分は何でも大に皷吹しなければならぬと云ふ譯であるから、寧ろ最大級を盛んに用ゐると云ふ方が却て世の中に受けられた時代であつて、それが又若い者の最も得意とするところであつたのである。

尙又今日は總て物が實際になつて來て何でも事實を云はねば人が承知しない、隨つて議論は新聞紙上に漸く廢つた傾きがあるが、當時はまだ世の中に教育が行屆かない時代であつたから、新聞記者の務は、實地論より寧ろ學說などを敷衍した時分であつて、學校から飛出た儘の若者が文壇に立つて、學校に教はつた理論をよくも咀嚼せず毎日々々書く、それが却つて當時に受けた始末であるから、若い者が得意であるべき筈である。

それから又今日でこそ善いものは善い、惡いものは惡いと云ふやうに斟酌をしなければ人が承知をしない例へば已れの政敵とする政府であつても、善い事は善いとしなければならぬ筈であるが、其時分の風潮は善くとも惡くとも總て藩閥政府と云へば一概に惡として之を徹頭徹尾攻擊すると云ふ位置に立つて居つたので、かりそめにも當路の大臣を褒めたり揚げたりすると、其新聞は意氣地が無いとか或は欵を政府に通じて居りはしないかなどゝ云ふ疑惑を生じたものであつたから、何でも搆はず攻擊をこれつとめて居つた、今から見ると單純極まる誠に幼稚な遣り方であるが、斯樣な單純の遣り方が、又若い者の最も得意とする所で誠におあつらへ向であつたのである。

それから又新聞社の內幕に這入つて見ると誰れも同樣に感ずることであるが、新聞記者と云ふものは局外から見るとは大分違つてなか〳〵氣樂なものである、局外者が考へるにはあれ程の紙面を一日に書き立て之れを版にするには、目のまはるほど繁劇なものであらう、あれほどの議論やあれほどの種をあつめるには非常の苦心であらうと考へるのも無理は無いが、事實は局外者の考へるほどでは無い、勿論繁劇には相違ないが探訪通信などの機關も備はつて居ることであるから一通り紙面を埋める位ゐな事はなんでも無い、唯だよい新聞を作ることは容易でないが、三百六十餘日、全幅の力を盡すことは迚も出來ないことで、隨分編輯局に閑日月の無い譯ではない、例へば主筆記者にしても毎日新聞社に出る前にあらかじめ一定の議論を頭で形づくつて行くなどは極めて稀れなことで大抵は腦中無一物で出かけて行つて新聞社で書くべき題を搜すのである、何も題の見當らない時は反對新聞を攻擊すれば、それで一日の責を塞ぐ事が出來る、時には何も書くべき論題が考へ當らない、然るに時間は迫つて來る、已むなく筆を執つて二三行書く內には何か考へ付きどうやらかうやら一篇の文章となるなどの場合も珍らしくない、然るに妙な者で斯る塲合に書いたものが案外名論であつて、それが世間の問題を惹き起したり社會を警戒したりすることがある、勿論隨分遣り損なふ場合も少なく無い、唯だ僅かに筆の走り工合で大銀行の內幕を暴露し、それが爲めに翌朝其の銀行に取り付けを誘致し、心にも無い迷惑をかける樣な事が時としては起る、……編輯局の秘密はいろ〳〵あるが餘り神機を漏らすも本意でないから此邊にとゞめ、兎に角記者が宿醉の內に覺束なく揮つた筆も立派に版になつてあらはるゝと意外な勢力を有するに至る者であるから、記者の愉快は實に此上無い一たび新聞記者となつて容易に足を洗ふことの出來ないのもツマリ此の味が忘れられぬからであらう。

飜つて當時の新聞の營業狀態如何と云ふに、前追々申した樣な譯であるから、議論はいくら立派でも營業は實に振はない者であつた、中以下の新聞は營利一點張りであつたから、中には相當の利益を生じたものもあつたであらうが、中以上の新聞で甘く營業の成功したものは此時代に於て、幾んど一二を以ふる位なものであつたらう、それも其の筈、當時の時勢が營業に對しては全く逆流であつた、當時は政論沸騰の時代で議會もまだ開設されないのであつたから、新聞は所謂る「ピープルス、マウスピース」で、議會の代理をつとめ、政府並に社會に對する刺戟の機關を以つて任じた、そこで政府からは頻々として發行停止處分や發行禁止命令が天降る、それが爲めに新聞社の蒙むつた損害は勿論甚しいものであつて中には全く廢滅に歸したものも少なくなかつた、當時の新聞社は矢張り株式組織であつたが、右のごとき狀況であつたから、株主のごときも無論利益の配當などをあてにするものは無つた、田舍の新聞の如きも多くは黨派の機關であつて、其の株

主はつまり已れ等の黨派の爲めに道樂半分に資本を投じて居るものであるから、これも勿論利益の配當をアテにして居らない、併し發行停止や禁止などの厄難が際限なく遣つて來ては社の存立を危うするから、株主も默つては居らない、そこで外面には立派に論陣を張りながら一面には餘り經濟に不足を告げない樣にとの注文は、何處の新聞社の社長に於ても編輯局に對する切なる希望であつた、然る所それが容易に行はるゝことでない、なぜと云ふに記者が前申すごとき性格の人物であるから、到底社の利益など云ふことを腦裏に有つて居らない、そこで何れの新聞社に於ても始終内輪に絶えないのは編輯局對會計方の紛紜である、發行停止などの起る毎には何時でも〳〵六かしい議論が沸騰するが、結局其の喧嘩は誰れの勝利に歸するかと云へば、十に八九は編輯局の勝利に歸し、會計方は屏息の位地に始終立つて居る譯だから、營業の甘く行かないのも怪むに足らない。

右の如き次第であるから當時隆盛であつた東京日々新聞ですら、政府の保護がなければ矢張り經濟は償はなかつたであらう、停止などの厄難の無い東京日々新聞ですら、右の次第であるから他の新聞は推して知ることが出來る、現に今日新聞界の大王と云はれて居る報知新聞の前身のごとき、犬養尾崎など丶云ふ政論家が筆を執つて居つて、議論はなか〳〵堂々たるものであつたが扨て經濟はどうかと云ふと、決して餘裕が無つた、つまり十數萬の負債を作つたのは此の犬養尾崎時代であるのだ、扨て今日の報知社は全盛を極めて居るが、誰れの經營に依るかと云ふに三木氏の經營に係ることは申迄もない、然るに此の人は犬養尾崎兩氏の時代に於ては報知社の會計の衝に當つて居つた人である、會計方即經營方は昔も今も異なる所なくして、昔は十數萬圓の借金を起し、今は新聞界の大王と云はる丶迄營業上に成功して居る點から見ると、つまり十數萬の借金を拵へた人は、どうしても當時の記者たる犬尾兩氏が其の原因であると云はねばならぬ、即ち當時編輯對會計の議論もあつたであらうが、つまり編輯が勝を制した故に多くの借金を拵へ、今日兩氏が去つて會計方なる三木氏が全幅の力を致し會計萬能の時代であるから、營業上の成功を見たのである、これを以つても二十年前の新聞營業の困難であつたことが推測せらるゝであらう。

要するに二十餘年前の新聞紙は人生に喩ふれば恰かも青年時代とも云ふべきだが、今は漸やく中年時代に達した樣である、議會も開けてから既に二十三年となり、條例も改まつて昔しの樣な厄難は來ない、新聞は營業としても作物としても勿論非常に進歩したに相違ない、先づ記者と紙面の上から云へば、昔は新聞記者と政治家は兼業であつたが、今は分業漸やく行はれつゝあり、過激な議論漸やく穩健となり、理論よりも實地の論が重んぜられ、理窟よりも事實が貴まれ、浮華なる文章忌まれて摯實の文章歡ばれ、政治論ばかりが紙上の呼びものでなく、實業方面社會方面の問題も漸く注意を惹き、何れの家庭に於ても、主人外一二の男性が毎朝讀み終れば直ちに屑籠に葬られたもの、今は漸やく女流にも讀まれ、昔は卑猥なる記事を載せざれば俗流に投せざりしもの今は卑猥ならざるも通俗なれば俗流にも及ぶの傾きを呈し來り、大體に於て著しき進歩を來したるは云ふまでもない、更らに又た營業の上より見れば一層の進歩を來したる前にも云うた如く、一時は新聞の營業は利益を生じない者と諦らめられた位であるものが、今日はなか〳〵非常の利益を生ずる樣になつた（勿論地方新聞は不相變困難であるが）又新聞を販賣する機關が非常に整つて來て、記事の如何に拘らず機關整備のために賣れる樣になつて來た、又新聞の手廣く賣れる結果として廣告が盛んに掲載され隨つて廣告料が追々に高くなり又隨つて新聞社の收入が追々殖え、これが重なる社の收入となるに至つた。斯くの如く數へ來れば新聞紙は昔の困難に引き換へ今はヒドク都合がよい樣であるが、經營の困難はなか〳〵昔よりも或る意味に於て甚しい點があると云ふのは、今日の新聞の競爭は實に激烈であつて、昔の新聞が夢にも知らない程のものである、なか〳〵今日の競爭は大仕掛であつて大資本を要することになつて來た、昔は机の上で文章を甘く書き、種を巧みに料理さへすれば、それで或る程度まで賣れたものだが、今はどうしても金を掛けなければ賣れぬ、今日のよく賣れる新聞は一口に云へば貨幣を紙上にならべた新聞であると云うてよろしい、機敏に確實に内外の事實を網羅するには紙上に金を積み重ねなければならぬ、斯樣な狀況であるから成功して居る新聞は利益を多く得ても居るだらうが、なか〳〵經營は容易でない、却つて昔に比すれば一層困難であるかも知れぬ。

今昔の新聞を比較すると右の如き相違があつて、無論大體に於て進歩したに相違はないが、又或る意味に於て退歩したところもあらずだ、一體今日新聞の廣く賣れる樣になつたのはいろ〳〵の原因に依るのであるが大原因は新聞が通俗に平易になつたからである、論より證據一番成功して居る新聞は一番平易な新聞である、金が紙面にいくらかけてあつても平易を缺く新聞は割合に賣れて居らぬ（某大新聞のごとき其一例である）通俗平易は新聞を賣るの秘訣である、故に新聞の大經營家として諸方の社に聘さる丶人は、實は大の俗物である、俗物であるから多數の俗物に投ずる新聞を工風し得るのである、天下の英才がいくら大文章を書いても大議論をやつても、それでは新聞が賣れぬ、ナゼと云ふに俗に遠かるからである、個樣な記者が筆を取つた社には必らず新聞の賣高がいくらか減ずると經營家は云うて居る、寧ろ俗に通じた二流三流の記者が美人の挿畫でも工風した日が賣高が增すと云ふこれも又經營家の直話である、如斯通俗平易は新聞繁昌の秘訣であり、通俗平易に成り行くのは、決して歎ずべきでは無く、寧ろ此の手段により購讀範圍の廣まるのは賀すべき現象であるが、併し通俗平易は兎もすると趣味の墮落を來し甚しきに至つては新聞紙の本領を全く沒却することにもなる、吾輩の見る所によると、今日の新聞紙は多く賣れるだけそれだけ、新聞の品位が下落するかの如く思はる丶廉がいくらもある、例へば時々懸賞をやつて俳優の甲乙を極めるとか、神社佛閣の等級を定むるとか、美人の投票をするとか云ふが如きことは今日新聞社會に盛んに行はれて居る、これは新聞紙の一隅に投票紙を印刷してそれを賣るのであるが、言ふまでもなく新聞紙の本領を沒却するものである、新聞紙を賣るので

はなくして、其一隅に印刷してある投票紙を賣るのである、何萬何十萬と云ふ紙が賣れるが、肝腎の記者の刻苦した所はどうでも宜いのであつて、それを見るのが目的でなく、僅かに一隅に印刷してある投票紙を賣る附屬として新聞紙が賣れる譯であるから、其點などから考へて見ると、隨分新聞社としては不見識なことゝ云はなければならぬ、それから前にも一寸言つた美人の肖像を掲ぐると云ふ一事之が又新聞を賣るの一大秘訣で、いくら堅くるしい新聞紙でも一二の除外例はあるが美人氣の無い新聞は殆んど無い位である、甚しきに至つてはあの人の主宰して居る新聞にあんなものをよく載せるなアと一驚を喫する樣な事もないではない、隨分醜業婦抔の寫眞を臆面もなく紙上に挿むで人も怪しまないと云ふ仕末、又從前は名家の小說などを新聞に載せて呼物にしたものであるが、それが漸く廢つて今日は講談師の通俗講談が一番人氣を取つて居る、即ち文學者の作品では賣れない、寧ろ講釋師の出鱈目の話の方が人氣を取ると云ふことである、昔福地が東京日新聞を經營する時に當り、社中に小說を載せやうと云ふ評議が起つた時に、福地が叱して云ふに、新聞紙は日々の出來事を報ずるものである、それが本業である、左樣な慰み物でないと云うてひとく社員を叱したことがある、併しながら福地も遂には營業の利益から屈して後には小說を載せることになつたが、當時の新聞の見識と今日の新聞の見識を較べて見ると、其間に著しい差のあることが分かる、名家の書いた小說ですら新聞に載すべきものでないと云はれた時代もあつたのに、今日は名家の作品では賣れない、講談師の通俗講談でなければならぬと云ふに至つては隨分新聞も墮落したと云はなければならぬ、成る程斯る通俗的手段で新聞を廣く賣るのは今日の社會狀態に於て已むを得ないに相違ないが、之れを既往の新聞記者が權貴の忌諱に觸るゝを辭せず、熱誠文章を遣るを以つて販賣の唯一手段とし縱令營業に不利なりとも新聞の體面を毀損するに忍びずと、頑固に體面を守つた當時と比較し來れば、實に霄壤啻ならざる相違がある、吾輩が今日の新聞を目して或る點に於て發達し或點に於いて退步したと云ふのは即此の故である、新聞を廣く賣るのは無論大切である、通俗平易も結構であるが、もう少し高い趣味を以つて賣ると云ふことでなければ新聞は決して眞に成功したものと云ふ事が出來ない、今日は新聞が中年時代であるから已を得ないが、未來は新聞の大人時代が來なければならぬと思ふ其大人時代の來たる日は果して何れの時であらう。

終りに臨んで今日の新聞記者、並に未來の新聞記者たる者の性格に就て一二を云うて見れば、第一新聞記者は專門でなくてはいかぬ、ともすれば新聞を踏臺にして、何か事業を起す基にするとか、或は政治家となつて青雲に攀づる手段にすると云ふ樣なことでは是から先はいかぬ、新聞は浮氣に流れ易い事業であるが、決して記者の性格は浮氣であつてはならぬ、從つて年少氣鋭のものが無闇に樞機に當るべきでない、勿論年少氣鋭の人を要する部面もあるに相違ないが、樞要の衝に當る者は年輩の如何に拘らず、老練沈着の人を要することは疑ひない、又少くとも世故に通じた人でなければならぬ必ずしも高い學問を要さぬ、健全なる常識を備へた人が必要

である、世間の色々の事柄に接して適當な判斷を與へる人でなければならぬ、世間の色々の事柄に對しては斟酌を以する人であつて、世の中のあらゆる事柄に對しては斟酌を以て書く人でなくてはならぬ、例へば今ま人から話を聞く、其話をする人は無斟酌に云ふ場合に、それを其儘に書いては、いろ〳〵の差支を生ずる場合が多い、第一、話をした人に迷惑を及ぼすこともあるから、其話を常識を以て判斷し斟酌を加へて書くだけの頭腦が無くてはならぬ。又一通り營業上の考を備へて居る人でなくてはならぬ、自分の本領は只だ書くのみであると云ふので、社の營業の大體をも辨じないやうな仕方をするのは今日の記者として不適任である、どうしても營業の衝に當る所の人と共同の出來る性格の人でなければならぬ、それから廣く世界のことに亘つて大體の知識を備へて居る必要のあることは論を待たぬ、又昔の記者は兎に角主我的であつた、例へば機會があれば隙さず自分一個の論を主張したり、或は自分のパーソナリチーをあらはしたがる弊があつたが、今日はそれではいけぬ、成るだけ自分を沒して社の全體を紙面に張ることを專一としなくてはいかぬ。文章に至つては日々名文を出して人を感動せしむるに超したことはないが、新聞記者の務は能文と云ふよりは寧ろ摯實に文章を書いて、親切に人を納得せしむると云ふ方を主としなければならぬ、只だ浮華の文章を作つて一時人を動かすと云ふことが今日の新聞記者の務めではない。それから該博なる知識を記者が有つて居ると云ふことよりも、寧ろ工夫の多方面である人の方が記者として必要である、自分が幾ら該博の知識を有して居つても、それ〳〵の專門家に及ばないは論を待たぬ譯である

から自分の才能を發揮せしむる方が寧ろ宜しい、世間には到る處面白い趣味のある事實が澤山横はつて居る、其趣味は隨分飛離れた社會の方面にある、所で其記者たる人の趣味が多方面でなくては第一何處に往けば面白ろい事があるか一向に氣が付かない、それが爲に折角面白い事實を採り損ふことが澤山ある、兎角狹い趣味を持つて居る記者が自分の趣味に偏すると云ふことが最も害を爲すので、多方面の工夫を有する記者を望むのは此故である、又記者の人格の高きを望むは云ふ迄もない、記者の品藻は直ちに紙面に映ずるものである、次には記事の料理を巧みにする事が記者に大切なる性格である、日々輻輳する多數の記事も其配合の工合で其光りを失ふ場合が澤山あるから、其料理鹽梅が最も肝腎である、概して新聞記者に適當なる才能は大家先生よりは寧ろ中家先生の方が宜いやうに思はれる、何故かと云ふに、大家先生は兎角自分に一論あるものであつて、ともすると他人の說を好まない、然るに今日の新聞の讀者は其社の大家先生の說を日々聞かさるゝを餘り喜ばない寧ろあらゆる方面の人の說を、宛から其人に接するごとく紹介を受くる方を喜ぶ傾向があるから、ユライ自說を書く人よりもエライ他說を能く選擇するの中家先生を欲すると云ふは此故である、總じて新聞記事の書き方は始終熱誠を以つて人を引付け、重大なる問題に付ては殊に熱誠を其問題に集注するのやり方でなければならぬ、又百種千種の新聞の林立して居る世の中であるから、どうしても特色を有つて居らなけれ

ばならぬ、其の特色も時と共に變遷しなければならぬ者であるから必らず一の特色を飽迄固守することは出來ぬ、時に應じて之を巧みに變ずる臨機の才略が無くてはならぬ、以上は新聞記者に必要なる性格の唯だ一斑を云ふたに過ぎないが、餘り長くなるからこれで段落とする。

人物評論

杏林の人物（十七）

桂田富士郎　猪子止戈之助　煙雨樓主人　大西克孝

▲桂田富士郎▼

醫學博士　岡山醫學專門學校教授

今の杏林界に於て學者としての性格を備ふる者を指屈すれば桂田富士郎の如き其中に逸す可らざる一人である。桂田の學者的なるは寧ろ天性といふべく、同じく是れ三浦守治門下の俊才なるも浪華の佐多愛彦とは全然撰を異にして居る。佐多は學者としては猟猴にして冠する者、果然彼は仕事師である。其經營の才に富む處、桂田とは寧ろ問題にならぬ。反之佐多を終日試驗室内に幽閉し顯微鏡と首引せよと云へば、彼は恐らくは悶死せん、將た悶死せざる迄も眞面目に研究する人に非ずだ。見よ、彼れ一たび演說壇上の人とならんか、一寸のするは保證の限りにあらずだ。大抵な男は彼の怪辯にかゝれば煙に捲かれて仕舞ふ。佐多の身代は舌に在り、數十萬圓の地方費を醵出せしめ、大阪高等醫學校の今日あるを致したのは凡庸の手腕ではない。少々ばかりの嘘八百も方便としては恕すべき點もある。偖て桂田にはこんな仕事は藥にしたくも出來ない、其出來ない所が亦た尊むべき點である。岡山醫專の病理學教室に籠城し、閑あればプレパラートの作製に餘念なく、人若し其標本室に入り一瞥すれば开が苦心の跡歷々たるものあるを見ん。彼れ曾て人に語つて曰。人間金を作らば大に作る可し、又た名をなさんとせば大に成す可し、二者其の一を擇ばざるべからず、我れに金を作るの資格なし、若かず

早稲田大學圖書館

早稲田大學圖書館

手紙を持の使者状袋を持参也

書簡を状と云ふ状を持と云ふ故に而文

状袋に書を持参と云ふ使者を飛脚と

云ふ事なり其国持を飛脚と

年ゆくを浮世、時節を使者国故に使しと十九

日年中を浮世、時節を使者国故

日年中をうえく流て流るゝ流の天

一日特輪の如し人を浮世と云ふ

る義武の古歌を引つけ来りて年

于歳し義武を国へしとを云へ流れ

手紙と書の持ことを動ことを動、流

へや文方持を手紙を文

早稲田大學圖書館

百七十六

参考の　国々郵税を高くしとることを

多民多くの大つ高彩を色河の花をある

親の相伝をくるひて出無を手紙の者

りをりをけりをけ一方も税の古歌を

為ば其使を河の重出人の

をを国々を国々を書をうを

をををトちんとをんを白紙をつ

を手紙也而うるる其の持を商中を

第を天使酒の高を於を記をを

を交を果をを多の多の多の状

を印持代を中の持を投きをを

早稲田大學圖書館

子ある婦人を其の談話人として貴淺浮
説とし、白紙する新らたに渡人や文字
をや文章めかしても名文を字あらす稚児
と若もし其の性き者さへ人の情を動
かすべくはおさなき心もてゑ方よ
ある親よしみある者批のこともしき誰れぞ之
れを見て情を動かさゝるものもなき
一と筆も

トウサマヲカヘリノトキシミヤゲニ

リボン

カゴシキエンピツ

タツダモノ

知ルカ
キツトロ

こんな金の妻女も大方まなびし奇妙し
きる綴書の文で花の情を踏乱紙鳴
のあまりまことにあはれや張りキツトの三
字、よく書簡文の引合せ生ずる所の未
を綴りし書簡体文にて当世らしく、一くさ
ぬるあらおもんがはく、[illegible]婦女子の背の
ある」と云ふ続文まじりに〔ママ〕千鈞
のあたひともいふことのある生来稚女
の熱情を学しと此のことにもし大人の

東洋文庫

[illegible]

[illegible]

東洋文庫

[illegible]

作を出版して私信の事を記す及序
を寄せらる即ち其女王の生しける書簡を
公文書きそへしたるが又作を〔以下〕
此好楽如何しと云ふ事のなるなり豊太閤
文を掲げ文字は嫺はず遺つた陣中より書簡を
寄せらる釘次の陣名文と云ふ其〔陣羽織〕人は興
るが書中に〇出つるは正しく此の上口吻なり
しとまで其乾を云ふる其本の作
為を定め大文字の文章とらるゝ人を
動かすのはあり又筆蹟ごつ人は筆を
借りてなしたる文

去来記
出芳野行脚旅之候旨金二両二分御
うしつ給候、抑仕むかひ度之候
申候へども我等事ニ候へば何とぞ記之
相心得候
其年の作は何人も為たし得ることにあ
らず又見るの事ひあるまじき候
出来まじと云ふ事強く筆蹟の人格
● 羅山等思ひあるも
畢作の眼を以て手紙を交友の方或は
或作者をまへくあるべき記の為記す

早稲田大学図書館
早稲田大学図書館

家庭にても都て情味の存して居る岩本善治
其の事なる所と西洋に於ては夫婦親子
の間に從順對等關係の夫婦の間の從順
と親愛の對等すると情のある丈を高尚
として居るけれども東洋にては婦人の方
なる男子の權なるものを見るの所が地丘にな
りて日本などはあまりに多くは専一に盡るの多く
存しておりまん又夫婦の間に權を實
とりて大分甚遠き所がある、一つは夫人の見識
高きであるところ男子の女に對する思の
不嫌いなることも又一つは男尊女卑的女と

配偶を良人としてあるとも實なる人のことゝ
くあしくして居る別して年齢を高く場合
なども其の氣象の係かある、而して其の貴
如何も武士的精神のいくくの夫婦の間
を支配し始終屋情の態度を取りて居
ますも年齢を高く場合までも唯に夫
人として良人にしたるを祈るの気で子
供の情愛などを係のあるお互に慰藉
に論ずべき夫婦の間の情味を發揮
なる所か其の無情あるを
る一つは情緒を充分を發揮する草

早稲田大學圖書館

を云ふまい、こゝでもあらう度人創作の
こゝ手法を奇とする傳を捨てて稀んで
大抵を用ゐるを以て間違ひ無しとする作
こゝ今のいとこゝふ拙なる句全ひ
情味のあるべき部分の手法うぬぼひ
ちゝまこと情しいこゝあつて家庭の情景
を描き出す一手段
就ては和樂を用ゐる方法としても
是式創新すべきまでと思ふ、勿論
の河竹氏を
好代とすれば自分の沒
こゝもあらうこゝ餘りに和しても良まい

て、[illegible]きを書きこゝ肝要の文字あり
居る角も手段を使ひ居る以上、こ
れを標準として式を文体にも定めこゝ
ゝ式こゝんを音文にもこゝこゝ、自分
こゝうの作文文体を苦しこゝこゝ
ふ樂譜こゝる式を勿論のこゝ拙
乗しもとゝ或こゝ範囲こゝ行ふこゝ
文式を而も思ふ勿論絶対こゝ
ものを不可こゝるべ拙を両方こゝ
大体式をこゝあこゝ節こゝ式の混
こゝふ拙こゝこゝ思ふ

早稲田大學圖書館

海を順序整然行手無き強弱さし
ずとなる而日月ひ来る思ひ出らるる順序
を乱しも考えに手無かるべうと
ばもなく無頼も有なるまるべある例ば
他人の家まで来る者の如く此場合
有時男子の来るべきあるべき場合
例ば云ふ通り言葉を言はれ
或は抱ふ人の人の来る男
を書き立戯の式の直の
故例ば誰方の来る人
の羅んとう寝ん安如とう寝

つる文が力ちを持もてくさるある又自分
の知る男子を立ちまを立稽を辞
下到二度も三度も得る迄へる（例ば
又ある人に考へる人に問ふ人は
二個迄）ある式を見もあれ知って真
情の書簡ならば式を見る
との男女に考へる式を
ひとも無迄者の方知って
ちなる者の方知ってもしう
ーを面白き情合
さて〳〵ひまの情

方をもつて情実を詳し
奥と同じ印鑑をもつて時を清酒を
ものべたる深田新酒所の新文を書きつ
ら解とするを絶對に可とする所
と自分を没印したる何んの情実もない唯
此所のことき文書を作らさん
ば用もなく立ちかしうるきい所をも
用ひるの者文書に印を捺すに悪徳
質しきを渇んば印を捺くる
ものあるべい本来を偽造と結ぶ
動うまうるもない唯此発事の流ら

如捺印書こと、の所謂ひこんを巧みに
出ることを清酒や鞘酒を出すもし過ぎ
ハ、ハしいと親戚しこんをつとめること
なかを入れるけのばちうん

例(一)

「岡珍彦羅城の書簡中
古井村勘助ちゃのよ方、彼う毒を
飲れといふ男盗取自毒をうゝるく
ものかゝしき詳ちゝを勘助馬池よ
て切腹、その費を書をかしきる所方

早稲田大学図書館

一道ち
塩を木のる
やい俗ん、よ我をとばかつたら、
うめめく、ゆんがておもひしらせ
ん、まうをとめん、うめめ待ん
え芽をとめば文をかせう、芽を
ちめつくるまうと二芽ちる春木

例(二)

○是太閤ちも淀えん
(前略)二十ひろうまかろうが参う

候ゑ、わかきえ、たき候、そよさそも
じをもとばえわさせ候、七つめ
御まち候べく候

一他の一間のるこ書
迄ぐ御あく候まし、やかて
参を候て、くちをまい候、又わ
くくちを、人のくちを御すわせ
候うんとおもひらし

例(三)

梅鶯 小林玉人三字ヤ写書中

久々さま先月二十三日の芳状さしこし
其節はおそれ拝見致し、遠方いたし
存候し、扨こはしく御返事を
申しくださん、まことに御ぶさた
致候御座候ゆゑ、御心配まし
くださるべしとぞんじ、私におゐて
ますます無事にくらし、御もとさま
御揃あそばし、このたびご病気其御
座候て、さぞさぞ御困り被遊候半
んとぞんじ御案じ申しあげまいらせ
早々かしく

例（四）

かすみわたりて四方のけしきのどかに
御さかえ
一 あらたまりぬる年の初の御慶 天のとあけて
めでたく申をさめ候、御家内様御代の末
かはりなく御悦あそばしを言おさめ
さぞかし御めでたくぞんじ上
まづは御同じく御悦申上参らせ候
とりあへず申上候めでたくかしく

早稲田大學圖書館

書簡の文體

文語と話語とのおのづから

書簡を普通の文章と聊か同じうすべき特殊の場合用語に然しかんがみ

先文章の語を普通文と異ならしめたる如く、なほ一層話語をもて代ふる

の如きは話語の特徴なり。話語の特徴は

書くことを得ることの成り難きものなれども、話語を

速記することはとにかく、文章の如く

文章の語は練りに練られたるものなれば

とにかく特定の場合の特徴を書くこと

ひとつの場合又は特定の場合を

経たるものを書くことは

話語の書くことは

話語をもて書くこと事実行はれ

簡潔の語を用ひ過ぎたる文章の如き

此点に於て話語の代用ひあるか

早稲田大學圖書館

話術ともいふべきものを思はさるを得ない
話術の場合でも假令不完全なる文章をも
つまり話手の音聲次第で感じの印象を異
にすることも有るので之を具體(日本)
話しても見ると何となくカドが立つと思ふらしく
穿つて云ふても本能の感を起して感情を傷る
こともあるので手前の言葉を和らげる
けんめいにやれば概しても斷續的に多く用ゐる
けれどもなるべく其人に話しても手前の場
合にて此語を要するときは一ツ言ふて
控へる來でなさる、又話術に於ては種々の

エキスプレッシヨンや態度ということも必要であ
りも手法にて話術の不充分を補ふ例へば
譬へ其の論をしてもエキスプレッシヨンが絶
けんめいに其の演説の論を手を入れて話
話す相手があつても其人の身振を眺める
藥び掛を補ふことも出來る、具體的の
態度や調子を変えてエキサイトしても冷静に
なる様な臨機應變の働きが出來る
例へば話手が情話の人ならば情流の話
をする話手の意見での人うらて書類の
人ならば又さん故人を誘ふ術もある話し

に実にみの此ば法分出話をしても至る文ニ
あり又先方の借志の様子ニよくみれば
話の小説をおすことも自在なる、忠補
於けば話の読者を其手の情気に慕
や無ミ様方にあてゝ〳〵あるひあるゝ
えれを様すことも元んを創(さく)くることも自在
びあるも自分の情感のあらはしたるにあ不
充分の情実といふ〳〵即ち此の構(け)略ひ補
ふことも書き易ひある、言葉書ういたるいう
らと云ふ〳〵毒話の情気まして批(きつ)すこと
ら成、忠うし手紙と云ふと云ふ小説等

又中にあて十分一切の通話ヲ表出する
事を一人が二人の間柄ヲ取めるのであ
る、ノ筆にエキスプレッションや態度の
補助のないのであるから話と同じ様ニ
働らきをする様にするには容易ひ事ではない
勿論遠親の関係ひ事柄の関係ひあ
れば左までもないけれども無いのでもあしく
込み入つた事 若くは誤解の起り易
分なるもの又は相手の感情を傷害ひ易いる
あるより関する遠慮の事は極ても手
紙をうまくかくことは困難なことである。

早稲田大学図書館

況や此表記する人々は世を奇する境遇に
立ちて其人の見事の業一つ云いうる
先方の住地や事物の輕重等も又素と
注意をしなければ分論、その人生
を地位の才法と先の脳意と大体を言の
ちけんぶんうん其の才伝を書くことの
能く完全なる事は寸法の大
小の事にて言の如くつまり
ちる。例へば能を表現する
漢と理解する如き、能を河義又者へ
と能を変化する。変角

能表記する人々は先方を知る
と雖も先方を知ることを
事物の内側に入ること
出来ず。此を之計ふことう
なる。

話法と言ふ事を話法と言ふ事つまり
先方の理解を拡きまたまたまた
ゝ言ふ事し言ふ解くことも出来ず
ゝ言ふ事の出来ず切論再論し三論
が出来ず。故に成語を砕く
此上の修辞ともなる政能の落
いと成行日と行ふ事や考ふ

早稲田大学図書館

早稲田大學圖書館

[illegible]千家の一風俗である又話
[illegible]を[illegible]で其生[illegible]
が千家と[illegible]
言を変[illegible]名を[illegible]人[illegible]を特[illegible]吉物
の書を換[illegible]
[illegible]千[illegible]
の吉物の[illegible]
[illegible]又千[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

年と為しく吉うこの[illegible]
[illegible]
話流と千家の異[illegible]
[illegible]千家との関[illegible]
[illegible]区別がある、[illegible]一般の人[illegible]
誤[illegible]
[illegible]一般[illegible]
つとの[illegible]
とう記とう[illegible]
の人を[illegible]
[illegible]

早稲田大学図書館

而して誰かまつてゐる様な事をしてゐる
とそうして居ると、私達手紙をとるとのこと
く成う迄う、最多新年賀状の書
やる迄に文ボのあをを一個くらいつくるとも
ある書き方をニシウアサーひるるパーテ
キニラーしてある其時の時間の心の
の時間、其の時の用件を言ひ
お手の様に成る迄ひんとの関係のような
ちんくく迄ひさるを得ないことがあること
るとパーニシキユキラーのことがあるまの
まるお手紙の後まるう明日ひるいうお

手紙の時間を使ひんつまゆら
時間ちの事もあるる手紙の好きもび
ある、お互のアンダースタンディングで元分
書きあるいさるいでも時る事を有事
する時間がある、元もく如何の時間をしたを
始めるいるる、の味をおるる此のる
有する、又書元分原稿を飯
の方お手の時を乗るる手紙の
も記るるの弾る手紙の時間
多いこのひある安るる書るの又書のハ
ニニウアサー の時間をしるる

此新田屋作とあるものを拾
得たるパーテキエラの財布を
与拾得たる人に返し者様方
さうを渡すとも云ふんなる
時分なる人、ちる所金なる事相と存
し、財布をまく田とあるそんの同一びあ事
うるもの千枚多然びてとあるの所
手紙の上乗なるこの其の人其の
所金其の変化とキッチリ相違するあひ
くてとあるお流れのものなるを拾
い出来ないこの仕入ものを上乗とあ

まう出来ぬ時候の為を書体
文を書きあつへとし別なる仕手紙
を書文を出なるの作を書も作う
移るへ印を下仕手紙を其人所
つるのるさをゆるへ新を異へとも
の異くを別を金を異の手紙とも
も各の手紙をとも、祝の手紙をとも梅
みの手紙をとも（逆）なるをとの
ことき手紙を手紙の如ひあるこの
ものはるけんはるあ各家の手紙をを
をるる上手なるお流れひある其の所

りひ俗ゝ面角の玉来ぬ板ゝ書てある
本来性質上訪ゝちるのきゝ元のものひめ
ゝ、そこゝゝもゝ山沼ゝもゝ世ゝものひある
けしゝゝ西沼跡をあるゝもゝかる
牡蠣屋上、沼跡を略図紙を、写ゝ
雪市ゝ人ゝ支部振新ゝ二ゝゝ
石ゝ、貴ゝ沼事跡ゝ俗ゝ
ゝゝゝゝ一勤務ゝ作ゝゝ
沼ゝゝ、ゝゝゝ、ゝ新
の跡ゝ沼紙ゝうけ日ゝ
八ゝ七前のゝゝゝ沼ゝうけて

ゝ俗ゝ一
山葵の手部ゝ女性ゝ沼ゝ沼
命ゝちる跡紙のゝ新ゝ
ゝる事を跡ゝ
ゝ、新色事ゝ集ゝ
異ゝゝゝ八ゝ
ゝゝ、北ゝ
ゝゝゝ
迄ゝゝゝ
の新板ゝ
ゝ泥ゝ

のである。

ことに紀州家歴代の貴重品などが陳列せられてあつて、人の眼を驚かすものが多かつた。其のうち一つ丈け擧げて見れば、家康公が駿府に隱退せられて後、座右に置いて用ゐられた硯箱。此は金の蒔繪をした形の大な美麗無比のものであるが、一枚の朱塗の板があつて、一寸中蓋と云ふ風になつて居て、硯の上に其を覆うて、其上に蓋をするやうに出來て居る。其の塗板には端に圓い小さな穴が開けてあつて片側には大、片面には小と云ふ字が、矢張漆で書いてある。是は大小の月によつて、其の板に其月々々のことを心覺えに書いて置く爲のものである。處で此の塗板には家康公の自筆で五六行書れたのが、其まゝ殘つて居る。此など實に天下一品を以て目すべきもので、其に對すると恰も家康公其の人に、眼當り相對するが如き思ひがせらるゝ。まだ其の外に擧ぐ可き珍品は非常に澤山あるが、茲に是非とも『趣味』の讀者に紹介したいのは、故松浦武四郎の一疊敷である。

松浦武四郎と云ふ人は、北海道から樺太を跋渉したことは、何人も知るところであるが、實は日本に於て多方面の趣味を持つた翹楚とも云ふべき人である。此の人が紀州家の領分内の人であつたと云ふ緣故からして、其の遺稿や墨蹟の類が、多く南葵文庫の有に歸した次第であるが、其の一として例の名高い一疊敷の座敷も、文庫の庭に移されて、公開式の節始めて公衆の眼に觸ることゝなつた。此の一疊敷など、この人の好事家であつた好個の標本とも云ふべきものである。

此の座敷は全國に名高い歴史的の材料――木材――をあらゆる方面から集めて、殆んど百點に餘る木片を取寄せ、それを建築材料として一室を建たもので、僅か一疊敷ではあるが、非常に數奇を凝した面白い結構の書齋が作られて居る。其の座敷を作るに

就いての松浦氏の苦心たるや、實に非常なもので、今に比べると非常に交通不便の時に九州の果からまでも種々珍奇なものを取り寄せたものであるから、其苦心は實に想やられる。で、其に就いて『木片勸進』と云ふ一小冊子を著して居るが、其を見ると、木材の來歷と寄贈者の名を知ることが出來るので其の寄贈者と云ふのは、いづれも當時有名の好事家である。で、此等の材料を組合せて一疊敷の座敷を作つたのであるが、只の一疊の座敷を獨立して建てる譯には行かないから、他の座敷にくつつけて書齋風に建つたものである。無論文庫に移される時にも、持つて來て他の座敷へくつつけてある。斯る珍しい建物も、今は最早秘密のものでなくて、公衆の見ることの出來るものとなつたから、詳敷きことは自分が云ふまでもなく、南葵文庫を訪問して見られるが可い。是非お勸めする。

人生事なれば『次ぎ勸進』も上手であつた。――一躰眞言坊主は弘法大師を初め、書畫佛像の彫刻などもうまく、非常に器用なものが多い――北海道樺太の日記は皆南葵文庫に藏せられて居るが、其のうちにはさんであるスケッチなどを見ると、敬伏すべきものが少くない。ことに月ケ瀨紀行に挾まれた畫は彩色を施こしてあるが、此などは最も優品で、畫に於いて決して凡手ならざることを見るに足る。脚が强健で人の到らぬ處まで跋渉したのも、また其の行動の頗る高踏脫俗なのも、翁が桑門の出と云ところに負ふことが多いと思ふ。翁の趣味は骨董癖のある趣味ではあるが、決して鄙俗に陷らない。一例を擧ぐれば、――此も南葵文庫に陳列せられて居るが――猩々曉齋に描かせた涅槃の像などによつて、其人の面目を窺うことが出來る。自ら釋迦に擬して中央に寢、まはりに自分の愛藏品が皆涙を流して泣いて居る圖で恐らく曉齋一代の傑作であらう。

考までに諸君のお目にかけることにしよう。

第一　東京　市河寓菴

攝陽四天王寺元和兵火の際西門の燼材鐫二弘法大師筆如來轉法輪所當極梟土東門中心の轉法輪三字一是河米菴先生所監書在二欵背一

廊下入口の額に用ゆ贈られし時嬉しさの餘上つ世の鳥の跡をも今見るは荒ほか寺のあればなりけり

第二　東京　蛯川式胤

南都興福寺書院板

此小窓の左右のわくに用ゆ

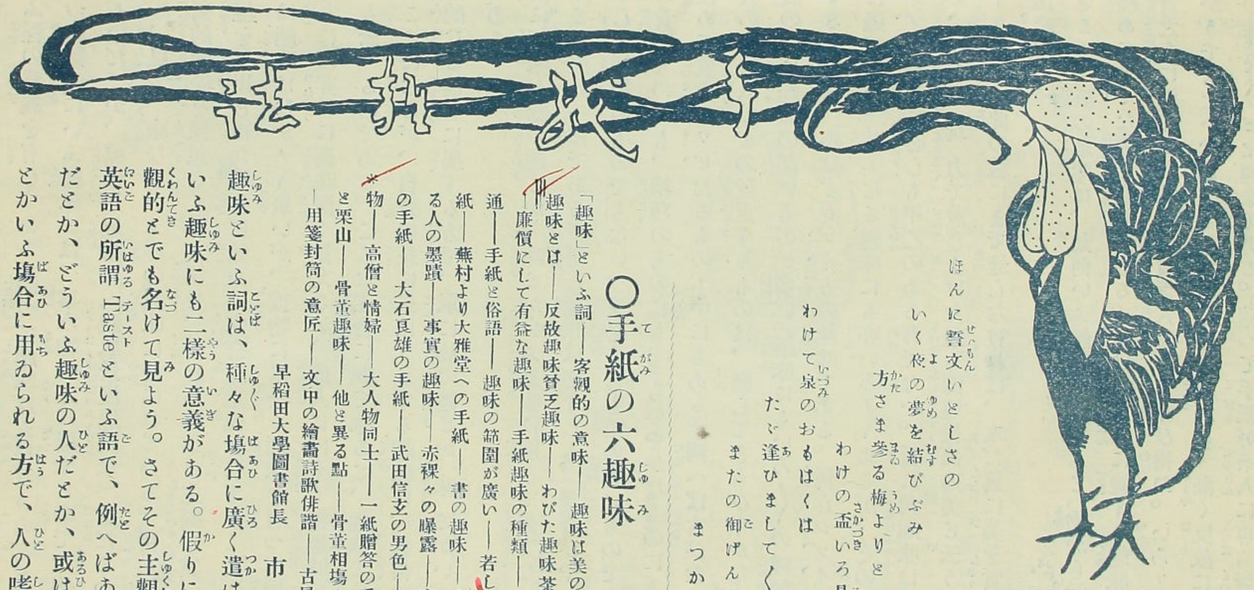
第六　西京（嵯峨）　山中信天翁

城州嵐山下渡月橋々桁（松材）

柱（書棚）に用ゆ

全體から云へば、此まで趣味に就いて松浦翁の事蹟の顯れないのは、實に不思議である。苟くも趣味に就いて云ふ以上先翁を擧げなければならん。窃に思ふに翁は趣味の親方とも云ふべき人物である。翁はもと眞言坊主であつた。從つて佛畫を描くとか佛像を彫るとか云ふことは云ふまでもなく印などは中また或時友人を集めて菅神の祭を開き、同好の士に各々天滿宮に關係のあるものを出品させて、其を陳列し、中央に何か幅のやうなものが掲げてあるが其には素絹を蓋うて何か分らぬやうにして、大層丁重にしてある。で、いよ〳〵時刻になると除幕をすると云つて、會衆に正座を命じ、うや〳〵しく素絹を除くと、可驚、顯れ出たのは古い時代のついた大阪の私窩子の番付。一同之を見てあつと許りに開いた口も閉がらん始末。大阪では私窩子を天神と云ふところから、這般惡戲をして見たのである。此等も一寸他人には出來ないことである。

好事家であるから、色々のものを集めたが、常に他處に出る時には、澁團扇を三本許り腰にはさんで出るのを習慣として居た。其に名家をして揮毫させたのであるが、流石に翁のことゝて、王侯貴人の書を乞ふにも澁團扇を以てしたところなど、翁の性格が窺はれる、其が今も幾らか遺族の手に殘つて居る



第八卷
第貳—參號

ほんに誓文いとしさの
いく夜の夢を結びぶみ
方さま參る梅よりと
わけの盃いろ見えて
わけて泉のおもはくは
たゞ逢ひまして〳〵
またの御げんを
まつかしく——〔古曲〕

○手紙の六趣味

「趣味」といふ詞——客觀的の意味——趣味は美の一種——趣味の性質——手紙趣味とは——反故趣味貧乏趣味——わびた趣味茶人趣味——手紙趣味と時代——廉價にして有益な趣味——手紙趣味の種類——文章の趣味——芭蕉の消息二通——手紙と俗語——趣味の範圍が廣い——若し手紙なかりせば——一茶の手紙——蘇村より大雅堂への手紙——書の趣味——女房の奉書——手紙とあちゆる人の墨蹟——事實の趣味——赤裸々の曝露——事實の眞——赤穗復讐と其角の手紙——大石良雄の手紙——武田信玄の男色——人物の趣味——贈答せし人物——高僧と情婦——大人物同士——一紙贈答の手紙——兩者の墨蹟——米庵と栗山——骨董趣味——他と異る點——骨董相場——配列趣味——附屬趣味——用箋封筒の意匠——文中の繪畫詩歌俳諧——古風俗——今の繪葉書

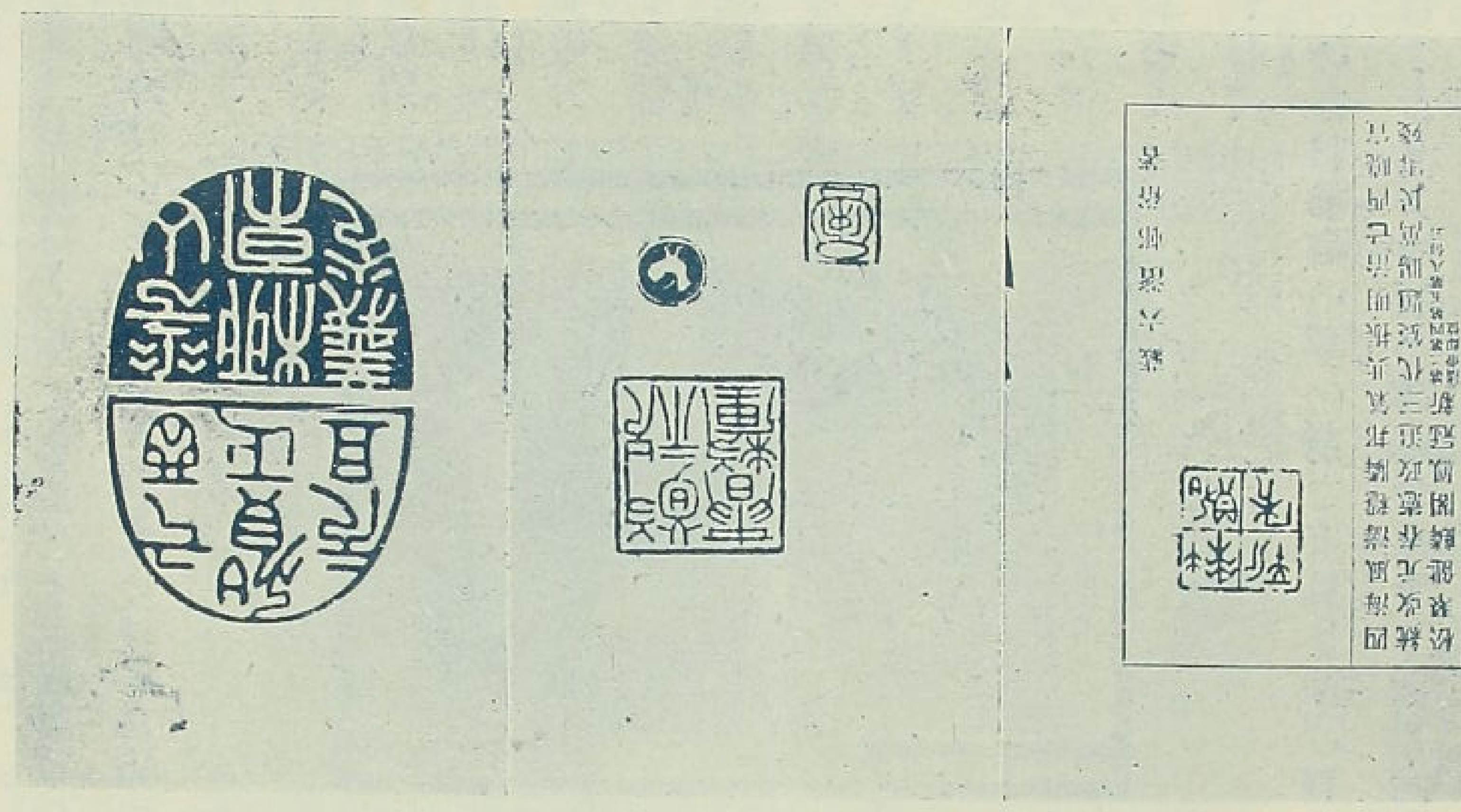
早稻田大學圖書館長　市原　謙吉

趣味といふ詞は、種々な場合に廣く遣はれてゐるが、通俗にいふ趣味にも二樣の意義がある。假りに一を主觀的、他を客觀的とでも名けて見よう。さてその主觀的にいふ趣味とは、英語の所謂 Taste といふ語で、例へばあの人は趣味の廣い人だとか、どういふ趣味の人だとか、或は趣味が高いとか卑いとかいふ場合に用ゐられる方で、人の嗜好とか賞玩力とか

いふ程の意義を有してゐる。随つて趣味は人格なりなどとも云はれる事になる。他の客観的にいふ趣味とは、寧ろ物の方に屬する事で、例へば之れは趣味のあるものだとか、或は無趣味な（殺風景沒風流な）話だとかいふ塲合で、主ら物の趣、風情、味などいふ程の意味に使はれてゐる。併し趣味といふ詞は、元來相對的關係を豫想してゐる詞で、詳しくいふと主觀の賞玩力が客觀に相當の對境を見出し得た塲合に始めて完全な意義を有することゝなるので、随つて或人は趣味はなか〳〵廣いが、或物には全く趣味を有つて居らぬとか、又或物は或人には非常に趣味深く見えるが、或人には全く無趣味の物としか見えぬなどとも云へるのである。こんな工合に觀て來ると、趣味といふ詞も迂濶には使へぬことになるが、自分の玆に云はうとする趣味は、通俗の慣用上、寧ろその客觀的なる後者に屬する方で、單に物の趣とか味とかいふ位の意義に用ひるのである。

既に趣味を物の趣とか、味とかいふ意味に解して差支ないとすれば、趣味は少くとも美の一種である。併し趣味は必ずしも、きらびやかなものでない、又必ずしも精巧のものでもない、又必ずしも價の貴いものでもない。勿論趣味は價の貴いものにも、精巧のものにも、きらびやかなものにもあるには相違ないが、極めて質素なワビたるものゝ中にもある。例へば古びたる陶器や、竹細工や、其の他茶人などの珍重するものは、概してきらびやかな方ではないが、却つて其の中に趣味の深いものが多い。趣味にもいろ〳〵の種類がある。茶人の賞翫する趣味は、謂はゞシブイ方の趣味である。併しシブイ趣味は唯だ一面の趣味に過ぎない。華美なる趣味にも亦いろ〳〵あるが、その高雅な點に於いては、シブイ趣味と必しも甲乙のある譯でない。兎に角趣味は、物の有する一種の美で、而も賞玩力で煎じ上げた最も深遠崇高の美と云うてよろしい。美を賞玩する人も、此の域にまで達しなければ、未だ眞に美を賞玩する人と云ふことは出來ない。

そこで手紙の趣味は、如何いふ趣味かといふと、物から云へば反故趣味である。極めてジミな方の趣味である。實は貧乏人に適する趣味であるが、妙なもので貧乏人に適する趣味は、貧乏人却つて味ひ得ぬ。いろ〳〵の趣味を味ひ盡し、かうでもない、あゝでもないと云ふ處から、漸く反故にまで手が届くので、その性質はワビた趣味である。随つて手紙が茶人に専ら歡迎せられ、その斷簡零紙も幅にして茶室に掲げられるといふやうな譯で、随つて古人の手紙が茶人に依つて今日まで保存されてあるものも尠くない。これは丁度茶人が廢物同様の陶器を、茶碗や香合や水指などに利用して居るのと同じ趣味から珍重するのであつて、他の器物などと調和の上より見ても、古人の手紙の茶人に歡迎せらるるは、決して謂れのない事ではない。兎に角手紙は茶人に歡ばるゝ程のものであるから、ワビた趣味である。ジミな趣味に屬するものである。



西年賀狀の意匠　其（[illegible]市島謙吉氏　澤村藏六氏）

元來手紙は短かいのは幾寸、長きも幾尺といふに過ぎない間中に、無量の情が籠り、其の人を赤裸々にあらはし、恰も其の人の襟を開くが如き思ひあらしむるのみならず、これならでは知るよしもなき秘密を知り、これならでは見るよしもなき故人の筆蹟を見ることの出來るものであるから、その如何に趣味深きかは改めて言ふまでもない。されば手紙も時代[illegible]手紙古代は何につけても簡素質朴を貴ぶ[illegible]手紙を人に持たせて還る塲合など、書以外は口上に讓るといふ習慣もあり、旁々趣味の深い手紙も實際尠かつたやうだが、德川氏以後追々時代の下るに從ひ、簡質の風も破れ、次第に[illegible]

（二）

ふ程の意義を有してゐる。隨つて趣味は人格なりなども云はれる事になる。

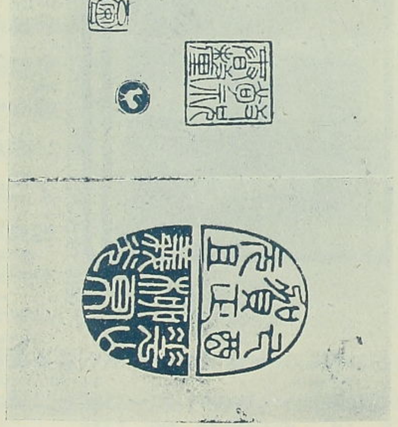
この客觀的にいふ趣味とは、寧ろ物の方に屬する事で、例へば之れは趣味のあるものだとか、或は無趣味な（殺風景沒風流）話だとかいふ場合で、主ら物の趣、風情、味などいふ程の意味に使はれてゐる。併し趣味といふ詞は、元來の對的關係を豫想してゐる詞で、詳しくいふと主觀の賞玩力が客觀に相當の境遇を見出し得た場合に始めて完全な意義を有することゝなるので、隨つて或は趣味はなか〳〵廣いが、或物には全く趣味を有つて居らぬとか、又或物は人には非常に趣味深く見えるが、或人には全く無趣味の物のごとしか見えぬなども云へるのである。こんな工合に觀て來ると、趣味といふ詞も迂濶には使へぬことになるが、自分の性に云はうとする趣味は、通俗の慣用上、寧ろその客觀的な後者に屬する方で、單に物の趣とか味とかいふ位の意義に用ひるの

（三）

凡そ人の嗜好に亦一種の趣味がなければならぬ。例へば古今の書畫骨董などに趣味のあるものを好むとか、或は一種の物を愛するとか、趣味のあるものでも、手紙ほど得易い材料は少い。古今の書畫骨董などは、人の手を經て來たものだけに、紙の如き一種の趣味を有つてゐる。紙は、書畫ほどの趣味はないが、或は山水の畫などに比べると、趣味は絕無ではない。近世人の手で成つたものは、紙の如き淺薄な文をやうに成つたものもなかなか云へない。そのもので、愈〻出來る程潔淡深遠な趣味、素朴な味、簡潔の味、風格、氣韻、力が客觀に相當の賞玩力を豫想してゐる詞で、詳しくいふと主觀の賞玩力が客觀に相當の的關係を豫想してゐる詞で、詳しくいふと主觀の賞玩力が客觀に相當の的關係を豫想してゐる詞で、詳しくいふと主觀の賞玩力が客觀に相當の

明治四十年十月廿五日第三種郵便物認可

明治四十年十月廿五日發行（毎月廿五日發行）
定價金拾錢
郵稅壹錢
東京市麻布區霞町
發行者　國井善弥
東京市麻布區霞町
印刷者　國井善弥



に渉り、あらゆる社會に渉つて、到る處その材料は滿ちて居る。どんな筆無性の人でも、又どんな地位の人でも、或場合には自分で手紙を書かねばならぬ。（大隈伯の如き取除けもあれど）であるから、若し求めようさへすれば今人の手紙は容易に得られる。尤も多くの手紙は――大抵の場合に――一瞥後は反故籠に投せらるゝものであるから、これが爲め減び易く、隨つて獲易からぬ道理であるが、實は其の紙屑籠から幾らも得られるのである。既に紙屑籠の中のものであるから、其の趣味を解せざる人に取つては、殆んど無代價同樣の品で、之れを、玩ぶ方の側から云つても、これ程廉價の趣味はない。又これ程害のない。一體どんな道樂でも必ず多少の弊害が伴はぬ、而も實用に緣の近い趣味はない。

度大なる手紙の趣味の滋味は、實に野や菜の深へ物の味がなければ、手紙道樂も餘りに凝れば多く額の金が伴ふ。手紙道樂も餘りに凝れば多く額の金が伴ふ。

手紙を要することもなるが、それにしても高が反故道樂で、大抵知れたものである。まして手紙は日用の緊要機關であるから、いろ〳〵手紙を集めて紙ぶうちには、自分が手紙を書く上に參考となることが幾らもあつて、自然自分も手紙に達者になるといふ禪益がある。又見覓め得た手紙に依つて考證的に發明する事なども決して少くない。

一口に手紙趣味といへば、頗る漠然として居るが、仔細に考へて見ると、其の味ふべき力面はなか〳〵多樣である。一文章でも味はれる、書して味はれる、單に書としても味はれる、其の他骨董品としても、若しくは簡中に挿入してある詩歌俳諧繪畫などに就いても味はれる。又之れが暗答の人物に就いても味はふ事が出來る。

其の他骨董品としても味はれる。

趣味の一斑を擧げて見よう。但し此の類名には未だ當て嵌まる適切の字を得ないものもある。

一、文章の趣味
二、書の趣味
三、手紙
四、事蹟
五、人物
六、附屬建築物
七、庭園建築物
八、自然建築物
九、手紙の趣味
十、文章の趣味
十一、文章の趣味
十二、文章の趣味
十三、文章の趣味
十四、文章の趣味
十五、文章の趣味
十六、文章の趣味

明治三十五年一月廿五日發行

何れも文章の趣味に就いて來る。今左に聊か分ち、それ〳〵に就いて此等は切の字を得なかつたものもあるかも知れぬが、

東京市麻布區三軍町一番地
發行人　中村孝次郎
印刷人　中村孝次郎
東京市麻布區三軍町一番地
印刷所　中村印刷所
東京市麻布區三軍町一番地
發行所　手紙雜誌社
電話麻布一〇四番
振替口座東京一二八八番
定價金拾錢

（六）

それに手紙は、あらゆる方面の事を書くもので、あるから、趣味の範圍が極めて廣い。若し手紙といふものがなかつたならば、漢學者の作は漢文の外見ることが出來ぬ。詩人の作は詩篇の外殘つてゐるものはなかつたかも知れぬ。生文字に烟は又工藝家などの作は、器物の外後世に傳はるものはなかつたであらう。然るに手紙のみは、如何なる人と雖も書くべき必要があるから、漢學者の書いた俗文も、詩人の日用文も、工藝家の筆の跡も、畫家の消息も存在してゐるわけで、あらゆる社會の文章は手紙に於いて、悉く見ることが出來る。隨つて手紙の趣味は實に多方面である。就中俳諧師などは、平素一種の詩想を十七字の中に寓する手腕を鍛へて居るので、其の手紙も非凡のものが尠くない。左に示す一茶の春甫外二子に與へた手紙の如き、僅に文章の妙を以つて稱するに足ると思ふ。

いつぞやは夜をこめて、鷄の空音をはかりて、御見舞、御深志ありがたく、一口にいふもあまりなく、口上ながら、古井もとの心をしる人ぞ汲むこと心に拜み申候。その上何よりの御みやげ是又わすれがたく、添く奉存候。はたおかへりの頃は、牟禮の前坂通りは、のこゝ山のあたりまで放泥ならんと奉察候。されどあんこうのさたもなく、御里入なされ候哉、本に賀候。私も年内に御禮がてら參上なゝ口にて云ゝ、甚だよわり候と見へて足だめしに古間までまわり候に、坂口にて二度やすみ、ほゝ漸く歸庵仕候。したがて七種頃は、よほどよろしからんと奉存候。それまで御安清御累年可被遊御禮申上候迄、かしく。

十二月八日

一茶

村の産物に候や、古來未曾有の物に候。愚子し、是はは何に候。恐多く極天もよく、是はに、より一尺五六寸丹陽弓削國の麁紙、

村の丙の邊に候、一茶の松茸一も賞候。御同俳申たく候へ共、何分俗用にせがまれ、ほゝ〳〵ひまのなき世に候。

よしだ山へ花墨有がたく拜讀仕り候。しかれば長サ〇さ共に一尺五六寸ならず遣はしたこと大雅堂から松茸を貰つた時に、取あくず遣はしたこと

又無村が、大雅堂から松茸を貰つた時に、取あくず遣はしたこと

趣味がある。

二白、鷹擧樣にもよろしく、且御内政王瀾樣よりたびく御こゝに候へ共、今日は右の仕合、重而したゝめ可申、よろしく御傳言可被下候。ちと〳〵

（七）

書のがある。又百石やゝ山陽なご手紙が昔の女房の書は、書も文も共に悠〳〵せる見事なの何ども、

名筆紙に呼ぶべき二、書は、書の趣味能書は、人の文必ずしも能書とは拙で、能書は、文章は、書は、文章に多く爲す處に、書は、文章は、書は、文章は、書は、文章は

云へぬ味がある。文章家の文章はその名文なるが故に自ら後世に傳はり、書家の書もまたその能書なるが故に自ら後世に遺る。文と書と共に世に聞こえぬ人の作物は雖も、必ずしも皆傳ふるに足らざるものゝみとは限らないが、而もその傳はるのは只だ手紙ばかりである。まして一藝秀つれば、世は只だそれをのみ崇拜して他を顧みないのが常であるから、かの大詩人、大書家、大俳優、大禪師なども墨蹟すら、往々にして僅に手紙の外遺つて居ない事がある。併しそれらの手紙は、書の能不能に拘らず、よくその人物をあらはし、又よくその藝術をもあらはして、質に得も言はれぬ趣味が存して居る。又世には自ら書を能くしながら「吾は書家にあらず」などゝ稱して、書を幅や額の類には決して書かぬ人もあるが、唯だ手紙だけは日用上已むを得ぬ所から書くので、兎もすること それがその人の墨蹟の後世に存して居る唯一の珍品であるといふ場合もある。なるこゝが出來ぬと云ふやうな場合もある。畢竟するに、廣く墨蹟を覓めて味はうとするには、手紙に依る外全く途がない。

三、事實の趣味

手紙が與ふる事實の趣味に至つては、前一者に比して更に幾倍か深さを覺ゆる。もと〳〵手紙は個人と個人との間に往復して互に情思を通はすものであるからその中には送る人も受取る人も赤裸々に暴露されてゐる場合が多い。即ち飾り立てがないから、事實が有るがまゝに出て居る。そして事實の趣味は、その赤裸々に書かれた所に存する。かの世間に傳はる程の面白い事實、若くは重要な事實は、史傳の上に立派に飾つた文章に書き立てられてあらはるゝが、假令それが如何なる名文で書いてあつても、其の關係者が自ら筆を取つて書きあらはした手紙程の味はない。第一手紙には事實の誤謬がない。又手紙には間接に其の周圍の事情の縁はるゝやうな文言も添はつて居るから、それ等を充分に味はつて見ると、初めて其の事實の關係や隱微の内幕を知ることが出來る。然るにその筆者がセカンド、〳〵ンドであると、到底その眞を傳へることが出來ぬ。かの其角が文鱗に與へて大高子美（源吾）等の吉良邸打入りの事を報じた手紙の如きは赤穂義士苦夜の情況を、自分が目擊した通りに活寫してあるから、誰れが讀んでも義士活動の聲が耳に聞こえる樣に感ぜられる。それから大石良雄が細井廣澤に與へた書も、其の義士が探索を怠らざりし情況を、自分が目擊したるが故に、其の文章の面白さ、人物の趣味、一種の趣味を感ずる事實である。

斯ふやうな間柄が手紙に於いて、最も趣味深く、人物の面白さ、必ずや非凡の事實が多かつて、兩方の手紙の性格が充分發露するのである。

又手紙は世に交換される人物に於いて、非常に面白く感ぜられる。加之斯く名流の手紙のうちには、一方が大人物で、他方が大人物でない。事實、兩方とも大人物の間柄なれば、其の人物の趣味深く感ぜらるゝ。

然し所謂人物の如きは、手紙が名流の人物を知るに最も適當なるものである。所謂人物は、嘗て居る處、最も趣味の多い事は、芭蕉が其の手紙に、一段と趣味深く感ぜらるゝ。

所謂人物は、面白く感ぜらるゝ。

白石が順庵に興へた書は、隱しぬる妻に送りたる手紙、思ひ寄らぬ婦人が情夫に送りたる手紙、例へば名士が女流に送りたる手紙、例へば名家が書生に與へたる手紙、例へば名家が書生に與へたる手紙、例へば名家が書生に與へ

他の名流が引合に出されて居るが、それが又すがすがしからず趣味を添へる。そして其の引合に出されて居るものが、多ければ多いほど趣味が益々深い。前に掲げた蕉村が大松茸を大雅から貰つた返禮の手紙の如きは、既に大雅と蕉村との間に遣り取りされたといふだけでも十分趣味がある。その上に大雅の妻の玉瀾の事も加へ、圓山應擧や、松村月溪月居なども引合に出されて居るから、一層の趣味を添へて居る。又名家の間に往復された手紙の中には、やゝともすると、匂ひ衆の際に返事を別の紙に書く淫なく、直ちに先方から來た手紙の餘白へ、朱筆なごで返事を書き、先方の名に樣をつけ、自分の名に附けてある樣を消して、それを送り返したやうなものもある。こんな手紙には、一幅の內に名流二人の一段の趣味を增す。

筆蹟を併せ見るを得て、單に二人の名のみの存するに比すれば、對照によりて

履端の御慶千里同風、奉恭賀候。先生益御機嫌能、被遊御重齡、抃喜之至

奉存候。右新禧御祝辭、且御動止相伺度、謹修短かの簡候。御序之節、宜

被仰上可被下奉願候。恐惶謹言。

正月八日　柴彥助　樣

又云、去秋西遊後時々相伺可申候處、遊歷中無定處、其故御無沙汰仕候。

此節京師に滯在候。延引之段宜御取成可被下候。草々頓首。

右は書家の市河米庵と儒者の柴栗山との間に往復された手紙で、その行ぎやうは拓くらの孤こと、栗山の書かれた朱筆の返書である。簡にも簡短で、丁度先輩が後進に對するやうな栗山の態度に、略ぼ兩者の關係も伺はれて、極はめて趣味が深い。但し此等の手紙になると、「書の趣味」の條下にも適用として云ふ事が出來る。

五、骨董趣味

即ち一種の趣味を形づくり、一通りの趣味を發揮するまでは、詩人、畫家は書家、或は學者、例へば時代別に、若し相助け合ひ順序に配列して、多く集つも、漢學者は、詩人、畫家は詩人、畫家は書家、或は學者、例へば時代別に、若し相助け合ひ順序に配列して、多く集つも、漢學者は、

一向に居るもの、骨董趣味は複雜で區別ないも、手紙から高價に取扱はれる事も事實である。必ずしも問題の力でこれらの價値味が、物々交換の上、一種の無形的の趣味を感ずるものは、畫家は書家、或は學者、例へば時代別に、若し相助け合ひ順序に配列して、多く集つも、漢學者は、

文人趣味の骨董は、ごく少くない。見るから、佳品の中でも、畫賛、詩賛、或は問題の力でこれらの價値味が、物々交換の上、一種の無形的の趣味を感ずるものは、畫家は書家、或は學者、例へば時代別に、若し相助け合ひ順序に配列して、多く集つも、漢學者は、

文人趣味の骨董は、ごく少くない。見るから、佳品の中でも、畫賛、詩賛、或は問題の力でこれらの價値味が、物々交換の上、一種の無形的の趣味を感ずるものは、畫家は書家、或は學者、例へば時代別に、若し相助け合ひ順序に配列して、多く集つも、漢學者は、

文人趣味の骨董は、ごく少くない。見るから、佳品の中でも、畫賛、詩賛、或は問題の力でこれらの價値味が、物々交換の上、一種の無形的の趣味を感ずるものは、畫家は書家、或は學者、例へば時代別に、若し相助け合ひ順序に配列して、多く集つも、漢學者は、

文人趣味の骨董は、ごく少くない。見るから、佳品の中でも、畫賛、詩賛、或は問題の力でこれらの價値味が、物々交換の上、一種の無形的の趣味を感ずるものは、畫家は書家、或は學者、例へば時代別に、若し相助け合ひ順序に配列して、多く集つも、漢學者は、

文人趣味の骨董は、ごく少くない。見るから、佳品の中でも、畫賛、詩賛、或は問題の力でこれらの價値味が、物々交換の上、一種の無形的の趣味を感ずるものは、畫家は書家、或は學者、例へば時代別に、若し相助け合ひ順序に配列して、多く集つも、漢學者は、

文人趣味の骨董は、ごく少くない。見るから、佳品の中でも、畫賛、詩賛、或は問題の力でこれらの價値味が、物々交換の上、一種の無形的の趣味を感ずるものは、畫家は書家、或は學者、例へば時代別に、若し相助け合ひ順序に配列して、多く集つも、漢學者は、

文人趣味の骨董は、ごく少くない。見るから、佳品の中でも、畫賛、詩賛、或は問題の力でこれらの價値味が、物々交換の上、一種の無形的の趣味を感ずるものは、畫家は書家、或は學者、例へば時代別に、若し相助け合ひ順序に配列して、多く集つも、漢學者は、

文人趣味の骨董は、ごく少くない。見るから、佳品の中でも、畫賛、詩賛、或は問題の力でこれらの價値味が、物々交換の上、一種の無形的の趣味を感ずるものは、畫家は書家、或は學者、例へば時代別に、若し相助け合ひ順序に配列して、多く集つも、漢學者は、

文人趣味の骨董は、ごく少くない。見るから、佳品の中でも、畫賛、詩賛、或は問題の力でこれらの價値味が、物々交換の上、一種の無形的の趣味を感ずるものは、畫家は書家、或は學者、例へば時代別に、若し相助け合ひ順序に配列して、多く集つも、漢學者は、

文人趣味の骨董は、ごく少くない。見るから、佳品の中でも、畫賛、詩賛、或は問題の力でこれらの價値味が、物々交換の上、一種の無形的の趣味を感ずるものは、畫家は書家、或は學者、例へば時代別に、若し相助け合ひ順序に配列して、多く集つも、漢學者は、

漢學者、國學者は國學者といふ風に大種別を立てゝ、さてその大種別の學者の中を、更に流派に依つて別ち、若くは父子兄弟姉妹を揃へ、若くは師弟の關係のあるものなどは、師の次へ門人を置くといふ工合にして見ると、用語や思想の上に、自然の脈の通じ得るのみならず、書體の上にも同樣の脈が通じて居るので、極めて面白い趣味を感ずる。山陽一家の書翰を集めて一卷にして見ると、人はいろ〳〵異なつて居ても、賴家の脈といふものが一貫して居て、それが一種なる點に於いて看取し得られる。又仁齋一家の手紙を一卷にして見ると、宋儒の五人の子息の所謂五藏の面目は各々變つて居ながら、矢張り同じ脈が一貫して居る所も見え、そして首尾藏一人が他の兄弟を拔いて卓絕して居ることをも看取し得られる。同じ手紙でも雜駁に排列して、俳諧師のうちへ漢學者を加へたり、詩人と歌人とを混入に組み合せたりなどしては、前後少しも脈絡がないから、毫も配合上の趣味は感じない。かの馬琴と親類交際をしたといふ「北越雪譜」の著者鈴木牧之の手紙の如きも、唯緣もない所に置いたゞけでは一向趣味もないが、これを馬琴の次ぎへ配すると、牧之が活きて來るといふやうな譯で、俳諧師の手紙なども、俳諧師同士時代を逐つて排べて見ると、初めて俳諧師通有の文體や、風骨もあらはれて來て、なか〳〵趣味深く感ぜられる。

六、附屬趣味

此の部類の趣味に名くる、適當の語がまだ思ひ當らない。姑らく附屬趣味と命じて置く。此の部類には、手紙の附屬品、例へば用箋封筒なども包含するのであるが、主として手紙の本文の情景を補足するために添加したものを指していふのである。即ち書心のある人が、目擊した山水の風景を手紙に寫し込むとか、或は人から物を貰つた禮狀に、その品物を寫生して挿むとか、或は自分の見た面白いと思ふ器物などを形で示すとか、或は繪半切などに趣を寓して、手紙の本文と照應せしむるとか、或は紅葉狩りに出かけし折などには、家づとの紅葉の一片を手紙の中に貼りつけて送るとか、或は新刻の印、若くは新獲の印などを手紙の餘白に捺して示すとか、或は又近作の俳諧詩歌を文句の中に點綴するなどは、皆此の部類に屬するもので、これが又手紙に趣味を添へることも夥しい。人より馳走になつた翌日、宿醉で起きる能はざる狀景を繪にして、返禮旁々送る書狀などは、たゞ管々しく禮を述べて遣すよりも、遙に趣味のあるものである。又旅行中その土地特産の用紙に手紙を認め、「この紙は當地の特產に係」と斷つて遣すなども、何となく趣味あるものである。封筒の如きも、今は無趣味の品のみ多いが、昔はいろ〳〵意匠を凝したものがあつて、これが爲めに本文の趣味を添へたものである。これはずつと昔のことであるが、手紙を人に遣す場合に、柳や櫻の枝などに結び附けて持たせてやるといふ事が行はれた。必ずしも柳や櫻の枝と限つた譯ではないが、其の季節々々の風情ある木の枝などに結び附けたので、其の紙の色と調和を保つやうに、その頃は紙も五色の色目といふのがあつて、自然木の枝などもそれ〴〵撰擇の法もあつた。此等も附屬趣味の一つといふべきである。それから今日行はれてゐる繪葉書なども、矢張り此の部類に入るべきものであらう。

〔をはり〕

○綿の木より紙を製す〔文明國に取つての大問題〕

文化の普及するにつれて、書籍、雜誌、新聞等の世に出づるもの其數次第に增し行くが爲め、其れに要する紙の需用は非常な高に上ることゝなつた。そうして其の紙は主として材木を原料として居るのだから、製紙の目的を以て山林を伐採する事が大變多くなつた。果ては新聞が世界の山林を無くしてしまふと叫ぶ人も出來た。所がこゝに新たなる福音が傳へられて來た。其は綿の木を以て紙を製する事が出來ると云ふ知らせである。

是れまで綿を產出する地方に於ては、其の木は無用のものとして投げ棄つるか、燒き棄つるかして來たのであるが、この綿の木の纖維は充分に強いものであるから、殆んど優等なるリンネル紙にも比敵す可きものを作り出す事が出來る。從來の紙と綿の木の紙との製造費を比較して見ると、從來一番安く上つたのよりも尚ほ安い。材木を使用するものは一噸につき、少くも十八弗、二十弗乃至六十弗の製費を要し、藁紙は十八弗中の製費を要するのに、綿の木ならば十四弗で出來る。之れを製するには從來の製紙機械を其のまゝ使用する事が出來るし、其の製出する紙の種類に至つては極めて粗雜なものから、極めて上等なものに至るまで、色々作る事が出來る。最上の纖維を有する各種の原料に關する比較研究の結果によると、書籍用として最も適當して居るのは綿の木であつて、之れを以て製した紙は他の何れのものよりも持ちが長いと云ふ事である。斯くの如く何れの方面より見ても、實に優れて居る紙が、今まで無用であつた綿木から製出せられ得ることゝなつたのである。

▲富士山頂より傳書鳩……本年一月五日成功雜誌社發起の雪中富士登山隊の一行は、通信用として中野電信大隊將校團より傳書鳩五羽を借りて出發せしが、翌六日午後五時頃、同大隊の小使某が隊の裏手なる軍用傳書鳩移動車の上に一羽の鳩が羽を休め居るを認めたれば、早速捕へたるに右の足に係著せるアルミニューム製の小罐の結びあるを發見したれば、之ぞ雪中富士登山隊よりの通信ならんと、直に將校團に持行き開き見るに、果して右の通信罐中より顯はれたりきと。

探險世界主催雪中富士登山隊員二十九名警官三名強力十二名明治四十二年一月六日萬難を排し無事絕頂に達し之を放つ

中野電信大隊將校團御中

探險世界富士登山隊

○手紙は如何に書くべき乎〔談話筆記〕

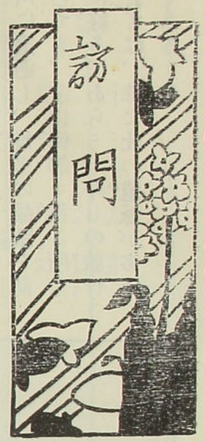
東京市第二部長　宮川鐵次郎

私は手紙を書くのが甚だ臆劫で、大抵の用は訪問して充分胸襟を披くといふ主義である。されど遠隔の地にはさうも行かぬ、勢ひ龍蛇を走らさなければならぬ。要するに私の平生餘り手紙を書くを好まぬといふ理由は、即ち手紙の書きやうが惡いと、とんだ失策を釀すことがある、手紙と云ふものは決して輕々に書くべきものではないといふ事を痛切に感じて居るからで。處で日常私の接する手紙のうちには、隨分蕪雜なのや、又は非禮なる用語で無遠慮に書いたものなどもある。尤も懇親の交通には豈敢て咎めんやで濟むでもあらうが、なお程交際の深く無い間柄とか、或は依頼の手紙などには、發する方で餘程注意を拂はぬと先方の惡感を招き、結局手紙の爲めに意外な失敗に終る場合もある。故に手紙の處世上に及ぼす効果は、決して等閑視すべきものではないと思ふ。手紙には古より時代々々にそれ〴〵謹嚴な形式があつて、中々六ケ敷い。で、此の典型は誰れでも一ト通り心得て置かねばならぬ。敬語の如きも先方の身分によつて、それ〴〵慣例のあつたのに、現今は殆んど無頓着で、甚しきは閣下の敬語をお先構はず濫用する者さへあるが、所謂敬に過ぐるは禮に非らずで、敬語の程度を失したのは、受取る方では却つて不愉快なものである。如何に時勢の推移があるにしても、矢張り全く之れを度外視することは出來ぬ。強ち昔其の儘でも餘り正直過ぎるが、墨痕淋漓として兎に角形式にかなつた手紙は、受取つた方でも見るからに心地が好い。然るに世間の多數者の手紙が、漸々亂雜に陷りつゝあるのは、甚だ歎げかはしい譯ではあるまいか。

凡そ手紙の文は、其の心情をさながらに示して、極めて讀み易く、解し易きを主としなければならぬ。若し最初から高尚な文を作らうとすると、却つて意味が通じなくて、用の辨じないものであるから、先づ前後通讀して、意味の通じない箇處を訂正し、誤字脫字を改修し、心に滿足するに至つて、始めて發送するやうにすると、さまで人の笑を招くやうなこともなく、濟む。事柄の如何に係はらず、文意の調はぬ手紙ほど迷惑なものはない。

時候見舞又は久しく遇はざる人、遠方にある方などへ遣す手紙は、先づ寒暑の挨拶を述べ、動靜の如何を詳しく書す方が宜しい。併し常に遇ふ人及び急ぎの

四十二年四月旅行タイムス所藏
早稲田大學圖書館



（イロハ順）

旅行に就ての心得

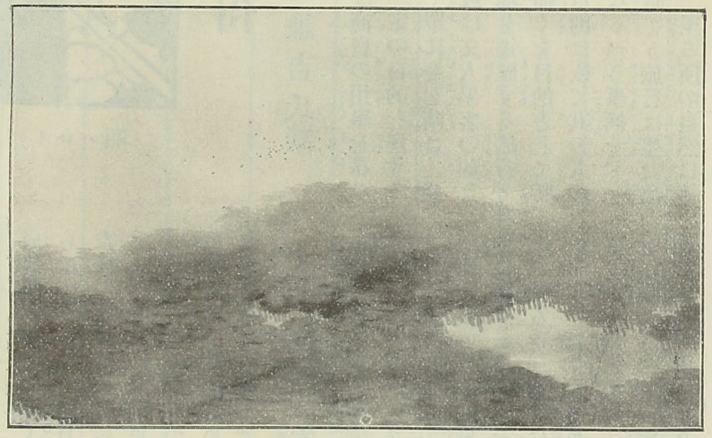
早稲田圖書館長　市島謙吉氏談

▲旅行には種々の目的がある、或は商賣の用事を帶びて甲地より乙地に移り歩行き乍ら一定の目的を達するものもあらう、或は何の目的もなく單に憂を晴さん爲め漫然と旅行するものもあらう、或は文人墨客の如き詩を吟じ歌を詠じ俳句を作つて各地を遍歴する旅行もあらう、或は丹青家の如き風景を描くを目的として勝地を探るものもあらう。斯の如く目的に依て其の人の思想が違うから、旅行者の心得となるべき事柄を、一概に言盡すことは能ない。乍併昔時より旅行は生た學問をする機會だと言れてある通り、至る所の自然に接するのであるから、旅行の目的の如何に拘はらず、可成自然に觸れて多く得る所のある樣に心懸なければならない、旅行に數日若しくは數十日を費しても、歸つた後に身體が丈夫になる氣分が爽快になつたといふ丈では、いかにも物足らぬ次第ではあるまいか、折角旅行をするのであるから、其の結果必らず得る所多きを希望する。此が爲め其の心得となるべき事を一ッ二ッ述て見やうと思ふ。

旅行に先つこの準備

▲旅行には豫め準備を整ひ置くことが最も必要である準備と言たからとて行李を整ひたり荷物を纏めたりするのを指して言ふのではない、出かける方面の地理は勿論、其の大體の歴史、或は重なる形勝の地、或は風俗に關する事柄抔を、一通取調べることを言ふのである。然る時は實地に臨んだ場合豫じめ調べた此の智識が暗示と爲て、意外な事實を發見することがある、假令ば其の地形を見ては往昔英雄が鎬を削つた戰場の跡を指點して、其の戰術を云爲するとか、或は山川の形狀を見て水害の多きを察し、人民が困窮の狀態を知る

とか、或ひは風俗を見て人氣の好惡を辨知するとか、未だ嘗て他の氣付かなかつた新らしい方面に考慮を趁らせることが出來る。今日の如く、汽車で一日に幾百里を旅行する人などには、茫然すると殆んど地名さへ、頭に入らぬ場合が多く、國堺ひが何處であるかさへも判らない、這麼忙しい旅行には猶ほ更準備の必要を感ずるのである、老し一通りにても其の地理を知らなければ、幾百里の旅程を重ね、幾多の國々を經過して、幾多の山川に遭遇し、幾多の故蹟を訪問しても、遂に何等も得る所なきに終るであらう、今日の旅行に於ては、殊に此の遺憾が多いのである。



夕照　（木村武山氏畫）

不精は禁物

▲旅行中の不精は最も禁物としなければならぬ、不精には種々あるが、先づ第一には面白い場所のあるに拘はらず、面倒臭いと言つて訪ね樣ともせず、汽車に乘れば直ちに寢轉んで眠つて了う、此れは單純な用向の爲め、甲より乙に行く場合は兎に角、苟くも、旅行に依つて多少得る所あらうとするものゝ、最も禁ずべきことは不精である。急忙ぬ旅行の時には度々汽車から下りて、有名な風景或ひは古寺若しくは舊蹟等を訪問すべきものであるが、平生不精な人には、急に此れが行はれるものではない、併し旅行は滅多

早稲田大學圖書館

に無い機會であるといふ考で、面白い場所有益な場所には暇めて立寄ることが肝要である、此の次に來た時訪ねやうといふことは、實際に於いて第二の事實とならぬ場合が多いから、面倒とか臆劫とか思つても、其の時必らず訪ねべきものである。此は行道の上の不精であるが、人と談話することを面倒に思ふのも亦一の不精で、共に禁じなければならぬ事と思ふ、何時間でも何十時間でも全く默つて歩行く人がある、此は性質にも依るであらうが、旅行中には此の沈默を破るの必要が生じて來る、不見不識の人を相手とし解らぬ四方山の話をすることは、種々の事柄に亘つて頗る得る所が多い、殊に何か取調べる必要のある場所抔は、此の話から意外な材料を得ることもあり、行先の事に就ても其の大體が判明つて種々の便利となることがある其の相手として決して上流の人とは限らぬ、如何なる人として差支はない、馬に乘つた時は其の馬夫、荷を擔した時は其の人夫、此等のものと談話をしても得る所はあるもので、時としては一年かゝつても解らなかつた事實が、此の談話の爲めに全く明瞭となることもあり又恁樣な話が後日に及んで寔に好い語り草となるのである。則ち旅行中は沈默を破つて非常な饒舌家とならなければならない、又人を訪問し人の訪問を受ることも肝要で、身體が疲勞れたから夜は人を訪問しないとか、人が訪問して來ても此を蒼蠅がるとかいふのも亦一の不精である、平生は兎も角旅行の時は自ら自分を責めて此の不精を矯正し、時間の許す限り人を訪問し人が來れば欣んで此を迎へ、深夜燈を剔て談話するといふ事が、利益を得る上に最も大功である、且つ訪問客ばかりでなく、旅宿の主人、若者、下女等に對しても同じく談話を交へるのは無用の事でない。此を要するに不精は旅行に禁物であつて慎めて此を匡正しなければならぬ。

携帶する書籍の撰擇

▲旅行には撰擇した若干の書籍を携帶することが必要である、殊に長い旅行には此の書籍の撰擇を大功な事として忘れてはならぬ、今日では到る處に小說雜誌の類を販賣して居るから、旅中無聊に苦しむ樣なことはあるまいが、今私が言ふ所は此とは全く別のもので、小說雜誌抔よりも以上の趣味を有ちたいと思ふ、旅行中に讀書することが平常自宅に在て讀書する時よりも利益の多いことは、實驗上明かな事實である、係累を離れ市塵を避けた境遇に居て、頭腦が受動的に爲てるから、能く書中の趣味を感じることが出來て、曩に會得し難かつた事迄も容易に解得せられる計でなく、平素面白く無つたもの迄が、他に友とすべきものが無いといふ所から、案外に趣味を感じることがある、手近い例が詩、俳諧の書籍の如きもので、時としては自分が經過したる所と同じ風景の詩などを讀む事もあつて、非常に風味を覺える場合がある、且つ家宅で讀書した時よりも深く頭腦に殘つて、殆んど一生涯忘れることが無い、夫れ故に旅行の伴侶を擇ぶと同一に、前以て携帶すべき書籍の撰擇を、旅行準備の一として誤らないことを希望する。（水生）

お斷り　市島謙吉氏の穩健にして有益なる談話は、愈〻出で、愈〻盡きず、依て如何にもして全部これを掲載せんとしたれど、何分紙面に豫定あり、爲めに止むなく次號に割愛せり、切に氏の諒恕を祈る（翠葉）

雲　雀　小瀧　健

雲に入ると見えし雲雀も菫咲く
野をなつかしみ今そ落くる

旅人と名古屋市

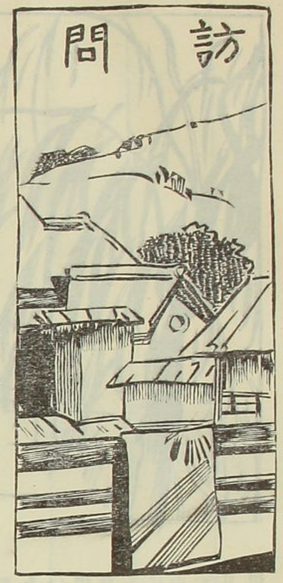
八

文學士　堀田璋左右氏談

旅行者で名古屋市を眞に解し得るものは殆んど無と言と好らう。名古屋市の眞相は北の方俗にいふ上の方に多く發見せられるのに拘はらず、旅行者は通行に便利な所から唯廣小路を覗つたのみで名古屋市を判斷するから遂に甚しい誤謬を來す事となるのである。料理店として有名な川文魚半の如きも北の方にある、又名古屋市の名物たる歌妓より見ても、藝を以て聞えた清榮連は卽ち北の方にあるので、廣小路には唯朝日連と稱して顏を賣るの一團がある而已で、料理の如きに至ても北の方より遙に優つて居る、其他は以て察する事が能ると思ふ。

旅行者が名古屋市に來て人を訪問する時に、先づ最初に驚かされるものは、茶骨董遊藝等の嗜好が一般に及んでゐる事である。是れ往時骨董品等が長崎から江戸に入る時分に、順序として高松と名古屋とを經由した關係から、這麼趣味性を養つたこと、思はれる。さ

早稲田大學圖書館



旅行に就ての心得（續）

早稲田大學圖書館長　市島謙吉氏談

夫から經過した旅行中の事柄を書記すのは此も頗る肝要なことであるが、日誌でも紀行でも必らず其の場合に記載するといふ事を特に忘れてはならぬ。草臥れてから旅宿に着いて酒杯を飲み始めると、筆を執り難い場合もあらうが、此は自ら自分を責めて記載する樣にしなければならぬ。長途の旅行には猶更此を奬勵する。多くの人は能く歸家つてから書くといふが此は却々事實行はれない場合が多い。結局巧に書うと思ふから臆劫になるのである。元より他人に見せるものでないから、見た事聞いた事をありの儘に記載すれば好い。何も勉めて巧みに記載するの必要は無い。其の日に見、其の日に聞いて感じたことは其の日に於て最も新しいものであるから、いかに拙く書いたものでも、其の日に書いたものには新しい味が籠つて居る。故に後日書改めたものよりも其の趣味に於いて勝つて居る。此は一種の習慣であるから、常に此の習慣のある人は何でも無いが、習慣のない人でも一日二日と其の習慣をつけて行けば、遂には其の日の事を記載しなければ氣が濟ぬ樣にもなり、又記載するのが樂みともなつて來る。自宅に在る時は格別變つたことも無いから、毎日書記す必要が無いかも知れぬが、旅行中は人に執て最も變化の多い場合であるから、此を書留めて置けば後日の爲めに利益となり、又他日讀んで樂みともなる。後に紀行を書うと思ふものは猶更其の日に記載しなければならぬ。而して此處に此を記載する爲め多少の時間を餘すといふ必要が生じて來る。旅行中は朝早く出發て夕方早く旅宿に着くといふのが一の要訣である。旅宿に於ける朝は何にもならぬもので、二時間三時間旅宿に居たからとて何の利益にもならない。眠いのを忍んで出發すれば氣分が爽快な斗でなく、夕方六時に着くものを四時とすれば、其處に日誌を書く時間が生じて來る。且つ其の土地の見物も出來、人を訪問するおとも又人の訪問をうけて談話をすることも能て種々な便利を得るやうになるのである。

橘南谿を學べ

旅行に關した種々の書籍を見た中で、自分が最も興味を感じたのは、橘南谿の東遊記と西遊記とであつた。此は一種の紀行であるが、日々記載したのではなく、隨書的紀行とも言ふべきもので、經過した中の重なる事柄を捉へて、此に南谿の考へを書加へたものである。南谿は醫者であるから着眼がいくらか理學的で、物に觸れ事に接して考へた結果が頗る面白い。當時の人であれ程の考慮を着けたのは實に非凡といはなければならぬ。全く旅行者の標本となるべき、研究をしたやうに思はれる。今は南谿の時代とは違つて、學校で地理や理學に關する素養を得るのであるから、一樹一石に接しても心懸次第で何んな發明をすることも能る。多くの時日と金錢とを費して、屢々能ない旅行をするのであるから、日誌や紀行に其の行道を記すばかりでなく、南谿の樣に有益な結果を殘すのが最も趣味ある事と信ずるのである（水生）

早稲田大學圖書館

早稲田大學圖書館

早稲田大學圖書館

第一期刊行顚末

國書刊行會理事　市嶋謙吉

國書刊行會第一期の事業も玆に完成を告げた。豫定の三年よりも幾許か延びたのは甚だ遺憾であるが、併し月刊の雜誌ですら三年間繼續することは容易ならぬ世の中に、斯程の大出版を企てゝ、假令期限は幾分おくれたにもせよ、兎に角當初の目的を貫徹し、會員諸氏に對して果すべきの務を果したのは、經營者たる自分に取つて、非常の幸福として自ら祝せざるを得ざる次第である。今四年前の既往に遡つて、此の會發起の當時を追懷し、併せて其の後の經歷を少しく語るのも、會の大段落に際して已み難き自然の情である。

發起の由來

去る卅八年の六月頃と記憶してゐる、かねて相識る今泉定介氏が一夕自分宅へ來訪して、今度書肆などの企て及ばない出版事業を起して見たいと思ふ、就ては圖書趣味を有してゐる貴下の意見を聞きたい、と云ふから、それは善い思ひつきであるが其の方法は、と尋ねると、今泉氏は髯を撫でながら、方法は實費主義の會員組織として、成るべく廉價を以て立派な書籍を仕立て、會員數の增加に準じて紙數を增すことにすれば、隨分澤山の出版が出來やう。勿論會員組織も實費主義も格別斬新な案ではないが、前に試みた人は殆ど皆失敗に終つてゐるから、今度企てるには其の轍を履まぬやうに、第一に基礎を確實にする必要がある、就ては德望の高い大隈伯を總裁に戴いて經營して見たい、貴下も是非計畫の衝に當つてくれよ、といふ懇談であつた。元來自分は、日本の圖書が從來種々の原因によつて散逸したのみならず、現今に於ても貴重なる古書が、或は外國へ持去られ、或は名門舊家に秘藏されて世に出る機會を失ひ、或は災禍の爲めに天下の一本を失ふことのあるを、平生慨嘆すると同時に、有益なる前人の著作が大部の故に、若しくは出版しても引合はぬと云ふ理由から空しく埋沒してゐるのを深く惜んでゐる。自

早稲田大學圖書館

分が圖書館事業に經驗を得てから此の感じが愈々強くなつた。嘗て某氏は自分と同樣の考から、全國の貴重圖書について副本一部宛を作り、之れを大圖書館に保存したいと唱へたこともあるが、それには莫大の費用がいる、そんな財源は早速に得られない。又一部づゝの副本では廣く閲覽の便を與へる譯にゆかぬ。寧ろ徐々にでも公刊して、追々世間に流布させる方が却て捷徑で且つ有益であらう。今回の今泉氏の案がそれに誂向きと思つたが、玆に注意を要する肝要な點は、此の事業は全く營利を離れた遣り口でなければ成立つまい。第一大隈伯を推すにしても自分が肩を入れるにしても、書肆の提灯を持つ樣な譯では結果のうまく行かぬは必定、と考へたから、以上の所懷を逐一今泉氏に語り、出版書肆たる吉川弘文館に關係ある今泉氏の態度について念を押した。これに對して、會は斷じて書肆と關係をもたずに、飽くまで獨立の事業として成立たせる筈、但し印刷配本等の事は、經驗ある弘文館に受負はせた方が便利であらう、と云ふ確答を得た。受負の點は自分も異議はないが、會の本躰は徹頭徹尾獨立にせねばならぬ。必ず獨立にする、といふことで相談が纏まり、間もなく會の獨立を保證する爲めに、大要左の意味に基づいた契約を弘文館と取結んだ。

一、吉川弘文館は毎月壹回貳冊に付壹千乃至貳千頁の圖書を、必要の冊數だけ印刷し、製本の上之を國書刊行會の會員に送付することを受負ふものとす。

一、印刷代及製本代は部數の增減と時價の變動に因り、協議の上別表の見積金額を增減することを得。

一、吉川弘文館は毎月貳冊分の原稿を國書刊行會より受取り、其日より六十日以內に印刷配本を完成するものとす。

一、吉川弘文館が右の條項を履行せざるときは、何時にても契約を解除することを得。

主腦機關の成立

自分が愈〻經營の衝に立つことに決心してから、着々計畫の歩を進めた。大隈伯へは三上參次、畠山健の兩氏を同伴して自分が行き、重野博士へは今泉氏と

山田安榮氏が賴みに行き、どちらも快諾を得て、總裁と會長とが定まつた。又世間に對して金錢上の信用を堅くするには、實業界の名望家を要するといふ議について、豐川良平氏に懇談に及んだ處、喜んで理事たることを承諾せられ、評議員もそれ〴〵定めて玆に會は成立を告げた。評議員に推したのは左の人々で、京阪に涉つて、圖書趣味を有する學者を略〻網羅した積りである。

市村瓚次郎氏　今井貫一氏　芳賀矢一氏
畠山　健氏　萩野由之氏　星野　恒氏
和田萬吉氏　幸田成行氏　幸田成友氏
狩野亨吉氏　吉田東伍氏　高田早苗氏
田中義成氏　坪內雄藏氏　坪井九馬三氏
上田萬年氏　井上賴圀氏　井上哲次郎氏
大槻文彥氏　黑川眞道氏　楊　龍太郎氏
前田慧雲氏　松井簡治氏　松本愛重氏
藤澤南岳氏　小杉榲邨氏　赤堀又次郎氏
木村正辭氏　湯淺吉郎氏　三上參次氏
三宅英慶氏　島　文次郎氏　物集高見氏
關根正直氏　（いろは順）

劈頭の問題

會の成立後眞先きに大隈總裁邸に開いた評議員會には、席上種々の說が起つた。第一に問題となつたのは會の名稱である。原案は國書保存會とあつた、保存の二字は消極的に聞えて妙でないといふ所から、重野會長の說により現在の名稱に定めた。次ぎの問題は刊行圖書の選定である。先づ塙檢校の續群書類從を刊行するが急務でないかといふ說もあつたが、是れは兎も角も經濟雜誌社に於て出版着手中だといふ理由から敗れて、遂に塙の後を承け新に續々群書類從二十冊を編纂する事となつた。併し時代の古い硬い物ばかりでは、軟派の會員に滿足を與へられぬといふ說も有力で、別に坪內氏の提案に依つて、新群書類從十二冊を編纂して文藝に關する卑近の書物を取入れることにした。この外に第一年度の事業として、古今要覽稿、玉葉、源注餘滴、新井白石全集、近藤正齋全集の五種を選定した。近藤重藏の全集については、當時樺太問題につれて彼れの事蹟が世間に喧傳せられた折柄、際物の嫌ひはないかといふ議論

もあつた。第三の問題は會期の句切り方が長過ぎるといふ事であつた。二年説も唱へられ、一年を一期とし期を重ねて行くといふ説も起つた。併し二種の群書類從を刊行する上は一年間に迚も出しきれぬ、二年でも未だ他の書物を出す餘地が少いから、三年と据ゑ置いて他の書物をも色々配合して出すがよいといふ事に歸着した。第四は紙數の問題である。表面からいへば、經濟の許す限り成るべく多量に出版すべき趣意であるが、又初めに控へ目にして置かねば前途に困る事があらう、會の一盛一衰は豫め覺悟せねばならぬといふのも至當の議論である。

會員募集の次第

さて幹部も成立ち大體の方針も定まつたから、愈〻會員募集に着手した。初めて全國の新聞に廣告したのは卅八年の八月一日、續いて東京の新聞紙に廣告も出し、直接又は書面の勸誘もやつた。發表後暫くの間は一日の申込三人か五人であつたから、結局三千に達すれば最上、或は二千もむづかしからうかと懸念して居たのに、九月中旬頃からだん〳〵率が殖えて、〆切間際には一日に二百五十九人（十月廿九日）の入會を受付けたこともあつて、遂に三千を超過するに至り、卅九年五月十日の調査によると、（その頃配布した會員名簿に列記した通り）役員を除いて三千七百六十三名、これを府縣別にすれば、

北海道	七五	三重縣	四一	富山縣	三二
東京府	一、一七五	愛知縣	八五	鳥取縣	九
内市部	一、一一六四	静岡縣	三六	島根縣	三〇
京都府	一八一	山梨縣	二〇	岡山縣	六〇
大阪府	三九五	滋賀縣	四三	廣島縣	八三
神奈川縣	一〇八	岐阜縣	二九	山口縣	三二
兵庫縣	一二七	長野縣	六八	和歌山縣	二三
長崎縣	三四	宮城縣	三七	徳島縣	二四
新潟縣	一四九	福島縣	四一	香川縣	三三
埼玉縣	二八	岩手縣	三三	愛媛縣	二七
群馬縣	三八	青森縣	三〇	高知縣	二〇
千葉縣	六一	山形縣	二五	福岡縣	一〇六
茨城縣	一六	秋田縣	四五	大分縣	九
栃木縣	四九	福井縣	二五	佐賀縣	二三
奈良縣	三八	石川縣	三四	熊本縣	四九
				宮崎縣	一〇
				鹿兒島縣	二一
				沖繩縣	二
				臺灣	四三

となる。一名にて數部申込んだ人もあるゆゑ、部數にすれば四千に近い。又三年間に會員の異動は免れぬ所であるから、闕員の補充として第二年度及び第三年度にも若干募集した結果、會員籍に在るものは一時四千以上に達した。

會員の特徴

會員の内に實業家が非常に多いことを特に一言しておきたい。實業家と云へば、平生多忙の故でもあらうが、新聞を讀む位が關の山、古書などは振向きもせぬものと相場がきまつて居るのに、此の擧に就ては意外の現象を呈し、例へば大阪のごとき、銀行家商業家が卒先して入會し、一時同市内總數四百餘名の多きに達した。これは主として町田忠治氏中橋徳五郎氏など實業家の特別盡力の結果である。

刊行の初聲

外に向つて募集に勉めると同時に、内部では刊行の準備を怠らなかつた。編輯所兼事務所といふのは、弘文館の倉庫の二階、狹い汚い十二疊と十疊の二室であつて、或る夏のこと、新聞に酷暑汗行會の冷評を掲げられたことさへある。成るべく冗費を省くといふ方針から、此の手狹の場所で、原稿を寫す、校訂もする、應接もする、庶務も扱ふといふ騷ぎ、さながら戰場の如く慘澹たる光景のうちに第一回の刊行本が出來あがり、其の年（卅八年）十一月廿六日に配本を始めた、それは古今要覽稿第一と近藤正齋全集第一とである、急拵へのためにいくらか不滿足の點は免れぬが、兎に角一同初兒の顔を見ると同じ感があつた。

成功の一要素

續いて十二月には最も厚い藩翰譜と續藩翰譜とを出し、爾後陸續發刊するのを見て、世間の出版業者等は非常に驚いた。彼等は當初自己の營業上の經驗から割出して、刊行會のやうな仕事は不成功に終るべきものと觀測し、學者の空想に過ぎぬとまで冷笑して居たのに、事業の着々進行するのを見ては目を圓くせずには居られぬ。某大書肆の主人は一日自分に向つて、「斯程の大事業を見事に盛り立て、我々商賣人にすら困難なる大出版を滯なくやつて行く手際は實に敬服である。基礎の既に堅まつた上は必ず有終の美を見るに相違ない。」と云つて前途を祝し、さて會員の數四千と聞いて益〻驚き、歎息して言ふには、「それ程の人が集まつたのは、貴下等が素人である爲めに、却て此の會が眞に營利を離れて居る事を廣く認められたからである。商賣人が企てたら迚もこれ丈の同情と賛成は得られぬ、成功の要素は意外のところに潜んでゐるものだ。」と眞底から感心した。誠に一理ある言葉と思ふ。

方針の一轉機

豐川氏は繁劇の身を以て傍ら會の會計を監督し、自分は庶務を指揮し、編輯の方はおもに今泉氏が擔當された處、氏は不幸にして二竪に犯され、卅九年三月遂に會と全然關係を絶つことになり、爾來自分が單身經營の任に當つた。勿論重大の事件には豐川氏の助言を藉りた。刊行に對する最初の方針は、どちらかと云へば圖書の實質よりも分量に重きを置く方であつたが、經驗を積むに及んで、永久保存の性質を保たせるには實質内容の勝れたものを拵へねばならぬと悟り、爰に方針を一轉し、從來少數であつた編輯員を增し、參考書も追々備付けた。卅九年の春黑川矢野兩氏を迎へてより編輯局の組織も整頓し、原稿の校訂、活版の校正ともに頗る嚴密なる注意を加へ、尙ほ編輯上の統一を圖るために、四十年十月より左の内規を履行することにした。

校合内規

一變體平假名ハ現行活版ノ假名ニ改ム。

いろはにほへとちりぬるをわかよたれそつねならむうゐのおくやまけふこえてあさきゆめみしゑひもせすん

一假名ヲ疊ヌルトキハ左ノ例ニ從フ。但二行ニ渉ルトキハ〳〵〳〵ヲ用ヒズ。

テヽ　るゝ　ソレ〴〵　ちやう〳〵　じようし　よう　じよう〳〵

一片假名文中ノ「メ兀片」ハ本ノマヽトス。

一一文中ニ片假名平假名ヲ混用シタルモノハ多キ方ニ一定セシム。但原本ノ體裁ヲ保存スル必要アルモノハ此ノ限ニアラズ。

一平假名文中ノニハ而ハにはてニ改ム。

一いゑハ候也ニ改ム。

一ゟハ適宜本ノマヽ。

一古字略字俗字ハ「適宜普通ノ字ニ改ム。（例ハ今略ス。）

一和文漢文共ニ句讀點丶ヲ附ス。

一短歌ニハ句讀點ヲ附セズ、長歌ニハ句讀點ヲ附ス。

一和歌ノ詞書ニハ句讀點ヲ附ス。

一漢文ニハ反點ヲ附ス。但詩ニハ反點ヲ附セズ。

一振假名ハ特殊ノモノヽ外ハ省略ス。

一漢文ノ送リ假名ハ省略ス。但特殊ノ塲合ハ此ノ限ニ非ズ。

一序跋奥書等ハ漢文ニテモ反點ヲ附セズ。

一假名ノ濁點ハ和歌ノ外凡テ之ヲ附ス。

一忌諱ニ依ル闕畫闕字ハ之ニ拘泥セズ。但古文書、銘ノ如キハ例外トス。

一誤字脫字ノ極メテ明ナルハ之ヲ訂正ス。

一目次ハ編首ニ掲グ。但塲合ニヨリ各書ノ首又ハ各卷ノ首ニ掲グルコアリ。

一注多キトキ、五行以内ハ六號分注トシ、五行以上ハ五號一字下ゲトス。

一頭書ノ長キハ本文ヨリモ一字下リトス。其ノ短キハ六號分注トス。

一異本ノ字句、短キモノハ六號ニテ右傍ニ記シ、下ニイ字ヲ附ス。其ノ長キモノハ六號ニテ◎一本作……又ハ（◎……）ト分注ス。

一書翰文ニモ反點ヲ附ス。

一假名遣ハ原本ノ用例ニ從ヒ略〻一定セシム。

一漢字ヲ疊ヌル例、往々　多謝々々　但二行ニ渉

早稲田大學圖書館

ルトキハ々ヲ用ヒズ。
一漢字副詞ノ例、屢、益、愈、
一衍字ハ左傍ニ線――ヲ附シ、右傍ニ衍カト附記ス。
一補字ハ〔　〕ヲ以テ圍ム、尙右傍ニ補字ヲ附スルアリ。
一校訂者ノ案文ハ六號トシ◎符ヲ冠ス。

行路難

三年の行路は坦々たる大道ではなかつた、山もあれば河もあつた。苦心談といふも仰々しいが、少しく困難の經歷を語つて見やう。經驗に乏しい素人の事業にして非常に多數の會員を得たことは、實に商賣人をして後へに瞠若たらしめた、けれども、これは會の信用がおのづから人を引附けたので、別に骨も折れなかつたが、會の目的たる刊行の仕事こそ當事者の最も心血を注いた所である。自分等は彈藥糧秣を貯へる暇なくして陣頭に立つた。三年の出版を繼續するには、尠くとも一年以上原稿を整理しておいて着手するが至當の順序である。かの修史局の設けられたのは明治五六年頃、大日本史料が初めて一冊出たのが明治卅四年だから、三十年は準備に費された。玄かも多士濟々たる史料編纂掛は今日までに史料と古文書とを合せて卅五六冊出版したに過ぎない。然るに我が國書刊行會は眇たる民間の一團體を以て、毎月二冊の出版を企てながら、國庫の補助もなく富豪の庇護もない故に、僅に半歲を準備に費す餘地もなく、發表するや否や刊行に取掛つた。無謀といへば無謀の極であるが、蓋し民間の事業には已むを得ざる所であらう。

困難の根元

古人の著はしておいた圖書を其の儘版にする位容易の事と早合點する人もあらうが、實際は大違ひで古い本なればこそ色々の困難も起るのだ。新しい著述ならば不審の所を著者に質す便利もあり、さなくとも思想感情の相近い今人の著作は、大抵推測しても讀み得られやうが、古人のはさうは行かぬ、字句の末まで考證する面倒がある。古書の中にも比較的骨の折れぬものは大抵是れ迄に版になつたから、會で

出すものは自然難物づくめになる。少しは板本も採つたが十に八九は寫本を元としたのである。

寫本の性質

寫本といふもの、一通り讀むだけでは著るしく缺點も目立たないが、細かに調べると、どれにも多少の誤脫があつて、一本だけで滿足する譯には行かぬ、どうしても數本引合はせる必要がある。全體よく〳〵の熱心家ならば一應校合もしておかうが、大抵は寫し放しである故、筆耕者の機械的に寫した者は脫漏は少くても誤謬が多く、學者自ら寫したのは誤こそ少けれ脫漏を免れない。何れにしても瑾はある。嘗て會で手に入れた長門本平家物語及燕石十種は、かねて好事家の間に評判の寫本であつたが、それを原稿につぶす前に他の二三本と對校を試みた處、一枚毎に眞赤に直されて用をなさぬために、寫しかへることにした。その眞赤な訂正本は今も保存してある。又創業間際に刊行した蔣翰譜續編は、急速の場合、早稻田大學圖書館所藏の寫本を聊か補訂して印刷へ廻した處、活版校正に臨んで大苦痛を感じた。白石全集の他の部分並に神祇部にも傳寫本を幾分流用して苦い經驗を嘗めた。善い寫しならば成るべく寫本を利用して捗取りを助けたいといふ最初の希望は畫餅に歸して、原稿はすべて原稿紙に淨寫することにしたから仕事は一層殖えた。

自筆本は如何

傳寫本に比べて著者の自筆本は遙に正確であるが、讀み惡いことは一層甚しい。時間を惜んでの走り書きは自身すら後に讀み得ぬことがある、他人には尙更讀めぬ筈だ。小山田與清が薄墨で書いた松屋筆記の如きは、讀むといふよりは符號を飜譯する方だ。幸ひに此の本は和漢書の拔萃だから、一々原本に當ればわかりはするが、時間をつぶすこと夥しく、中には原本の得がたいものもある。總じて自筆の稿本には、書きかけにして筆を止めた箇所、後に引用文を入れるつもりの餘白、細字の書入れと本文と聯絡の分らぬ場所などいくらもある。綿密なる伴信友のにすら此の例があるから、他は言ふ迄もない。寫本のうちは見許さるゝ缺點も、活版になれば誰の目にも

早稻田大學圖書館

つくゆゑ、校訂者は何とか始末をつけねばならぬ。一字一句のために、或は圖書館に馳せ、或は先輩を叩き、數日頭を惱ます苦心は、局外者には殆ど察しもつくまいと思ふ。

板本も不信用

然らば板本は如何といふに、ずつと古いのは流石に誤の少い代りに、多くは文字が磨滅してゐるか又は零本になつてゐる。近代のものに至つては殆ど信を置くに足らぬことは夫木抄によつても十分證明される、會では寛文板夫木抄を原稿に用ひて失敗したのである。朝鮮板は割合に正確と稱せられてゐるが、高麗史の中には歴然と文字の誤りを幾らも指摘することが出來る。

良筆耕者只一人

傳寫本でも自筆本でも一旦寫し取るのであるが、此の筆耕がまた非常にむづかしい。創立の當時筆耕者を募集し、試驗の上採用したのが八九人、血氣の青年揃ひで古風の草書や變體假名を讀みかねる連中であつたから、一方には脫字を防ぐ樣にもと、原本を映寫させた、處彼等は早いを主眼にして一日に五十枚寫した者もあつた。斯うして出來た源注餘滴は徒らに蚯蚓の行列となつて紙屑籠に葬られ、同じ頃寫した古今要覽稿の大部分は屢〻校訂者をして筆を拋たしめた。爾來これに鑑みて映寫を廢し、行草は楷書に、變體假名は普通假名に直させることにした。筆耕がよければ校訂の勞を半減し、筆耕がわるければ校訂の勞は何倍にもなるのであるが、よく校訂上の便利を考へて立派に古書を寫した者は、前後二十餘人の中に只海保某一人あるのみだ。

善本の搜索

缺點の多い古書の中から成るべく完全に近いものを撰んで、これを底本と定め又は對校に用ひる方針であるから、善本の發見について非常に骨折つた。自分がかねて唱へてゐる古書登錄の議が行はれた曉には、搜索も容易に出來やうが、未だ其の設備もないから、各圖書館各文庫の藏書は目錄に就て搜しもするが、家々に秘藏してあるものは、先づ其の所在を

聞出し、次に紹介を求めて借出さねばならぬ、場合によつては貸出しは叶はぬとあつて、閲覽に出頭を命ぜられる。幸ひに會の評議員には圖書通の學者が多いゆゑ、其の助言によつて材料の蒐集に多大の便宜を感じた。例へば白石の東雅は、流布本の外に著者の自筆本が內閣文庫にあることを知つてこれを底本とした、續燕石十種は全躰の五分の一(八種)まで著者の自筆本に據つた、伴信友の著書も大部分自筆草稿本と對校した。珍稀なる者には神田本太平記の如き先年修史局へ貸した外一切閲覽も許されなかつたと聞いてゐる、この古寫本を採つたのは苦心の存ずる所であつたが、意外にも少數の會員から、なぜあんな零本を出したかと詰問を受けた、白石の改貨建議も原本は某家にあつて門外不出であるのに、漸く某所から寫本を借りて公刊した、西澤文庫は大阪市役所へ出願して初めて謄寫を許された。又內閣文庫の古今要覽稿は天下一本と稱せられてゐるのに、靜嘉堂文庫と黑川氏の家から草稿本の一部分を發見して增補を加へ卷數を增した。東大寺要錄は國寶になつてゐる原本も丹鶴叢書も共に一部分闕けてゐるが、會では醍醐三寶院から發見された第二卷を附加へて完備させた。東寶記の如き、數本を對照し了つた後に眞の原本を見ることを得て校訂をやり直し、挿圖も悉く彫りかへた。斯樣に注意しても尙ほ善本を見のがして後悔したことも尠くない。

僞書の一例

古書にはまた往々僞作があつて、專門の學者をさへ惑はせることがある。嘗て或藏書家から借りた平語難語解といふ寫本に、新井君美著と銘打つてあつたのを一應詮議の上、二三の大家にも訊して全集に加へ、活版に組んでから僞書とわかり、急に削除した事などは其の一例である。斯樣の場合には折角の骨折が徒勞となるのみならず、進行頓挫の一原因ともなるのである、活版職工は機械的に働くものとはいへ、誰しも自己の勞力が結果に顯れるを樂しむが人情ゆゑ、組上げた版を廢物にすると聞いては意氣も沮喪するらしく、自然捗取りが鈍る樣になる。

校訂の多方面

以上述べ來つた樣に古書が讀み難く解し難く信じ難いものであつても、古書はどこ迄も古書として敬重する必要がある、今人の臆斷を以て猥りに之れを變改し修補する譯にゆかぬ、と云ふことを了承せられたならば、古書校訂の困難は玆に管々しく陳べる迄もなく誰人にも推量し得られること丶思ふ。只會の刊行圖書の內容が極めて廣い範圍に涉つてゐることを特に斷つておきたい、國史とか經濟とか方面が限られてゐれば、其の道に堪能の人だけで濟みもしやうが、刊行會の本には法制もあれば狂歌もあり、宗敎もあれば演劇もあり、地理哲學あれば小唄淨瑠璃あり、和文漢文俗文記錄文、文躰もさま〳〵で、これ等を完全に校訂するには迚も少數の編輯員だけで間に合ふ筈はない、そこで最初に刊行圖書の或部分の編纂校訂をそれ〴〵專門の學者に囑託することにした。世間には大家の名を冠つた杜撰なる出版物の多いことはかねて聞く所であつたが、刊行會の趣意は營利業者の仕事と違ふゆゑ、擔當者も十分責任を重んずるに相違ないと信じてゐた。さて校訂濟の原稿を見ると、幸田露伴氏の如き其の他二三名家の嚴密なる校訂は除外例として、大抵は言譯ほどの朱を入れたばかり、一枚脫文があつても補つてないと云ふ始末、玉葉の如きは印刷する迄に運んだ原稿を某所から買取つたもので、一冊毎に堂々たる校閲者の名を署してあつたに拘らず、未解決の箇所啻に幾百に止まらなかつた。これが爲めに手配の上に狂ひを生じたこと夥しい。惟ふに今日の學者は活版の便利に忸れて、圖書に對する細心精微の態度を缺いてゐる、一通り讀める丈の原稿は印刷に廻して差閊ないといふ考から、校訂の大切なるを忘れて、實際の仕事は門下生に打任せ自身は名を貸すのみである。此の苦い經驗を嘗めてから、外部の助力に信賴することをやめて、原稿は必ず一旦編輯局に於て目を通すことにした、隨つて困難と多忙の程度は愈〻增加した。

材料の取捨配合

二種の群書類從を始めとして刊行圖書の大部分は新に編纂したものである、そこで材料の選擇校合の困難が伴ふ。塙檢校の時代には獲るに從つて編入して

もよかつたらうが、今日では書物が多いだけに一層取捨に迷ふ、例へば累代武鑑を史傳部に入れておけば便利だが大部に過ぎる、梅松訴陳を詩文に加へたいが時代が離れ過ぎる、岡塲所考は面白くても彩色畫を挿まねば價値を失ふ、某書には著作權の制限があり、某書は完本が無いと八方へ注意を拂ふ上に、採る所は成るべく未刊書と目安を立てゝある故に別名で既刊書に出てはゐぬかと調べねばならぬ。又排列は時代順にすべきか種類別にすべきか、よく〳〵考究せねば決せられぬ。配合の上にも成るべく人を倦ませぬやうにと工夫がいる、續々群書類從の結びに和學講談所御用留抄をつけて、塙が群書類從編纂の顚末を知らせた事や、神田本太平記の卷首に古色掬すべき由緒書の摹影を揭げた事などは、些細の樣でも編纂者は工夫を用ひた積りである。續燕石十種を蒐める時には京阪迄も手紙を飛ばして材料の心當りを問合せ、數百種借集めた中で採る所は僅に四十種に過ぎなかつた。要するに一冊の書籍を編纂するためには、何十倍の圖書を涉獵し、幾倍の寫本を準備したのである。

紙數の制限

折角組立てた案を紙數に制限せられて打壞したことも度々ある。史傳部には德川時代のものをもつと多く入れる筈であり、詩文部の原案には義公羅山仁齋徂徠等の集も加へてあつたが、據なく削除した。善い材料を採集するよりも善い材料を割愛するのは一層むづかしい、既に編纂校訂を了し渾然たる一躰を成した原稿の一部分を削減する時には、編者をして幾たびも歎息せしめた。新群書類從の舞曲は幸ひにして現存の舞の本を悉く網羅することを得たが、同じ方針で集成せられた金平本は三分の二を割愛することゝなり、歷史的に排列された狂歌もその過半を省いて不具のものとなつた。書を愛すること子を愛するよりも甚しいのが學者の至情であるから、一部でも多く存したいと思ふのは道理であるが、編者の勞に背いて英斷の斧を揮ふ自分は、いつも心中大なる苦痛を感じた。

冊數の制限

續々群書類從は二十冊、新群書類從は十二冊の豫定であつた、會期を三年と長く定めたのもその爲である。然るに同一の題名の下には、假令有益でも長く續くものは倦怠の念を起させるゆゑ、續燕石十種の如きを加へて變化を與へたいと云ふ中途よりの希望と、今一つは豫算よりも冊數の增したもの（伴信友全集二冊、松屋筆記一冊、集古十種一冊、各豫算超過）があつた爲めに、兩方から合せて六冊削減した、中にも續々の產業部は七八分通り校訂を了し、系譜部も原稿を準備したのに、遂に廢案となり、數月の勞を水泡に歸せしめた。多大の犧牲を供して占領した地點をば、全軍の戰略上から拋棄するの遺憾は、出版事業の上にも免れ難い事である。戰略は尙ほ他の刊行豫定本の上にも施された、即ち小杉榲邨氏の徵古雜抄は配合の都合に依り單行を見合せ、其の一部分を續々群書類從の雜部に取入れた。今一つは曲亭馬琴の未刊遺稿を集めやうとしたもので、希望者も多かつたが、第一期の總〻〳〵りとして是非總目錄を出したいといふ理由から取替へることになり、また總目錄に添へる積りの解題は日本古刻書史に席を讓つた。古刻書史は會が古書刊行上參考の爲めに古版の沿革を朝倉龜三氏に調べさせた結果として出來たもので、その道の研究には最も必要と信ずる。

以上の外三上參次氏の提案に係る江戸大觀、その他鹽尻、參考太平記、累代武鑑、看聞御記、園太曆、滿濟准后日記、續異稱日本傳、視聽草なども候補に數へられたが、遂に刊行の餘地を得なかつた。取分け塙檢校編纂の史料は第三年度に出す積りで、印刷の見本まで組ませて見たが、會本八九冊にも收まらぬ爲めに、遠い將來に於て大日本史料に編入される時を待つことになつた。

校正の繁劇

校訂と相俟つて活版校正も亦重大なる仕事である。讀み流しの雜誌ですら校正を活版所任せには出來ぬ、況して一字一句苟くもすべからざる古書であるから、或時は五校六校までもとつた。千頁を四遍視かへせば四千頁、これを兎も角も期限に間に合はす爲めには、編輯員は三伏の炎暑にも休まず、雪降る嚴冬の夜にも屢〻深更まで朱筆を握つた。

挿畫

刊行圖書の挿畫は一見しては澤山にも思はれぬが、數へて見ると古今要覽稿だけに千五百近くあり、總躰では木版が五千九百餘、寫眞版が七、石版が四十五に上つてゐる。集古十種は勿論此の以外である。成らう事なら一つも洩さず入れたい希望であつたが、費用と時日との都合上幾分省畧するに至つたのは甚だ遺憾である。併し必要なる限り原圖について摸寫し、彫刻にも念を入れた。此の多數の木版を短時間に彫刻させるも困難であるが、困難はこれに止まらぬ。

挿畫以外の木版

會の出版物は普通有合せの活字だけで植立てる事が出來ぬ、どの本にも古字俗字はいくらも出る、字典に見えぬ字も澤山出る、古今要覽稿を組む爲めには草木禽獸その部門々々によつて、木偏草冠鳥獸偏のあらゆる文字を新に鑄造させた、二百頁の動植名彙を組む時には活版以外の木製字二千餘箇を作らせた、高麗史に至つては字母帳に見當らぬ難字が毎頁三四箇乃至十數箇必らずある、全部二千數百頁の間すべて此の通りであるから最も困つたる。

活版の缺點

氣車は迅くても軌道の外は走れず、自轉車は便利でも阪路を降り得ぬ如く、文明の利器にも短所は伴ふ。昔の木版銅版に比べると今日の活版は非常に便利ではあるもの〻、字母以外の文字を用ひる場合には木版で補はねばならず、符號や小道具も普通のもの以外には殆ど用ひられぬ。淨瑠璃に節調の符號を略したなど、活版に對して已むを得ぬ讓步ながら、あゝ是れが木版ならばと或時は嘆息した。又行草躰を自由に印刷し得ぬのも木版に見る樣な風韻のないのも活版の缺點である。

印刷上の打擊

併し進行の點に於て活版は木版と同日の談ではないが、現今の我が活版界は歐米のそれに比して甚だ心細い狀態にゐる。設備の整頓した活版所が帝都の中

早稲田大學圖書館

に幾箇所あるか、僅に五指を屈するに過ぎまい。大活版所と稱するものも、漢文が多いと云つては辟易し、教科書や雜誌の印刷に追はれると云つては澁滯し、一箇月に刊行會本二冊を仕上げ得る活版所は殆ど稀な有樣である。刊行會に於ては初めに吉川弘文館をして東京活版會社に印刷を命じさせた。此の會社はさほど大規模でなかつたが、當事者の熱心に依つて甚しい延滯もなく、順境の一年を經過して、卅九年十月には大隈總裁邸に於て會の創立紀念會を催した。然るに此の會社が內外印刷會社に合併されてからは、大男の總身に血液の廻りかねる憾あつて、玆に一頓挫を來し、四十一年の春內外印刷會社の紛擾の際、會は遂にこれと印刷上の關係を絕つに至つた。此の會社の內紛が會に大なる祟りをなして、爲めに發行期を再三失したが、それが終に取りかへしのつかぬ延滯を生じたのは甚だ遺憾である。

此の外瀛車火事の爲めに刊行本を燒いた事や、編輯所の移轉やら、グロースの品切やら、細かい事實を云へば殆ど限りもない。

數字から見た成蹟

兎も角も此の會は百難を凌いて第一期の事業を完成し、豫定の通り七十一冊一帖の圖書を出版した、其の成蹟を數字的に並べて見ると、

	冊	種	卷	頁
續々群書類從	一六	三〇六	七三五	一一、二八六
新群書類從	一〇	二〇〇	三八二	六、五六五
燕石十種	三	六〇	一一九	一、九二〇
續燕石十種	二	四〇	五八	一、一〇四
新井白石全集	六	八二	一九六	五、五〇二
近藤正齋全集	三	一四	一一六	一、八三四
伴信友全集	五	四一	一〇二	三、一一二
古今要覽稿	六	一	五八四	五、〇二〇
玉葉	三	一	六六	二、二八二
高麗史	三	一	一三九	二、二〇〇
松屋筆記	三	一	九二	一、七六六
菅政友全集	一	八	二〇	六九四
夫木和歌抄	一	一	三六	一、二九八
同索引	一	一	一	四一〇

太平記 神田本	一	一	二六	六七八
平家物語 長門本	一	一	二〇	七八〇
源注餘滴	一	一	五四	五五八
集古十種	四	一	八五	二、〇三二
灌頂記	一	一	一	三五〇
出版圖書目錄 日本古刻書史	一	二	二	四九、三九一
合計	七二	七六四	二、八三四	

右は概算ではあるが大躰を見ることが出來る、即ち七十一冊一帖の中に收められた者が七百六十餘種、二千八百三十餘卷、頁數約五万頁である。これを七十一冊(灌頂記を別として)に平均すれば一冊七百餘頁に當り、一ヶ月千四百餘頁となる。假りに一日百頁宛讀むとするも、全部讀了には一年半を要する。五万頁に印刷された文字は大凡四千五百万字で、日本の人口と略〻同數だ。若し五號活字(一箇約一分二厘)四千五百万箇を一列に並べるときは、延長四十二里に及び、其の目方は三十一万五千貫目(一箇約七分)となる勘定だ。單に分量の上から見ても五万頁の叢書を刊行した例は稀である。

內容から見た成蹟

七十一冊一帖に收められた七百六十四種の名目は總目錄に記した通りで、又其の著者は不明の分を除いて二百九十餘人である。圖書の種類が廣い範圍に涉つてゐることは、分類目錄を一覽すれば說明を待たずして了解される。分類目錄は略解題の代用ともなる樣に作つたもので、

書目 井 解題　神祇 井 神道　佛敎 井 寺院
耶蘇敎　哲學 井 敎育　和歌 井 連歌
狂歌 井 俳諧　詩文　書畫 井 金石
文書 井 往來　物語 井 小說　言語 井 文字
音樂 井 歌舞　演劇　淨瑠璃
公家法制　武家法制　國史 井 史論
傳記 井 氏族　軍事 井 武器　地理
紀行　外國地理 井 外交　風俗 井 遊戲
實業　博物　隨筆 井 雜著

の二十七門を立て、七百六十四種の圖書を二百餘の項目に懸け分類してあるから、圖書の內容を早見する道具としては、略解題よりも却つて便利である。若

早稲田大學圖書館

し此の上に總索引を出したならば、七十餘冊の圖書は眞に活用の道を得るに相違ないが、今は時日と紙數の許さぬ爲めに、遺憾ながら果すことが出來ぬ。大躰から云へば、刊行圖書の過半は世に稀なる珍書であつて、何處の圖書館にも是れ迄無かつたものも非常に多い。就中長門本平家物語、瑠璃山年錄、灌頂記、東大寺要錄、東大寺續要錄、東寶記等の原本は國寶に指定された貴重書である。

要するに會の出版物は只娯樂の用に供すべきものでなく、又骨董視すべきものでもない。順を逐つて通讀しやうとすれば、疲れるばかりで利益もあるまいが、これを利用する方法を得たならば、百科字彙ともなり歷史辭典の用をもする。譬へて云へば汪洋たる大海原の如く、魚も棲めば海獸もゐる、海草海樹眞珠珊瑚何でもある。然るに渺茫たる水面のみを見て漁利を知らぬ者があつたらば、其の人は寶の山を前にしながら手を空しうする者と云はざるを得ない。

感謝の辭

國書刊行會が幾多の困難に遭遇して、豫定の期間より幾分延びたに拘らず、よく江湖の信用を繫いで出版界稀有の大企書を遂げたのは、決して微力の致す所でない、畢竟德望一代に高き大隈伯爵が此の會を統理せられ、學海の耆宿重野博士が會長の任に在つて總裁を補佐せられた爲めに今日の成功を見たのである。豐川理事によつて會が重きを加へたことも甚だ多い。玆に謹んで感謝の意を表する。

又種々の方面から此の會の事業に援助を與へられた向に對して、自分は感謝の情を禁じ得ない。

善本の獲難いことは前に述べた通りである。然るに內閣記錄課、史料編纂掛、宮內省圖書寮、帝國圖書館、帝國大學圖書館、靜嘉堂文庫等は會の主旨を諒として、貴重圖書の閲覽若しくは帶出を許され、朝井秀實、藤田安藏、田邊勝哉、朝倉龜三、長谷川馭榮、河田羆の諸氏は借覽について斡旋の勞を執られた爲めに、非常の便益を得た。早稻田大學圖書館の圖書を會の需要に充てたことは申す迄もない。

評議員諸氏は選擇に就てそれ〴〵有益なる助言を寄せられ、又は秘藏の圖書を貸與せられた。中にも井上賴圀、萩野由之、吉田東伍、前田慧雲、畠山健、小

杉榲邨の諸氏は續々群書類從の監修者として、幸田露伴氏は新群書類從の監修者として指導の任に當られた。又赤堀又次郎氏は屢編輯局に來つて、材料の選擇配合、例言の起草等につき最も周到なる注意を與へられた。夫木抄索引、刊行圖書目錄も氏の立案によつて出來た。刊行本のだん〴〵整つたのは氏の力が大に與かつてゐる。

水谷不倒氏は演劇歌曲について、牧野謙次郎氏は詩文について、各自編纂校訂の勞を執られ、又大槻如電、山田安榮の兩氏を始め、三浦周行、和田英松、佐伯有義、齋藤惇、和田信二郎、加藤才次郎、神田乃武、田中勘兵衞、鷲尾順敬、保科孝一、穗刈信乃、植松彰、彌富濱雄、澤邊復正、多湖銓作、北村松之助、楢原嘉一郎、鈴木貞次郎、波多野鋏次郎、山內二郎、白石正邦、寺田弘の諸氏は、或は材料を供給せられ或は校訂の勞を助けられた。

經營の上には初めより畠山健氏の助言に負ふ所が少くない。吉川弘文館の當事者林縫之助、相澤敏太郎の兩氏が終始印刷配本の事に盡された勞も甚だ多とすべきである。

西尾豐氏は好意を以て久しく大阪支部の事務を管理せられ、宮原正喬氏は創業の際京都に於ける多忙の事務を擔當せられた。東京の下村房次郎、羽田智證、戸田宇八、鶴岡伊作諸氏、北海道の河東田經淸氏その他は會員募集の事に助力せられた。

以上の諸氏に向つて深く其の厚意を感謝すると同時に、會の內部に在つて間斷なく努力した人々の功勞を爰に表彰しておきたい。功勞の第一には編輯主任たる黑川眞道、矢野太郎の兩氏を推さゞるを得ない。黑川氏は故眞賴博士の令嗣、家學を承けて典據故實に通じ、編輯局の活字典として推重せられ、又三代秘藏の珍書稀籍を惜氣なく編輯用に供せられた爲めに非常なる便宜を感じた。矢野氏は故玄道翁の令甥、史學專攻の文學士であつて常に自ら進んで難物を引受け、孜々として倦まず、黑川氏と共に校訂校正を督勵せられた。次に堀田璋左右、山崎弓束、馬瀨長松、米光關月、小瀧淳、御橋悳言、古內三千代、中山速男、友年龜三郎の諸氏は滿二年以上、或は校訂に或は校正に、各〻其の得意とする所を發揮せられた。村尾元長、羽生芳太郎、近藤鑛三、森岡格雄、渡

早稻田大學圖書館

邊魁、妻木直良、新井昌平、石割松太郎、泉清、中尾清太郎、丸山錦吾、松尾茂の諸氏も編輯に參與せられ、早川純三郎氏は創業の際編輯庶務諸般の事に鞅掌せられた。全躰校訂や校正は極めて變化に乏しい根氣仕事で、長くこれに從事すれば健康を害し易いものであるのに、幸ひに最年長の村尾氏の外一同健在なのは自分の最も悅ぶ所である。最後に山田清作氏は、會の創立以來事務の主幹として、紛雜なる庶務を料理して遺憾なからしめたのみならず、傍ら編纂事務をも兼ね勤勉一日の如く、早稻田大學事業の繁劇なる爲め、會に缺席勝ちなる自分を助け、克く此の業の第一期を完成せしめた功は、特にこゝに鳴らさゞるを得ない。

* * * *

終に臨んで他日の紀念として、最初に發表した趣意書を左に掲げておく。

國書刊行會主旨

日露戰爭は實に振古未曾有の偉績、東西共に比すべきものなし。吾儕何の幸か此の如き邦土に生れ、此の如き盛世に遭ふ。宜しく益々奮つて、以て邦家の隆運に裨補する所なかるべからず。

熟ら此の偉績の由來する所を繹ぬるに、積纍溫蓄、年久しく淵源亦一ならずと雖も、蓋し我が國民性の秀靈特絕、實に之が最大原因たらずんばあらず。而して此の國民性を涵養し陶鑄したるものを求むれば、我が國史之が經たり、我が國文之が緯たりといはざるべからず。果して然らば、國史國文の重んずべき、這回の大業によりて、一層の重きを加へたるなり。帝國の臣民たるもの豈等閑に附すべけんや。況や身を斯學の研鑽に委ぬるものに於てをや。

然るに斯學の資料となるべき我が國書は、古來書寫傳承したるもの多きが故に、其の世に頒布せらるゝこと極めて尠く、中には原作者の手稿のみに止まりて、他には一部の謄本も無く、所謂天下一本と稱せらるゝ者も少しとせず、又同一の書と雖も、異本類本極めて多く、審かに對校檢討するにあらざれば、容易に其の何れか正僞を鑑別する能はざるものあり。殊に珍書と稱せらるゝ類は、圖書館又は名家の書庫に秘藏せられて、斯道に熱心なる者と雖も、容易に閲覽することを得ず。又德川氏時代に於て、一たび刊行せられたる者に在りても、其の部數限りありて、それすら蠹蝕散逸、世に存するもの洵に少く、偶これあれば、則ち市價甚だ貴く、之を得ること頗る難し。況や卷冊浩瀚にして、出納閲覽に多大の不便を感ずるものも亦多きをや。是實に我が國民が自國の精華たる國書に對する現狀なりとす。

是に於て乎、近時國書保存の必要亦有志の論議に上り、之が方法として、豫約法又は其の他便宜の方法によりて、國書の出版翻刻せらるゝもの相次ぎ、一時二十餘種の多きに上るに至れり。其の事たる洵に盛世の一美事たるには相違なきも、購讀者は志ありて、資力の伴はざるものあり。或は出版の多種多樣なるが爲、其の去就撰擇に迷ひ、逡巡躊躇の間に豫約の機會を失するものあり。從ひて其の結果を見れば、何れも十分なる目的を達する能はず、以前の缺陷は依然として存せり。是學者の常に憂とる所、而して又帝國の一大憾事にあらずや。

本會茲に鑑みる所あり。聊か帝國の文運に裨補する所あらんと欲し、國書刊行の方法に就きて、百方研究する所あり、或は學者に聽き、或は書肆に質し、或は朝野の希望を探りて以爲く、至廉至便の方法を以て珍貴又は浩瀚の國書を普及せしめんと欲するには、一大會を組織して、會員を天下に募り、月費の制により出版實費を以て、會員に頒つに若くものなしと。是に於て斯道の學者名家の贊助を得、即ち會員を天下に募集し、先づ三年間を第一期とし、出版實費を以て從來未だ曾て企畫せられざる珍貴浩瀚なる國書の普及を圖らんとす。而して第一期完了の後は更に第二期第三期と繼續して、我が國書の大統一を圖るを得ば、我が帝國の文運に貢献することも亦鮮少ならざるを信ず。

本會の會則、出版の豫算、頒布の方法等は下に詳記せる如く、則ち假りに會員を三千名とすれば、毎月會費金貳圓の支出に對して、三年間に約八萬五千頁の圖書を頒布することを得べし。此の如き便法は、從來の豫約出版に於て見る能はざりし所

早稲田大學圖書館

なり。想ふに國書の保存普及を併行するの最良方法は之を措きて、復他に覓むべからず。而して之を實行するの時機は、唯今日を然りとなす。斯道の學者、研究者、同好者は勿論、苟くも帝國臣民として、此の秀靈特絶なる我が國民性を涵養せる國華を藏せんと欲せらるゝ大方の諸士、幸に此の擧を賛成して、本會に加入せられ、名家の祕書、貴書を以て、各自の文庫を飾らるゝに至らんことを切望して已まざるなり。依りて左に本會の特色を明にし、出版の豫算を揭げ、以て同好諸士の參考に資す。

此の刊行顚末は最終刊に揭げる筈のを都合に依り繰上げた

明治四十二年三月

東京帝國大學圖書館

早稲田大學圖書館
早稲田大學圖書館

以下
15丁
白紙

東京都立中央図書館

昭和四九年度図書合